
とある学生の時間操作

8 8 マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学生の時間操作

【Nコード】

N1460N

【作者名】

88マン

【あらすじ】

気付いたらエクトプラズムになっていた主人公、それは第二の人生の始まりだった。

学生に戻った彼はどんな生活を送るのか…

初投稿作品です

月×日

突然だが、運命というものを信じるか？信じててもいいし信じてなくてもいい。運命なんて信じてない僕から言わせてもらうと、この状況は理不尽だということだ。

僕はごくごく平凡な会社員だった、それがつい10分前の状況、今はごくごく普通？のエクストラムだ。どうしてこうなった。

まあ、直接的な原因としてはわかりやすい。バスに轢かれたのだ、バス停でバスを待っていて漸く来たと思ったら何故か僕に向かってきていて、何故かそのまま轢かれ、そのまま死んだ。何故だ。

そして死を体験しているという今日この頃。フワフワと浮いている自分。ふむ、よくみれば僕以外にも結構見える。何がと言わないが…

でも死んじやつたか。心残りは特に…ああ、昨日必死になつて考えた企画が。死に切れねえ、せめて没喰らってから死にたかった。

僕がくあああ、と悶々していると辺りから変な気配がするのが感じ取れた。何だろうと見渡せば辺りにいた同類さんが皆さんに消え去っている。何が起きるんだ？僕は乗り遅れた？

そして目の前に突如として現れた矢。矢？や？YA！などなどパニックっている間に頭をうち貫かれていた。痛みは無かったけど精神的に辛い。

うち貫かれた瞬間僕は引つ張られるように上に昇っていった。はは

あん？これが昇天だなあ？という思考を持つてぐんぐん引つ張られて気づけば眼前には立派な男が浮いていた。なにこの人、ダンディズムに溢れすぎて懂れる。

「ふむ、何と説明したらいいのか…すまなかった」

何が？と口にだそうとしても声は出ないこのエクトプラズム。不便だ、どれくらい不便かっていうと二千円札くらい。

「ああ、思考さえしてもらえばこちらで読み取れるのでな。でだ、謝っていた理由についてだが。私はお前を殺してしまったのだ」

え？僕が死んだのはバスに轢かれたからでは？ああ、運転手？ならわかるよ。これから大変になっちゃうね。ご愁傷様。

「あのバスだがな。本来なら横倒しになって客が2〜3人怪我するだけだったんだが私が介入して倒れないようにしたのだが…角度を間違えてな、お前の方にバスがいつてしまったんだ、すまなかった。」

え？さらに、へ？何？別に死んだのは企画書以外別に悔いないからいいけど。何？あなた神様だとも言っの？

「ああ、GODだ。比較級で表すならGod est位は神をやっている。因みに企画だが、あのまま提出していたら後悔するくらい怒られているはずだ」

のおおお！僕の苦勞を返せ！？ていうか死んでよかったかも！いや、死んでよかったのか？

「そうか、そういつてもらえると私も助かる。因みに聞くがもう一度人生をやり直さないか？」もう一度？でもあのなんの楽しみもない現実より今の方が楽しいかも。

「ふむ、このまま浮遊霊として存在しつづけるといずれ精神だけ残され永遠に意識を囚われて地獄よりつらい事が待ち受けているのだが…考え直さぬか？」

それはちよつと嫌だなあ。じゃあ異世界とかないの？何だったらこのことは違う方面に発達した平行世界とか？

「ふむ、そうだなどうせだから望み道理にしてやろう。お前はとあることを知っていたな。学園都市にでも行ってみるか？」

いけるの？っていうか妄想の世界じゃないの？

「妄想だろうが世界は世界だ、G o d e s tの私に不可能はあんまり無い」

ああ、最上級でも無いとは言切れないんだね。何だか親近感が沸いて来たよ。

「そうか、私もお前の評価はなかなか高いぞ、しゃべっていて楽しいってのも有るがな」

有り難うござい。

「む、その呼ばれ方は初めてだな。新鮮でいい。と、話が脱線したな。どうだ行くのか？」

そうだね、せつかくだし行くよ。あんまり覚えてないんだけどね。

「わかった、それではこの扉に入るといい」

言っが早い^だか真後ろに扉が現れ開く。そそくさと入らせてもらうと扉はゆっくりと閉まっていた。

「ああ、言い忘れていたがその世界は私の管轄外というか無法地帯だ。お前の体^だに何かしらの変調が見られるかもしれんがあまり気にするな。」

え？

3月×日

これが転生か…

そう実感したのが僕が生まれ変わったとき、扉に入ってすぐだった。

赤子になっており喋れず、立てず、泣きわめく。本当に自分の体かと疑ってしまう位だった。あ、おもらしはもう勘弁してください、何が悲しくて精神年齢的に成人がおむつを変えられなければならないんだよ…つらい。

それだけじゃなかった、あぶぶーと多少は感情表現もしやすくなってきた頃、自分は物凄くよだれを垂らすのだと気付いた、あらあら何て口を拭う母親。もうね、心でマジ泣きですよ、情けなさ過ぎて。

そんな辱めもある程度成長してくれば問題はなくなった。むしろいい子だと言われることの方がおい、まあ当たり前なのだが…とにかく幼少期は黒歴史ということだ。

そして小学校に入るくらいに気付いたのだが…僕はとてつもなく童顔だろう。いやまあまだ小学生だからしょうがないと思う勿れ。女顔だった。見た瞬間鏡を疑い鏡に異常が無いと見れば6年ほど付き添った息子、もとい相棒は！と疑いトイレに駆け込んでしまうくらい女顔だった。パツチリオメメにボブヘアー、うん小学生だからと信じてたい。信じて良いんだよね？お父さん、お母さん。

まあ、ただ女顔なだけならしょうがないとして。女顔に気付いて小学校に通いはじめると今まで特に気にすることもなかった服に違和感を覚えた。これ…女物…と夜中に泣いたことは決して忘れない。

だが何も言えずそのまま親を野放しにしたのがいけなかったのか、中学に上る頃、制服を買って来た母親に絶望してしまった。それは明らかにスカートブレザーの制服だった、刺繍をみれば霧ヶ丘女学院とかかれていた。

お分かりいただけただろうか、僕は何故か学園都市の霧ヶ丘女学院中等部に通わされているのだ！もう三年で卒業間近だが。何で三年間誰も気づかない…

ちなみに今の髪型はポニーテール、理由は腰近くまであつて長くて邪魔だから。何が悲しくて髪の毛を伸ばさなきゃならなかったのか…。お母さんのせいなんだけどね、髪切つて来るつていうと包丁持ち出して「貴女をそんな子に育てた覚えはない、貴女を殺して私も死ぬ！」なんて脅して来るからだ。まあジョークなのか本気なのかわかんない目をしてたから髪が伸びてるわけなんだけど。

そんなことを色々と思い返していたが今は学校。まあ学校はもう終わるんだけど、さあ帰ろうかって思い鞆を持つ。

「かなちゃん今帰るの？一緒に何か食べに行かない？」

「うんいいよ」

かなちゃんとは悲しいが僕のことであり、僕の名前は神城かなめという。かなめがまだ漢字だったら男らしかったのにと常々思う。そんな僕を誘ってくれたのは鈴木さん、どこにでもいそうな名前だが容姿もどこにでもいそうな感じた。素朴がいいよね。下の名前覚えてないけど…ほら、男ってあまり下の名前使わないじゃん？

「かなちゃん、どこに行く？」

「ん〜ケーキでも食べに行こうか？」

「あーじゃあ新しく見つけたお店が有るの、そこ行ってみない？」

うんと頷き肩を並べて歩きはじめる、鈴木さんの身長は152位。くそうこんなはずでは。不意に気付いたことがらによってヘコムがそれを表さずに喋りながら歩く。まだまだ、成長期はこれから！

「ここ？」

「うん、可愛いよね？」

そうだね〜。なんて答えながら外観を見るとなるほどなと思わされた、見た目は落ち着いたカフェで所々に配置された花が強弱を作っており見ているだけで楽しませてくれる、そんな店。

店内に入ると結構しる人ぞ知る店らしく下校ラッシュのこの時間帯でも座るスペースはちらほら見えている。隠れた名店なのかな？通りから一本入った場所に有るから口コミじゃないと入りづらい、と言うよりわかりづらい。なんて考えているとウェイトレスさんがメモ帳のようなものをもって来ていた、オーダーでもとってくれるんだろつ。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「ん〜と、紅茶とモンブランで」

「私も紅茶と…ザッハトルテで」

「かしこまりました、少々お待ちください」

僕はモンブラン、鈴木さんはザッハトルテを頼んだ、オーダーを取り終わったウェイトレスさんはキッチンに消えて行った。

「前から思ってたんだけど…かなちゃんって甘いもの得意じゃないの？」

「しつこい甘さのはちょっと…でもモンブラン見たいな残らないのは好きだよ？」

ふーん、とジト目で見られても。得意じゃないんだからしょうがない。僕は辛党だ、辛ければ辛いほど良い。稀に辛い物好きはマゾヒストなんていう頭のおかしいのがいるけどそれは嘘だから気にしない方がいい。カプサイシンは…辛いものは正義だ。

「ずるい…」

「え？」

脳内辛いもの談義で集中を欠いたのか鈴木さんの話を聞いてなかった。

「だってかなちゃんいつもいろんな子と食べに行くのに…全然太ってない…」

「あはは…甘さ控えめのばかりだからじゃないかな？後は適度な運動？」

その怖い目止めない？…ほんとに怖いから。人の負の感情で人が死

ぬなら僕は今生きていないだろう、そんな目。

「まあ、かなちゃんには今度陰湿な嫌がらせが行くと思うけど私じゃないからね？」

「いや、そういうのはやめよ？僕きつと泣くよ？」

「なら私が慰めてあげる」

「犯人じゃん……」

あははと他愛のない話で盛り上がってそろそろ帰ろうかという時間、店の前で別れると暗くなりつつ有るが近道として路地裏に入った。勿論鈴木さんは人通りの多い通りから帰った。

まあ選択ミスだと誰でもわかるだろう。僕がこんな格好でこんな顔じゃなければそんなことはなかったんだけどね！

「はい？ケ丘のお嬢さんがどうしたのかな？」

「いえ下校しているだけです」

「じゃあさじゃあさ俺らと遊ばない？」

「帰ってやらないといけないことが有るので……」

あつという間に前後2人に囲まれた、まだ路地入って10メートルもしていないのにだ。大通りを通る人は見て見ぬ振りをしている。それはそうだろう僕だってこんな場面見たら素通りする自信が有る。

というかする。

「あの…急いでるんで…」

前の男の横を通ろうとするが腕を捕まれてしまっ、振りほどくだけの力は僕にはない。貧弱なこの身体が今は憎い。まあ前世も貧弱だったんだけれども。

「おっと、つれないね。でも捕まえたことだしどっか行こうか？」

意味がわからない。頭沸いてるんじゃないの？だからモテないんだ！って言えるだけ強ければどれだけ楽か。と言うよりこういうのに絡まらない容姿がよかった、それなら今霧ヶ丘女学院の制服着ていないしね。

「あの、離してください、人呼びますよ！」

「その前に黙らせることも出来るんだけどな」

腕を掴んでいるほうの男が片腕で口をふさいで来る、本当に気持ち悪い。というより本当にピンチだ尊厳とか貞操とか色々。

「ジャッジメントですの、その方を離しなさい」

声がする方を見ると一人路地の入口に立っていた。いまだき珍しい正義感に溢れた人だ。と思ったけどジャッジメントだった。というよりこの喋り方、白井黒子だっけか、原作に関わって来ちゃったのかな？

「っけ、これが見えないかな？君は何にも出来ないわけ、わかる

「？常盤台のお嬢さん」

捕らえた僕を人質にしているからか焦りはないようだ。ただ超能力を使えないからか使わないのか、手の内は隠しておきたいのか、能力については何も話さない。それが正解なんだけれど、僕的には白井さんに有利に事を進めてほしい。

「そうだ俺とお前で一人づつにしようぜ？お前はそっちのヶ丘の奴で俺はこっちの常盤台の奴、どうだ？」

僕を拘束していないほうの男が切り出した、強引過ぎて白井さん呆れてるけど。

「そうだね、そうしようか？ダブルデートもありだよな？」

僕に聞くな、男とデートするつもりは全くない。そんな性癖はしていない、女装している僕が言うのもなんだがな！

「てなわけでお前はこっちだ！」

僕の手を掴んでいない方の男が強引に掴みにかかる、まあテレポーターだし大丈夫でしょ。何て思っていると僕の背後、つまり腕を掴んでいた男が脳天を蹴られたらしく地に伏した、まあ僕も巻き込まれたといっておこう。

「てめえ！ぶごお！？」

相方をやられていきり立ったもう一人が白井黒子に殴り掛かるが同じく脳天を蹴られて叩き伏せられていた。

「ふうこれで片付けましたわね、あなた怪我はありませんの?」

「はい、大丈夫です助けていただき有り難うございました」

「いいんですよ、これも私の仕事ですし」

不意に白井さんの後ろの奴が立ち上がって手を振り下ろしていた。

「危ない!」

普通なら当たっているだろうタイミング、でも当たらなかった。僕が白井さんを押して倒したからだ。だが、振り下ろされた腕は僕の頭に当たり僕の意識は薄れていった。

うすれいく意識の中で白井さんが男二人を拘束しているらしいのはわかった。

6月×日

白井黒子に助けられてから三ヶ月くらい経った、案の定性別を間違われていたが：諦めるべきなんだろうか？いやいやそんなことはないはず、男らしい服装をすればみんな男と認めてくれるはずだ！こんなことを思っている時点で負けているのかもしれないけど。え？なにかって？聞かないでもらいたい。

それに僕ももう高校生だ、阿保みたいな格好なんてしてられない：何て思っていた時代が僕にもありました。何で僕はまだ霧ヶ丘にいるんだ？どうせ僕は無能力者判定しか出されていないのに。これは僕が自分から行動しないとイケないのか？なら僕はこの学校を転校するぞー！

「ダメだ」というわけでまずは担任に話すのがいいと思い話したのだけど、正直ひどい。僕の話しを頷いたり同意しながら聞いていたわりにどうですか？と聞けば両断、話すのが阿保らしく感じる。けどここは諦めたらダメだ、どうにか言い聞かせないと。

「なんでですか？無能力者の僕がここにいれば霧ヶ丘の校名に泥を塗るだけじゃないですか」

「機械的には無能力者判定だろう。神城、お前には時間操作があるだろう？」

「まさか、なに言ってるんですか？僕がそんなすごい能力持ってる訳無いじゃないですか」

「嘘をつくな、これは極秘情報なんだが：ツリーダイアグラムの演

算結果から答えが出ている。それにいくら能力測定しても結果は出ないだろう、真面目に取り組まないんだからな」

全部知られていたのか：ある意味これで納得できたよなんで僕：男がこの学院に入学出来たのか。というかツリーダイアグラムってそんな個人情報まで：それってどうなの？

「そこまで知っているならなんでここをやめたいのかわかるんじゃないですか？」

「ああ、だから学院長はお前が自ら辞めたいと言ってきた時は認めてやれといていた」

「じゃあなんで！」

「お前がやめると給料が減るからだ」

「失礼しました」

言い終わる前には歩きだしていたが退室前に一声をかけた：のが間違えた。

「まあまで、先生はお前がやめると給料が10%もカットされてしまうんだ、どうだ可哀相だと思わないか？さらに先生には妻と二児の子供がいるんだ、生活が大変だろう？先生を助けると思って霧ヶ丘に残りなさい」

肩を掴み熱弁する担任、正直どうかと思うんだけど…

「離してください、僕は転校するんです」

「ええい！お前の血は何色だ！」

「どう考えても赤です」

全く、何なんだこの担任は、そっちの血は色が違うんじゃないか？

「くそ、覚えておけ、うちが家庭崩壊起こしたらお前のせいだ」

「先生の家庭のために自分を殺したくないので」

「なら今は死んでいるんだな？」

「うわー！先生何か家庭崩壊のあげく多大な慰謝料で首が回らなくなればいいんだ！」

振り切り退室する、後ろからちょ！おま！何て声がするけど僕は知らない、僕は早く学院長のところに行くんだ！といっても学院長室は今話していた職員室の隣だから何分もかからない。

「失礼します」

ノックをし、声をかけるとどうぞ、と声が帰ってくる。ドアを開け中に入ると机の上に何か書類が有るのが見えた、気にはなるけど僕には関係ないだろう。取り敢えず本題に入ろう。

「学院長先生、転校したいのですが」

もう高齢の女性、おばあちゃんといった方がいいくらいの学院長先生に単刀直入にいう。予測していたのかふわりと笑いかけてきた。

「どうしてもですか？」

「はい、これ以上霧ヶ丘の校名に泥を塗ることは出来ないのです」

「そんなことはないのですが…分かりました、この書類に記入しておいてください、取り敢えずそれで転校手続きは出来ますからね」

「有り難うございます学院長先生、お世話になりました」

ペコリとお辞儀をし退室する、とにかくこれで僕の男らしさ倍増計画は軌道に乗ったと思っていい…のかな？

7月1日

七月、夏だ。

だからなんだと思うけど僕にとってはやっと解放された夏だ。

そう、僕は見事転校し終えたのだ!!!

服装も今は私服で制服はまだ無いけど…買うの一苦労だったけど、とにかく僕は男物の制服を手に入れたのだ!

そうそう、転校先は、僕が無能力者だからもちろんランクの低い学校、えと…何て校名だったか? まあ忘れちゃったけど無名校だ。制服がまだ無いから学校には行っていないけど学校が変わったから勿論住む場所も代わる。

まあこう言っては何だけど…前の方がいい寮だったかな? 広いし、綺麗だし。

…そんなことより隣に挨拶しに行かないと。

チャイムを押し待つ、ピンポンという何処にでも有るようなチャイムだ。

「はいはい、今出ますよ」と

「こんにちは…今日から隣でお世話になる神城かなめです。よろしくお願いします」

とりあえず、挨拶はすませたものの…隣が上条さんでどうなの? 僕にリア充生活でも見て血涙を流せと? 変なところで巻き込まれなくて良いんだけど…まあ過ぎたことを気にしていられない。そう、過

きたことなんだ。

「あ、ああよろしく。俺は上条当麻だ。お隣りさんってことは転入生なんでせうか？」

「あはは、面白いね。この時代に古語を使うの何か上条君ぐらいじゃない？」

「む、上条さん以外にも古語マスターはいるはず、いやいるべき」

「どつちななの？まあいいや、これ引越しそば、食べてよ」

昨日買ってきた1パック98円の蕎麦を渡す、こんなのは気持ちの問題だから安くていいんだよ、いいん…だよな？

「じゃあこれで、明日から同じ学校だから見かけたらよろしくね？」

「ああ、よろしくな」

扉を閉めて別れる、まさか上条当麻の学校とはね。それに隣の部屋とか…原作に食い込めてことなのかな？どうなんだろう教えてごっつい（笑）

なんて考えながら挨拶周りを続ける、かなめが知ることはない。上条当麻がああ蕎麦に救われていることは。なんてね、流石に貧乏学生でも不幸体質だとしてもそこまで切羽詰まった生活を送っている訳無い。よね？

「取り敢えず挨拶周りは終わりかな？上条家の隣に住んでいる筈のつっちーは居なかったし…」

明日から男物の制服と思うとついにこの日が来たかと年甲斐もなく
(精神年齢的に) ワクワクする。

今日はぐっすり寝よう。

寝すごした

「初日から遅刻とか、もうだめだせーの」

『不幸だああああ！』

「お隣りさんもか…というか僕の台詞とるなよ」

なんて余裕をかましていられなくなったので取り敢えず学校に電話、
言い訳？迷ったとか言っておいたから大丈夫。というよりはやく出
よう！

バン！と扉を開け最速のスピードで鍵を閉める、約2秒。重い衝撃
が隣の住人をKOしてしまったらしい、急ぐのをやめ急いで起こす

「ごっご、ごめん。大丈夫？」

「いつつ、大丈夫大丈夫…ってあああああ！学校！時間は！」

急ぎ携帯の時計を出し見せる。途端絶望一色の顔に。というより転
ぼうが転ぶまいが時間はそんなに変わらないはず、あれかな？責任

転嫁？まあ僕もともと間に合うとは思ってなかったし助け合いって大切だよな？

「終わった、絶対終わった…もう間にあわねえ不幸だ…」

「だ、大丈夫僕にいい考えがあるよ！」

え？といった顔でこちらを向く。藁を掴む想いで僕の考えに耳を向けているのだろう。

「実は僕、さつき学校に遅刻するって電話したんだ、理由は迷ったってね？そこをたまたま上条君が見つけてくれたてのはどう？何なら絡まれていたところを助けてくれたとかでもいいよ？」

「おお…女神が見える…今日は不幸じゃなかった」

何を崇めてるのさ？取り敢えず大丈夫だとしても急がないと…遅刻は遅刻なんだから。当麻を引き起こし走り出す、夏の朝からダッシュは精神的にも肉体的にも辛いものがある。朝とはいえ暑いしね。後女神言っな。

そんな訳で学校についた訳だが…取り敢えず当麻は軽い注意だけで済んだ、まあ絡まれていたところを助けた何て言われたら教師としては強く出れないだろう。僕？僕は勿論怒られたさ、まあ慣れない地域ということでそこまでいわれなかったけど。

「じゃあ神城ちゃん教室に行きますよー」

担任の月詠小萌先生についていく。うん、どうみても小学生です本当に有り難うございました。永遠に子供料金で生活できますね。

なんて考えているうちに教室につく、よく考えたら当麻と同じクラスか…つつちーとか青髪ピアスとかいるのか…面白くなりそうだなあ、ぼつちにさえならなければ。そんなことを考えてると教室に着いたらしい、外で待っていてくれと言われたので待つ。なんだか緊張してきた。

「えー本来なら朝のHRで紹介するはずだったんですが、少々立て込んでおりまして紹介するのが今になってしまいましたー。皆さん遅刻なんてするもんじゃないですよー？じゃあ神城ちゃん入ってきてくださーい」

な、なんて入りにくい空気を作るんだ…あれか？嫌がらせか？嫌がらせなのか？そんなに遅刻がいけないことだったのか？…うん、いけないことだったね。でもこの仕打ちは酷いんじゃないのか？もう登校拒否したいくらいだ。

怖ず怖ずと扉に手を掛けた瞬間、開いた。目線が集中する。

「神城ちゃん！？」

小萌先生の声が後ろから聞こえるかまうものかという感じに僕は逃げ出そうとした、しかし手を捕まれてしまった。

「何で逃げるんですかー？早くしないと授業を始められないのですかー」

笑顔だけど笑ってない、笑ってないよ先生。

「う、ごめんなさい」

素直に謝り仕方なく教室に入る、目を見ちゃいけない、見ちゃいけない。

「えっと…神城かなめですこれからよろしくお願いします」

ペコリとお辞儀をし怖ず怖ずと反応を待つ、反応無し…なにこれ？もうイジメ？イジメなの？そんな目をしながら小萌先生を見る、目を反らされた…なんでよ！？

「神城ちゃんに何か質問ある人は居ますかー？」

小萌先生の声が教室に響く、それに反応して身長180cmはあるうかという青髪の男子が手を挙げ聞いてきた。

「えっと、何で男子の制服着てるんやー？おかしい？」

「えっと「お兄さんのお下がり」ですよ」

《ウヲオオオオ！？》

ちよ、何で遮るの？という目を向ければ目をまた反らされ口笛を吹きはじめる…ちくせう。あ、僕にも古語マスターとしての資質が垣間見えた。そして男子、五月蠅い。架空の兄貴の妄想でもしているの？ガチムチだらけかこの学校は。特にニヤーニヤー言ってる土御門と青ピ。

「彼氏はいるのかニャー？土御門さんの隣はいつでも空いてますですよ」

「いる訳無いじゃないですか僕お《ウヲオオオオ！？》ですし」

五月蠅い！人に質問するのか叫ぶのかはつきりしてくれ！

「ほかにありますかー？ないですね？じゃあ神城ちゃんの席は…上条ちゃんの隣が空いてますねー？そこを使ってください」

よく聞くけど隣が空いてるって表現おかしいよね？もし風邪かなんかで休んでて次の日違う人で全く知らない奴が座ってたらかなり焦ると思う。

「なあ、かみやん席かわらへん？」

「黙れエセ関西人。神城、朝はサンキュな、助かった」

隣に座ろうとしていた僕に見上げるように感謝して来る。青ピも僕の顔を見ていた。

「気にしないでよ上条君、後僕のこととはかなめでいいよ？」

「じゃあ俺のことは当麻でいいぜ、よろしくな」

「わかったよ当麻、こちらこそよろしく」

隣に座り前を向く、後ろから青ピのこえが聞こえ振り向く。

「僕のこととは「青ピ君小萌先生が…」」

教壇には笑顔の小萌先生が。ああ、今日もかわええなあとかもっているのだろうか？キモい。

「今日は生卵が立つまで帰っちゃダメですよー？先生は忙しいのでビデオに撮っておきますからねー？」

怒ってる怒ってる、やっぱり真面目が一番だつて。のおおこれが放置プレイやんなーかみゃん羨ましいやろーなんて声は聞こえない。聞こえないけどこれだけは言っておこう。

「最低…」

「かなめ、エセ関西人はほっとけ時間の無駄だ」

「うん」むむむ、無駄って何やー！それに僕はエセ関西人じゃ「青ピ君」

チヨイチヨイと前を示すと青ピは黙った。まあ庇護欲を誘う小萌先生が泣きそうなのだ、フェミニストの青ピが黙らない訳がない。

そんなこんなで僕の男としての初日が終わった。

本当に何も無かった、拍子抜けしたけどよく考えたら前世では普通の平凡人生だったから慣れていたんだろう。

7月6日

今日は休日、のんびりまったり過ごしていても、町をブラブラ歩いていても何も言われない日。

まあ、平日歩いていても特に何言われるでも無いみたいだけど…スキルアウトシリーズ見てたら…ねえ？え？スキルアウトシリーズって何かって？僕がつけたんだよ言わせんな恥ずかしい。まあそんな事言っけても僕は部屋でゆっくりしてるんだけどね。

「かなめちゃん、どっかいかへん？」

「ひまだぜいひまだぜい、どっかいくぜよ。このひと夏の青春を満たすために街に繰り出すべきにやー」

「…なんでいるの？」

僕は僕の家に入れた記憶が無いんだけど…何故かつつちーと青ピが入ってきていた、確かにゴミ捨てにいつて戻ってきて鍵をかけたは無かったけど、入ってくるってどうなの？

「いやーかみやんに聞いたら隣らしいやん？こりゃ行くしか無いって話になっててん」

「いや、不法侵入って言葉知ってる？」

「固いことは気にしないで行くっぜい」

法律を気にしないっていうのはどうかと思うけど。

「まあいつか…で？つっちー、当麻は？どこ行っただの？話を聞く限り一緒だったみたいだけど」

二人は見えるけど当麻だけいない、トイレかな？キョロキョロして
いると不意に玄関が開いた

「てめえら！人の家で家主を簀巻きにしてエアコン切ってくなんて
悪魔か！」

「しくじったぜい…もっと本格的に縛るべきだったにやー」

「僕も暖房を入れておくべきやった」

「鬼か！」

鬼だよこいつら、間違いなく。僕の部屋はエアコン効いてるからいいけどこれ止まったら自害か衰弱死を選ばないといけなくなる…割と本気で。

「じゃあ僕ちよつと出掛けて来るから、ここにいるならエアコン掛けていくし、どうする？」

「もちろんついていくにやー」

もちろんで…僕がデートだったらどうするつもりだよ…まあそんなことはないんだけどね！なんだか泣きたくなってきた。

「いや。つっちー、残ってかなめちゃんのあれやこれを…」

「当麻」

「おう」

当麻に一声かけてアイコンタクトでやることの分配をする。僕は押し入れから布団（冬仕様）を取り出し広げる、当麻は座っていた青ピを蹴り布団の上に転がし巻きはじめ。その間に僕はビニールテープを取り出した。

「何するんやー！やめてやー！ほんまマジで！あ、でもこれかなめちゃんの布団やんな？なんだか興奮してきたで！」

「この布団新品だけど捨てなくちゃ…もったいない」

「なんでやねん！」

こつちこそなんでやねんなんだけど。まあいいやとりあえず青ピを簀巻きにして、暖房を入れた当麻の部屋に3人掛かりで投げ入れた。さりげなく運ぶのを手伝っていたつつちーの世渡り上手さが伺える。ぎゃふんとかは聞こえない。リモコンで暖房を効かせ放置。完全に良い子は真似しないでねっていうテロップが出るような光景だろう。

それも終わり僕の部屋に戻って来ると再度確認をとった。

「ホントについて来るの？あんまり楽しくないかもよ？」

「俺は暇だし付き合っぞ？」

「取り敢えず外に出ればラブコメるかもしれないぜよ、チャンスは

いくらあってもいいにゃー」

当麻は本当にヒマなんだろう、つつちーは愛に餓えすぎている。舞夏とイチヤイチヤしてれば良い。何たってシスコン軍曹なんだからまあ二人ともついて来るってことはわかった。

「わかった、えーと…着替え着替え」

クローゼットを開き物色。何を着て行こうか。

「わ、わりい！俺も準備して来る！土御門行くぞ！」

「かみやん俺はべつにこのままでm」

うん、いいフィードアウトだ、ていうか何であんなに焦ってたんだろ。何か忙しいのかな？って

「うああああ！服があ！服がないい！」

クローゼットをどれだけ見渡しても服がない。そうだ…朝洗濯しちやっただ…出掛けないと思って…全く連絡は前日までにほしいよ…私服がダメとなると…

「制服か…パジャマか…」

しかも制服にいたっては高校の制服は一日汚れちゃったから霧ヶ丘のしかない…でもパジャマなんか着て行けないし…くそう…せーの

「不幸だー…」

怨むぞ…今朝の僕…

「ごめんおまたせ」

「あり？制服？ってかなめって霧ヶ丘だったのか！」

「そんなことよりかみゃん、やっぱり神城かわいいぜよ」

「つつちー、巻いてあげようか？」

「え、遠慮しとくぜい…」

全く、冗談でもムカツとする。僕は男としての生き方に沿って生きているのに…今の恰好？夢だよ…

「で？何で霧ヶ丘のなんだ？」

「実は私服は洗っちゃって…高校のは昨日クリーニングに出しちゃったし…これかパジャマしかなかったから…やっぱだめだよね？」

「い、いやあんまり気にしないでいいんじゃないか？常盤台だっていつも制服だしな」

「取り敢えず早く行こうぜい、ラブコメが俺を待ってるぜよ」

「そうだね、じゃあ行こうか」

暑い…太陽が喧嘩を売ってきてる…誰か買ってやれよ。僕は遠慮しておきます。

「で？どこに行くんだ？」

「ちょっと風紀委員の知り合いに呼ばれてね、僕もよくわかんないんだけど」

「大丈夫なのかにゃー？」

そんなこと言われても僕にはわかりません！だって相当に急な話しだったし。

「その喫茶店にいるはず何だけど」

「かなめさんここですわ、ってあら？どちらさまですの？」

「急に押しかけてきた無礼者って所かな？」

「ちょ！それはひどいぜよ！」

「おれもかよ！」

そこは…一蓮托生ってやつだよ当麻。

「わかりましたの、それではかなめさんいきますわよ」

「え？」

気づいたときには僕はデパートにいた、何を言ってるかわからねえとry

ふう、落ち着け僕、落ち着くんだ。ポルナレフに成り切ってる場合じゃない、現実逃避するな。

「かなめさんどう思いますの？どの下着ならお姉様を陥落できますの？」

そう、ランジェリーショップにいるのは紛れも無い現実なんだ。

「どれって言われても…こんなこと聞くのはあれかもしれないんだけど…いつもはどんななの？」

落ち着け、落ち着くんだ。早くて確なアドバイスして早く解放されればいい…それで全部解決だ。

「そうですわね…この黒のレースとかですの」

凝視はいけない、想像もいけない。YES脱出NO囚われ、何だとうしてしまったんだ僕の頭は変なことしか考えてないぞさっきから

「なら逆にかわいい系はどう？白井さんが言うには幼いのとかかわいいのが好きなんでしょ？普段とのギャップから気になって仕方なくなっちゃうんじゃないかな？」

「それですわ！何という策士何という知略。私貴女のお友達として誇りに思いますわ！」

手を掴みブンブン振る、取り敢えず手に持った下着を置こうか。

「ならこのゲコ太とか言うよくわからないのと…後はどれが良いのでしょうか…選んでくださる？」

何でもいいって…取り敢えず何でもいいって。

「これでいいんじゃない？」

「クマ、ネコ、カエル…いろんなのが描いてありますのね…わかりましたすぐに買ってきますのでちょっと待っててくださいな」

ふう…やっとおわった…そう思いながら取り敢えず下着コーナーから出る。

「お待たせしましたの、これでお姉様は私にメロメロですわー」

「はは、頑張ってたね？」

「もし成功したあかつきには私のすべてを掛けたおもてなしをお見舞いして差し上げますわよ」

何だろう…恩返しされるはずなのに何かされるんじゃないかって思っちゃうのは。

「楽しみにしてるよ？」

今日は帰ろう、ゆっくり寝よう…

おまけ 1

「お姉様？今日の私は一味違いますわよ？」ふふふ、と笑う黒子。御琴はいはいと言ったように軽く目を向けた。御琴としてはすぐに手元の本に目を向ける筈だった。

「黒子…それ…」

黒子は今日買ったゲコ太パンツをはいていた。

「これですの？今日お友達に奨められて買ったのですが…お姉様にはこんなお子様のおきに召さないですわよね」

しょんぼりとうなだれ、ベッドに倒れ込み御琴に背を向けた。御琴はそれを凝視しながら。

「あ、当たり前じゃない。そんな子供向けの…まだ前のレースの方がいいわよ」

「本当ですか？じゃあこれどうしたらいいんですの？」

「あ、アタシが処分してあげてもいいわよ？」

背中を向けてはいるが御琴がソワソワしているのが気配でわかる。黒子は確信した。

（ついに私のはいたパンツをお姉様にはいてもらえますのね）

おまけ 2

「どーすんだよこれ…俺が処理するのか？不幸だー…」

当麻の目の前には干からびた青皮が…

7月11日

夕方、学校が終わって僕、当麻、つつちーの3人で帰路につく。え？青ピ？生卵でも立ててるんじゃないかな？

「そっついえばかなめの能力って何だ？霧ヶ丘にいたくらいだからレベル3位か？」

くああ〜つと伸びをしながら聞いてくる、普通に考えたらもつと早く聞くようなものじゃ無いか？まあ仕方ないかな、ここに転入するくらいだから落ちこぼれとも思われてたのかな？

「僕？僕は無能力者だよ？」

「でもかなめは霧ヶ丘ぜよ、何で入ってたんだ？普通は無理だぜい？」

うゝんつつちーって確か学園の暗部に関わってるんだよね？僕としては全然教えても問題は無いけど。というか知ってるんじゃないの？それが広まり研究対象になるのは嫌だなあ…でも霧ヶ丘の一部には知られてるみたいなんだよねえ

「話したくないんならいいんだぜい？人間誰しも言いたくないことはあるもんだからにやー」

「うっん、別にいいんだけど…言っても信じてくれるかどうか」

「超能力なんてわけのわかんねえもんが實在すんだ、今更些細なこととで驚くような上条さんではございませんよ？」

フラグ？驚くよってフラグを建てたの？

「僕の能力が一応あるんだけど…開発の賜物じゃなくてもともとあったみたいで原石って言っらしいんだ。その能力の名前が時間操作タイムマニピュレータっていう大層なものなんだよね」

「……………」

「へ？と言ったように見事に驚いてるね、まあ僕もし何も知らないでこんなこと言われたら驚くと思うけど…いや、先に冗談だと思うかな？」

「じゃああれか？かなめは時間を止めた中で動けるのか？」

「いや、僕はまだそんなこと出来ないよ、出来るのは自分の感じる時間を遅くするだけだね。だから僕の能力は他の人から見ると身体能力が良い位にしか見えないんだ。だから判定は無能力者」

「まだってことはいつかは時間を止めることが出来るのかにゃー？」

「括りとしては僕はレベル3位かな？4で相手の時間に干渉できる位で5で世界に干渉できる位かな？だから世界に干渉できる位になれば時は止められるかもね？」

「いや、スゲー能力だよなそれ。霧ヶ丘にいたっていうのも納得出来るな」

「うんうん、と頷きながら歩いている、前方不注意当麻は電信柱に突っ込んだ。痛ぞ。」

「まったくだぜい、でもかみちゃんも負けず劣らずのもん持つてるぜよ」

華麗にスルーしながら当麻の幻想殺しの事をいう。幻想殺しかあ当麻の最弱にして最強だっけ？まあ今の僕は何も知らないから聞いておかないと。

「当麻も僕みたいに計測できないものなの？」

「いつつ…心配が全くないことに上条さんのガラスのハートはボロボロですよ？ふう…俺の右手は異能の力なら何でも掻き消せんだ。」

鼻を抑えながら右手を構える、全く絵にならない。

「じゃあ僕の時間操作意味ないね」

「かみちゃんの前にはなにも残らないにゃー」

「スキルアウトに弱そうだけどね」

「それを言っなよー…」

あははと笑っていると目の前に噂のスキルアウト達とそれに絡まれている…誰かよくわからない人。知らない人だなあ

「かみちゃん出番ぜよ」

「今その話してただろ！土御門、おまえも手伝え」

「俺はここでかなめと見守ってるぜい」

つつちー…まあそんなことはどうでもいいんだけどね？僕はすたすた歩き寄るとスキルアウト達との距離が1メートルをきった所で能力を発動させた。数人振り返ろうが関係ない。自分の出来る時間操作最低速…感覚で言うなら他人の1秒は僕にとって10秒、常人の10倍で動ける。だから僕の移動は見えないだろうし女の子もいつ助けられたのかわからない筈だ。

女の子を包囲から出しちよつと離れた所に立たせる。僕は何事もなかったかのように当麻達のところに戻る。この間約5秒。僕にとつては50秒だ。

「ってありゃ？あの子いつの間にかいなくなってるぞ？」

「かなめが時間操作したんだぜい？ちらつと見えたにゃー」

「男として当然のことをしただけさ！」

ふふんと胸を張ってると僕に影がかかる。振り返るとスキルアウトの皆さんが。チョーク極まってますが…息ができな

「おうこら、話を聞かぎりテメエが邪魔したみてえじゃねえか。ちようどいいテメエが責任もって俺らの相手しろよ。」

「かなめ！土御門！」

「合点承知だぜい！」

それから二人は僕のために戦ってくれた。僕を捕まえていた奴は人

質という言葉を知らないのか二人にのされていた。馬鹿だね、まあそんなのに捕まった僕もんだけど…まあそこは気にしない方向でいこう。

「ごめん、助かったよ」

「不意打ちじゃあしょうがねえって」

「それに姫さんを助けるのは騎士のやくめなんだぜい？ふふふ、俺に惚れちゃ駄目だぜい？」

「五月蠅い、でも…ありがとう」

僕が素直にお礼を言うとは何故か二人で作戦タイムをしていた。くそう僕がお礼を言っちゃいけないっていうのか！

「今のはちょっと破壊力が強すぎるぜよ…」

「管理人さんタイプな上条さんもちょっと陥落しそうでしたよ」

ちよっと作戦タイムが気になる…なにその楽しそうな言葉の切れ端

「それより早く行かない？ボサツとしてると風紀委員が来ちゃうよ？」

「そつだにゃー。すたこらさっさだぜい」

7月11日（後書き）

後書きでは始めまして８８マンです は愚痴（笑）

この話しなんですが…難産ですね。常にいきあたりばったりで。読み返してもおもしろくないし…

ぶっちゃけ読まなくても大丈夫です。なぜならこの話しはかなめの能力説明がメインで後はいらないます。説明用の話を作ってそれを投稿してもいいくらいです。もうね、頭が回らない。

取り敢えず次話からは超電磁砲に入って行きます。それでもメインは禁書です！

7月16日

今日も学校が終わった、ようやく慣れてきたって所かな？とにかく補習にはならなそうので何よりかな？小萌先生もなにもいってこなかったし大丈夫でしょう多分。

ダン！

「早く鞆に金詰めろってんだろ！！早くしねえとこいつ殺すぞ！」

「はっ、はいいい！」

現実逃避している場合じゃなかったね、何でもこつちやつたんだろ。僕はただ銀行にお金を降ろしに來ただけなのに。そして何で僕みたいな男を人質にするんだろうね、普通は力とかあまりない女の人じゃないのかな？と言うより何で銀行強盗なんかしてるの？迷惑だよ？

「取り敢えず僕を帰してもらえませんか？」

「うるせえ！おら！早く詰めるよ！」

聞く耳持たず、まあそれが普通なんだろうけど。

「その娘をはなせ！」

強盗は三人、デブと金髪と黒髪。どうやら黒髪がリーダー格の様だ。三人の不意をついて明らかに影の薄い会社員のような男が僕を捕らえてる金髪に体当たりをかまそうとしていた。

「ヒーローにでもなりたかったか？オッサン、残念だったな」

金髪がそついうと会社員の横からデブがタックルし、会社員は吹き飛ばされた。びたーんて擬音が似合いそうなくらい綺麗に倒れた。ちよ、もうちよい頑張つてよ。下手な抵抗は僕を危機に陥れるだけなんですけど！？

「ヘッ口ほどにもねえな」

「お前なにもしてねえじゃねえかー」

デブと金髪が仲良くしている、なに？この僕の疎外感、しかも金髪は僕を捕まえたままだから逃げれ無いという…というかまずい、何だ僕の体は！今日茶苦茶トイレに行きたい！

「あの…トイレに…行かせてください」

「あゝん？ダメに決まってるだろ？そんなにしたきや漏らしちまいな！」

鬼か！と言うより普通はこんな状況になったら緊張して尿意なんか無くしそつなもんだけど…

仕方ないあまり使いたくないんだけど…トイレに行くためだ能力使おう。あまり使いたくないんだけど…老けるのはやくなるらしいし。

「じめんなさい…もう」

限界！とばかりに能力を発動し遅くなった世界でどうにかして腕を

解かせる、方法？無理矢理体を回して肩に噛み付いてやったら一発だったよ。全然男らしくなかったけどね！そのまま能力維持しトイレに駆け込み用を足す。手を洗い戻ってきた僕に他の人質は落胆していた。通報しろよ！僕の馬鹿！

「何をしたか知らねえが：戻ってきたのは失敗だったな！」

黒髪が右手から火の玉を放ってきた、それを横っ飛びでかわす。絨毯に火が燃え移りスプリンクラーが作動した。

「これでアンチスキルもジャッジメントも来てしまいますよ？」

「くそっ！あんま調子にのんじゃねえ！」

黒髪がまたも火を放つ、それを避ける。直線的な攻撃だから手の平の正面から外れるだけで当たらない。そんな感じにチヨロチヨロと避けていた。

「いらっしゃいお嬢ちゃん」

避けた先にデブがおり捕まってしまった、デブに抱き着かれるように力を込められれば僕の体は悲鳴をあげた。抵抗しようにも僕では筋力差があり意味がない。

「あつぐ」

肺の中の酸素が奪われた、それを確認してかデブは僕を金髪に担がせた。そして黒髪がパイロキネシスの力でシャッターを吹き飛ばした。

「よっしゃー！引き上げんぞ！」

「うす！」

「取り敢えず僕をはなせ！」

ずらかろうとしているので離せと叫ぶ、目立ちやすいからすぐに駆け付けられるようにだ。自分で脱出できないとか情けない…ま、まあ相手は複数だししょうがないよね？

「うつせ！耳元で叫ぶんじゃねえよ！」

「う、ごめんなさい…って！いいから離せ！」

「暴れんじゃねえ！落ちたら怪我すんぞ！」

「あ、ありがとう？」

な、何だこの金髪の優しさは…僕困惑するしか出来ないんだけど…つは！まさかこれが狙いか、だとしたらなんて策士なんだ。

「ジャツジメントですの！！器物破損及び強盗の現行犯で貴方がたを拘束します！」

僕が変なことに困惑しているとジャツジメントが到着したようだ、というかこの声は白井さん？

「うち！さっきのスプリンクラーのせいか！？でもこんなに早ええのか？って」

「おいおい、最近のジャツジメントってずいぶんかわいらしいんだ

な！」

金髪と黒髪が笑い会つ、それに同意するようについでが一步前に出た。

「ほんとにな！お嬢ちゃんそこをどかないと怪我しちゃうぜー！」

うへへ、と気色の悪い笑いを浮かべながらデブが白井さんに抱き着きに行った。

「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ？」

さすが白井さんかつこいいぜ！なんか白井さん女の子なのに捕まってる僕を助けるって……いやいや男女差別ダメ、絶対。でもわけわからないシチュエーションだ、これが逆なら白井さんは間違いなく僕に惚れただろう。僕に惚れると……火傷しちゃうぜ？……ごめんなさい。

「つち、やるじゃねえか。おい！お前は金もって先に行け！ここは俺が食い止める！」

「黒髪さん！それ死亡フラグだって！」

つは！つついついツツコミを入れてしまった、なんて考えていると黒髪の指示どおりに車に走り込まれた。

「やってられるか！俺は先にアジトに戻ってるぜ！お前らも早く来いよー！」

「君ら死亡フラグ好きだな！」

ツッコミは忘れなかった。

車が出される、が白井さんの力だろうか、タイヤがパンクしスリッ
プ、壁に衝突し止まった。頭が痛い、強打すれば当然といえば当然
何だけど、なんだか世界の理不尽に泣けてきた。僕が半ベソをかい
ているうちに金髪は車を乗り捨て走り出した。僕を置いて。

「邪魔だ！」

金髪は常盤台の制服の子の前を通った、うん死亡ふらぐ。と言うよ
り世界の強制力すごいな…僕が絡んで多少流れは変わっているけど
大まかな流れは変わっていない。変えようと思えばかえられるのか
？別段どうしようとかは無いけどさ。今はこの学生生活を楽しみた
いだけだし。そんなことを考えていると目の前には綺麗なレールガ
ンが飛んでいた。

「怪我はございませんの？」

車に乗ったままの僕のところには白井さんがやってきた。

「大丈夫…なのかな？取り敢えず車止めてくれてありがとね？」

「あら？気づいてましたの？」

「レポートでタイヤパンクさせる位しかスリップする原因、考え
られなかったから」

まあ他に人がいれば別なんだろうけどさ、特にいなさそうだし、周
りはいかにもモブですって感じに動いてるし。

「で？さっきのレールガンが噂のお姉様？陥落は出来たのかな？」

「ふふ、聞いて驚かないで下さいな、何と黒子が履いた物をお姉様が履くくらいには陥落出来ていますわ」

それは何ともまあ…

「お幸せに？」

「黒子？あんた何やってるのよ？って知り合い？」

話をしていると白井さんの後ろから顔が出てきた、御坂御琴、みんな大好き超電磁砲。本人は当麻大好きツンビリっ子。通称ビリビリ。

「ええ、お友達ですわよ」

「始めまして超電磁砲、神城かなめです」

「あたしの事は知ってるのね。一応、御坂御琴よ、よろしく」

そしてようやく車から出るとちょうど黒髪、金髪、デブが連行されている所だった。ここで白井さんが立ち直らせる一言を吐くはずだ！

「もし…まだ悔しいと思える心が残っているならば
キターーーーー！！？」

「死亡フラグの勉強をして出直してらっしゃいな」

あれ？

7月17日

銀行強盗にあつてから次の日、特に変わらない日常を謳歌していた。といつても学園都市では強盗も日常の一つなのかも知れない。良くニユースでスキルアウトシリーズが何かをやらかしたとか聞くし。

今日も学校が終わり、僕と青ピの二人で帰路へ、当麻とつつちは小萌先生に捕まつてた。南無〜

「しかしかなめもかみやんに負けず劣らずの不幸体質やなー、普通銀行強盗にあつて直々に人質にされるなんてないで？」

そんなこといわれても現にされたんだから仕方ないじゃ無いか。というよりまずは銀行強盗って言うシチュエーションがない。

「いい経験だと割り切つて思い出に仕舞つておくよ」

「じゃー僕との甘い思い出、つくらへんか？」

「耳元で囁くな気持ち悪い」

かなめちゃん酷いでー！と言っているが無視だ無視。それにしても何なんだろうこの体質は、当麻張りの巻き込まれかたしてるよ。当麻みたく不幸で物が破損とかは無いから不幸じゃ無いんだらうけど…巻き込まれ体質？

「そつえばかなめちゃんは夏休み補習やないんやって？」

「僕は真面目だからね」

「何いうてんのや、小萌センセの補習受けないなんて勿体ないでー？」

「そんなこといって小萌先生と僕を絡ませただけじゃ無いの？僕が怒られてるの見てるときニヤニヤしてるもんね？呈のいいスケープゴートになるつもりはないよ」

こいつは酷い奴だ、助けようともせず、ずっと小萌先生を見てるんだ。

「かなめちゃんならいい羊さんになれるんやろうけどな？勿論僕がおおかみさんやで？」

「じゃあその石でも食べてなよ、赤頭巾ちゃんがお腹切り裂いてくれるから」

鬼やゝ！なんて言ってるけど青ピは基本無視が正解。ここ、テストに出るよ

ふと喫茶店に目を向けると白井さんが中に入っていくのが見えた。

後ろを見ると何故か青ピは泣いていたので気づかれないようにそっと喫茶店に入った。

「あれ？かなめちゃん？あれ？僕をおいてかないでやゝ！？」

うん、走り去っていくの確認できたしいかな？

中に入り見渡す、白井さんを見つけることが出来た。

「こんにちは」

「かなめさん…どうかしましたの？」

「ちよつと見かけたから…えつと初めまして…かな？神城かなめです、よろしく」

確か初春…何だっけ？もう覚えてないな、主要人物…と言うより当麻sハーレムとかしか。くそう当麻めえ…なんて羨ましい奴なんだ。

「初春節利です。神城さんですか？白井さんが言ってた…」

「白井さんが？なんて？」

「勿論最高の策士としてのです」

「策士？何でよ？」

御坂さんがわからないといった顔で見ている。うんわかったら僕と白井さんが消えるかもしれないね。

「結構頭の回転が速いんですの、それこそ私とお姉様との強固な絆をさらに強固に確かなものに策をろうしてくれたんですよ」

それちよつとダウト、あともう少し進んでくとダウトがアウトになるくらいダウト。

「で？何やってたの？御坂さんもいるってことは今日は二人とも非番なのかな？」

「ってそうでした！ほら初春、早く行きますわよ」

「あううゝまだ食べてないゝ」

なるほど、パフェを頼んでたのはサボリだったのか。と言うよりさすがジャツジメントなのかな？右手一本で人間一人引きずれるなんて…腕相撲は止めておこう、プライドがね？

「御坂さんは、買い食いかな？」

「当たり前、しかしジャツジメントも大変よねゝ」

「そうだね、でもないとは大変じゃない？現に僕は昨日助けられたわけだし」

「それでも、そんな仕事する気にならないわね」

「それは困るな、警邏中にそんな話をされては示しがつかん」

どちらさま？何なの？

「早く腕章つけて！」

「え？」

「君もだ！」

「え？」

僕が何か？

「早く警邏に行くぞ」

『え?』

まあいつものことだが言わしてもらおう。

「どうしてこうなった」

「そんなの私が聞きたいわよ」

「警邏中だ気を引きしめないか?…全く、腕章付けないわジャツジメントのID忘れるわ…困ったもんだ」

僕らが困っていると思うんだけど、気のせいかな?

「ID何て初めから持ってないし」

「ありゃ?新人さん?だから待機してたの?じゃあ今日は私が指導してあげよう」

「私達は「なら今回は私と搜索活動かな」

「御坂さん、諦めよ?」

「そうね…」

手を額に当てダメだこりゃになってる御坂さんに声をかける、ちょ

うど諦めたところのようだ。

「何を捜すんですか？」

「これくらいのピンク色で花柄の子供用の鞆なんだ」

「何でそんなものを…あ！」

「わかりました」

御坂さんはどうしたんだ？何か考えはじめたと思ったたら急に気合いを入れはじめた。

「私にもジャッジメントの仕事が出来るって事をわからせてやるわ
！」

「おお、そのいきだ新人さん」

あれからビルの際間とか川とか捜し回った。

「ねえ、もう少し情報収集したほうがよくない？さっきから変なところしか捜してないような」

「んーよし次はあっちだ！」

「ちょっといいですか？」

「なんだ？」

「遺失物ならなくした本人にどの程度の場所か聞いた方がいいんじゃない…」

「それじゃあここを探そう」

と僕の意見を華麗にスルーし自動公園にやってきた、一番まともな場所がやっときた。

3人で別々に探す、御坂さんのほうを見ると子供に群がっていた。さすがお嬢様学校。

「あれ？お姉ちゃん何で男の人の服着てるのー？」

「わけわかんねー」

「男装ってやつだよ、姉ちゃんがそんなこと言ってたぜ」

君のお姉ちゃんは君に何を教えてるんだ。と言っより…

「僕は男だー！」

「お姉ちゃん、うそついたー」

「嘘つきだー」

酷い、純粹な目で嘘つきとかやめてよ。

「なにやってんだー？」

「うん、これくらいのピンクで花柄の鞆搜してるんだけど」

「あれじゃねーの？」

ふと見ると御坂さんが犬を追い掛けていた。鞆をくわえていた。それもつかの間、鞆が上に飛んでいた。

「だあああああ！」

あれ？御坂さんびしょ濡れになっちゃわない？

「僕がとるよ！」

肩にかけていた鞆を投げ捨て全力で走り噴水に飛び込む、能力を使わないのは老けるのがいやだから。

「君大丈夫か！」

まあ制服には財布とか携帯は入れてないから水は大丈夫。

「はい、それより確保しました。」

「あー！お姉様！ジャッジメントだったんですの！？ってかなめさんもですの！それに濡れ濡れのすけすけ…って早くこれで隠してください！」

何だかテンパっているようだ、と言うより隠すって…なにかでてる？取り敢えず渡されたカーディガンを羽織ることに。

「何だかなあ夏風邪だけはひきたくないな…」

ぽつりとこぼし御坂さん達を見ると鞆は本人のところに戻ったよう
だ。

「こ、ごめんなさい私がバッグなくしちゃったから」

「いや…」

「ほら、こついうときはごめんなさいじゃなくて」
初春さんがニコニコと促す、一押しが聞いたのか少し笑顔になり。

「ありがとうお姉ちゃん達」

「かつこよかったぜー」

肩をバンと叩いて来る子供。うん、今日は散々かと思っただけど人助
けて気持ちがいいね。

「お二人ともこれを機会にジャッジメントになられては？」

「絶対にいや！」

「僕もパスかな。でもこついう手伝いならやるよ？」

取り敢えずジャッジメントじゃないって誤解も解けたしいい時間だ
からコンビニでも行こうかな

「御坂さんコンビニよって帰るけど一緒にどう？」

って、これはデート？デートじゃ無いのか？僕中学生なんて…ああ僕もまだ高校生だから大丈夫か。

「そうね…門限は過ぎてるし行くわ」

あれ？何か普通の対応だ…僕の考えすぎなのか？それとも相手にされてないだけなのか？

「じゃあいこうよ」

「暗証番号がチガイマス」

「いや、そんなはずは…」

「暗証番号がチガイマス」

「なんでだー！」

あれ？何だか聞き覚えのある声が…当麻？

「はー…でも今日は何だか疲れた…」

「ジャッジメントって大変だよね。」

「あれはあの人が勝手に大変にしてるのよ、絶対」

コンビニの自動ドアが開く。見慣れたつつんへアーが入口で不幸

を叫んでいた。コンビニの店員もちらちらと様子を伺っている、そりゃこれだけ騒いでればねえ…

「カードが飲み込まれて出てこないー！？不幸だー！」

「…久しぶりね」

「っげ！ビリビリ！とかなめか…どうしたんだ？こんな時間に」

「ビリビリ言うな！」

御坂さんがATMを叩く、放電をともなったそれは口にした物を吐き出させる程だ。まあカードだけどね。

「で、出たあ！サンキュービリビリ！出会ったときは何でこんなのと知り合いになっちまったのか考えたけど今初めてこの出会いに感謝…」

会話において行かれた僕がATMを見ているとぷしゅーという音とともにアラートが鳴り響いた。

「ふっ、不幸だー！？」

「ちょ！当麻！？」

「ちょっと待ちなさいよ！」

当麻が僕と御坂さんを引っつかんで走り出す。すごい力だ。

場所は変わって河川敷

何故か僕の目の前で戦が行われていた。

「で？何で僕も逃げなきゃいけないの？」

今僕と当麻は肩を並べて走っている。

「俺達友達だろ！」

ぴーんとサムズアップ。ム力つく。

「友達の命をむやみに巻き込まないでくれる！？」

「あんたらずいぶん余裕じゃない！？」

そんなことはない。

「不幸だー！？」

「それは僕の台詞だあ！？御坂さん、白井さんにこれ返しといて！」

カーデイガンを投げて渡す、何故か目くらましになっただけらしく立ち止まっていた。

「かなめナイス！今のうちだ！」

「御坂さん！ゴメン！」

といいながら逃げる僕。明日は筋肉痛かも…

7月20日

ついてない、朝からホントについてないよ。ここ2、3日、久しぶりに何も起きていない基本的に学校に行って帰る、そんな日常を送っていたのに、文明の利器を生かした快適な暮らしが約束されていたはずなのに、何で片っ端から壊滅させられているのだろうか。

「不幸だああああ！」

「だからそれは…僕の台詞だああああ！」

ちょうど開いていた冷蔵庫から間違はなくダメな感じの豆腐を装備しダッシュで玄関を飛び出す。目指すは隣の部屋、当麻のところだ。パソコンという音とともに玄関を蹴り開ける。弁償なんかしないし直す気も無い。何よりもやるべき事があるのだ。

「いつぺん死んどけええええ！」

僕の手から放たれるのは『腐食強化された豆腐』全力で顔に投げつける、僕が蹴り入ってきたのに驚いていたのか口がちょうど開いていたがやる事が理解されたのか口が閉じられた。

べしゃっという音とともに顔が豆腐まみれになり倒れた。足元には無傷のキャッシュカードがおちていた。

「なにすんだ！ドアとか壊してどうすんだよ！」

「じゃあなに？僕の家の家電製品全部弁償してくれるの？僕の家

買い置き弁償してくれるの？僕のこの快適な生活スペースを返してくれるの？全部出来ないんでしょ？だから豆腐を食らえええええ！」

もう一つ装備していた豆腐を構える、顔を青くさせながら必死に止めてきた。小癩なクリンチだ。暑苦しい。

「ま、まてよ。上条さんが家電製品を壊したって証拠は？何でもかんでも上条さんのせいにされたらたまったもんじゃないですよ？」

「…ふーん。じゃあ昨日ビリビリさんを挑発して雷雲まで使わせたのはどこの馬鹿なのかなあ？」

豆腐を持っていないほうの手でキャッシュカードを軽く折り曲げる。

「お前！それを亡き物にされたら俺は死ぬぞ！いいのか！？」

「だから最初に死ねって行っただんだああああ！」

豆腐を顔面にふりぬき多少すつきりした。部屋に戻るとしよう。

「うっ…不幸だ…」

臭い豆腐で溺死しろ。

一応裁きは降せたので部屋に戻った、先ずはこの生ゴミとスクラップをどうにかするとうしよう。

生ゴミを袋いっぱい詰めて、家電達を玄関に運ぶ。正直一人でやるのはきつい汗もすごいかくし、油断すると熱中症になってしまう。こっとうときこそ友情の使い所だろう。

というわけで再度当麻の部屋に向かう。さつき友情を叩き割ったって？あれくらいじゃ僕たちの絆（笑）は壊れたりしない。なんか変なのが入ったような気もするけど気にしない。

「当麻！うちのスクラップ片付けるの手伝って！って…」

中に入ると当麻の目の前には先程はいなかった少女がいた、全裸で。おそらくあれがインデックスだろう、全裸だが。で、当麻が歩く教会をぶち殺したのだろう、だからインデックスは全裸。

「失礼しました…」

すつと部屋を後にする。

「変態…変態だああああ！」

「ちげーよ！ちがくねえけど！いややっぱ違う！」

どっちだよ。

「当麻が女の子を拉致監禁して拳げ句の果てにはコスプレを強要する人間だったなんて！」

「やめてー！上条さんの評判をありもしないことで下げないでー！」

僕と当麻がグダグダやっていると言も無く忍び寄る気配が…

「にゃああああ！」

ちなみに僕の叫び声。何故叫んだかというインデックスが噛み付いてきたからだ。取り敢えず引きはがそうと走り回る。当麻の部屋に入ってしまったのは御愛敬。

「何で…どうして…」

インデックスは何とか離れた。僕はインデックスのすわる対角線の部屋の隅に逃げ込んだ。

「いじめられた猫みたいだな…」

当麻が呟いたがそんなことを気にしてられない。奴、インデックスは玄関に繋がる場所に陣取っているので自室に帰ることも出来ない。ちなみに部屋を出てきたときは当麻の布団を巻いて出てきていたのに今は僕が羽織っていた4Lのネルシャツを使っている。何でそんな大きいのが買ったのかって？通販でM頼んだら何故かこれが来たんだよ、仕方ないからこれは部屋着として無理矢理使っている。勿体ないし？まあ着ると膝くらいまで来るからこれにパンツだけで過ごすことも可能。まあ流石に短パンくらい履くけど。と、変な方向に思考がズレた。僕は今歩く教会の裁縫をさせられている。まあミシンだけ。

「何で僕が…」

「何か文句あるのかな？早く治してほしいのかも」

ガチンガチンと最早ギロチンみたいな音が聞こえる。気にしたら負けだ文句を言っても負けだ。

取り敢えず早く縫わないと噛み切られかねないので。能力を使う。

設定を最速にして縫うが600秒かった、実際に塗っていれば100分…1時間と40分掛かっている計算。だがこれだけ時間をかけたのだ、文句は無いくらいの出来栄えのはずだ。

「お、驚きの早さだったんだよ…それに凄く綺麗でうれしいな」

よかった、上機嫌だ。噛み切られる心配はしなくても良いだろう。

「うわ！そーだ補修だ補修！えっと…あーそうだ俺これから学校出なきゃなんないんだけど、おまえどーすんの？ここにいますか？」

「出てく」

すつくと立ち上がり玄関を出て行こうとする。

「あ、あー…」

「うん？違うんだよ、いつまでもここにいと連中ここまで来そうだし。君だって部屋を爆破されたくないよね？」

当麻絶句、僕も絶句。冗談じゃない当麻の不幸を隣の僕にまですりつけるのはやめてほしい。ノロノロと出ていくインデックスの後姿に財布を開きながら追い掛ける当麻、お札が見えないんだけど。仕方なく僕も追い掛ける。すると目と鼻の先でガツという変な音が聞こえるとともに当麻が奇声を上げながらのたうちまわろうとしていた。その時携帯がするりとポケットから落ちたが僕が能力を使い取る。当麻に貸しき。

「あ、あぶねええ…助かったぜかなめ」

といいながら手を向ける当麻、帰すときに貸し壺と伝えると不幸だー！と言っていた。

「不幸というよりドジなだけかも。幻想殺しなんてものがホントにあるなら、仕方ないのかもしれないね」

「…どういうことでせう？」

「君の右手は本当に神の奇跡を消してしまってるんだとおもっよ？この歩く教会も神の恵み（ラッキー）だからね」

といってヒラヒラ、うん結構ご機嫌らしい。当麻が常日頃の不幸が実は君の右手にあるといわれて不幸だああああ！と叫んでいるけど気にしない。その隣で学園の掃除ロボにビビリフードを持って行かれたと思い込み走り去っていくインデックスの姿があった。

大丈夫かな…確かこのあと切られるんだよね？でもヒロインだし大丈夫だよな？

インデックスが去り当麻も補修に行ってしまったって部屋で必死にスクラップと戦う。残りは大物、冷蔵庫を残すのみとなった。時間はもう夕方だが。

時間も時間で多少はお金もある、いうことで久しぶりにピザでも食べようと思い注文したのが1時間前。いっこうに来る気配が無く携帯で再度確認の電話をかけたがもう出たの一点張り、真面目な答えが帰ってきそうにないので仕方なく早めに持ってきてくれという事を伝えて電話をきった。

そんな理由でイライラしているところにちょうど目の前でどんちゃん騒ぎをしているようだ。無駄だ！とか邪魔だ！とかうるさい……うるさいんだよ！

自室だが苛々に勝てなかったからか気付いたらドアを蹴り開けていた。ぷごあ！という聞き慣れない声したがきにしない。

「もうひとつありましたね、術者を戦闘不能に追い込むことが」

これは聞き覚えのある声、インデックスだ。首輪が発動しているのだろう。

おそらくだが……イノケンティウスが出るよりも早く鎮圧して閉まったのか。とも思ったが廊下は水浸し、火災報知器が作動したのだろう……言えることはただひとつ。

「不幸だ……」

僕と当麻はインデックスを担いですぐに逃げ出した。

路地裏に逃げ込んだ僕たちは方針を決めた、取り敢えずインデックスを治すことだ。だが学生では、脳を作り替えた人間では出来ないらしい。

「なら……僕は？僕は学生だけど原石だ、開発は受けてないよ」

「大丈夫かも……しれない。でも道具が揃わないと……」

「仕方ねえなあの人に頼るか…あの先生この時間でもう眠ってるなんていわねーだろうな」

すぐさま青髪ピアスに電話し小萌先生の住所を聞く、何で知っていたかは知らないけど今は助かる。ストーカーはやめときなよという言葉を一方的に残し直ぐに小萌先生の家に向かった。

事情を話し当麻は電話して来るといつて部屋からでていった。僕は小萌先生の看病（という名の魔術）を身ながら気付いたら眠ってしまっていた。自分でも気づかなかったが疲れていたということだろう。

本格的に非日常（科学）と非日常（魔術）の日常（異常）が始まったのかもしれない。

7月24日

僕の目の前ではイラつきながら電話を切った当麻がいる。そう、もう制限時間だというのに解決策が湧かない当麻の八つ当たりだ。そろそろ、僕も動こう。

僕は21日には目を覚まし普通に行動していた。当麻の代わりに守るように動くのをステイル達魔術師にアピールしコンタクトを取り情報を集めている対面を見せた、じゃないと何故知っているのかを追求されそうだし後々大変なことになりそうならば今多少の苦勞をした方がマシというもの。

「当麻、本当に救えないと思ってる？」

「そんなわけねえだろ！でも俺は脳生理学専門でもねえ！下手な知識じゃ駄目なんだよ！」

身振り手振りで体が痛んでも冷静にはなれていないようだ。

「当麻、冷静になって考えてほしい。完全記憶能力者なんて世界でも珍しい能力かもしれない。でもね？一年で15%もの容量を使ったとして、何年生きられる？」

「何年って6〜7年だろ？」

「そう、じゃあ何でそういう結果が出るのにニュースにならない？」

当麻はハッと気づく、ちょっと考えればおかしいところだらけなの

だから。

「そういうことか！でも、85%もの容量使っちゃってるんだろ？」

「うん、当麻は勉強し直した方がいいね。いい、よくきいて？記憶には色々な入れ物があると考えて、それが運動記憶をしまう手続記憶、知識などを仕舞っておく意味記憶、日常を記憶するエピソード記憶とかね？まあいろいろあるんだけど、脳医学上記憶容量が違う記憶容量を埋めることは無いんだよ。つまり、そこから導き出される陰謀は？」

当麻が青い顔で何かに気づく、それはそうだここまでだされたら答えに辿り着けないわけが無い。

「ま…さか」

当麻が呆然自失していると玄関の扉が開いた。

入るなり魔術の準備を始めた。僕らの事などまるで見えていないように、そうふるまっていた。

「ごめんね魔術師のお二人さん、僕と当麻が君らの隣にインデックスがいるときに出会え無くて。」

「黙れ…邪魔をするな…」

「おお、怖い怖い。無知で弱虫の子供は助けられるものも助けずに自分の都合だけで助けられる子の記憶を奪うの？」

「それ以上は侮辱と見なします。次はありませんよ」

七天七刀を突き付けて来る。挑発しているとは言え話しも聞いていないようだ。

「当麻、やろうか。多分脳に一番近い場所。口の中にあると思うから」

「おう、まかせとけよ。」

僕と当麻が立ち上がりインデックスに近付く。目の前をステイルが塞ぐ。

「君等は…こんな死人一步手前の病人にわけのわからないことをするつもりか！やれるのか化け物共が！」

激昂し叫ぶステイル。それすらも見えていないように横をすり抜ける僕等。

「なっ！？」

ステイルが振り返るが気にしてなんかいられない。それよりもやらなければならぬことがあるから。インデックスのそばに近付くと当麻も右腕の包帯を外す。それを見た神裂が七天七刀を握るのが見えた。僕は最大で能力を発動し手を弾きたたき落とした。流石に常人でも10倍の速度でなら神裂から叩き落せるらしい。本気の場合には知らないけど。

「邪魔をするなどといったはず。それすらも理解出来ないのかな？これだからお子様は」

やれやれといったように首を振った後当麻の様子を見る。

「あつた？」

「ああ、バッチリだ。」

当麻がインデックスの喉に手を突っ込んだ。途端、当麻の右手が弾かれるように反れる。どうやら成功したようだ。腕から血が出てるけどね。

「――警告、第三章第二節。Index-libroum-prohibitorum―禁書目録の首輪、第一から第三まで全結界の貫通を確認。」

インデックスが迎撃体制を整える、当麻も右手を構えていた。魔術師達は呆然としていた。その中、魔術が放たれる。

「竜王の殺息って…どうしてあの子が魔術を！」

「おい！こいつがなんだか知ってんのか！名前は！？正体は！？弱点は！？一つ残らず教えやがれ！！」

「けど…そんな」

「じれってえ野郎だな！んなのみりゃわかんたろ！？」

当麻が叫ぶ。それを聞いて歯を食いしばりながらスタイルが呟いた。

「Fortiss931」

「曖昧な可能性なんていない。あの子の記憶を消せばとりあえず命を助けることが出来る。僕はそのためなら誰でも殺す！！そうきめたんだ、ずっと前に」

「とりあえずだあ！？ふざけやがって、そんなつまねえ事はどうでもいい！理屈も理論もいらねえ！たった一つだけ答える魔術師！……テーマは、インデックスを助けたくねえのかよ？テーマらずっと待ってたんだろ？インデックスの記憶を奪わ無くてすむ、インデックスの敵に回らなくて済む、そんな誰もが笑って誰もが望む最っ高なハッピーエンドってやつを！ずっと待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を！英雄がやって来るまでの場つなぎじゃねえ！主人公が登場するまでの時間稼ぎじゃねえ！他の何者でもなく他の何物でもなく！テーマのその手でたった一人の女の子を助けて見せるって誓ったんじゃねえのかよ！？ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！絵本みてえに映画みてえに！命をかけてたった一人の女の子を守る、そんな魔術師になりたかったんだろ！だったらそれは全然終わってねえ！！始まってすらいねえ！ちつとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃねえよ！……手を伸ばせば届くんだ。いい加減始めようぜ、魔術師！」

長い台詞を有難う。完全にノーマークだった僕はインデックスの後ろに回り込んで膝を落とし羽交い締めにし竜王の殺息を上空に反らした。といえばかつこいいけど簡単に言えば一緒に倒れこんだ。

「当麻！」

「かなめ！ナイスだ！」

呪縛から逃れた当麻が走り込み右手を宛てがった。

「駄目です！上！」

上を見ていた僕は、当麻を助けようとしたがインデックスと絡み合
って動けなかった。当麻はそのまま僕とインデックスを庇うように
倒れ込み、その体に何枚もの光の羽を浴びた。

その日当麻は死んだ。僕とインデックスと魔術師を助け、上条当麻
は死んだ。

7月24日（後書き）

流石上条さん、説教が長い。およそ350文字。本文の1／7ほどになりました（笑）

7月27日

何の変哲も無い病室そこに当麻はいた。おそらくこれから何度もお世話になる部屋だろう、ぜひ頑張つて。

「あなたは…？部屋、間違えてませんか？」

「間違えてないよ、上条君。僕は神城かなめ、君の隣人で親友…だったのかな？すくなくとも僕はそう思ってるよ？」

「そつか…あらためてよろしくな。かなめ！」

「うん…当麻」

それから、他愛ない話しを続ける。

「そういえば…インデックスには記憶ないって教えないほうがいいのかな？さつき先生から嘘付いたって聞いたんだけど」

「あー…うん黙っててくれ。今更記憶ありませんでしたじゃ頭がただじゃすまねえからな」

かまれたらしい頭を指差して言う。気持ちはわかるあれ超痛い。

「あはは、わかったよ。じゃあ僕はそろそろいくね？」

「ああ、またな」

そついつて別れる。後ろから「隣人は僕っ娘か」なんて言ってい

るのは気づかなかった。

久し振りに開放感に溢れているが、今の僕の服装も開放感に溢れていた。

あの学生寮での戦いの日、僕はちょうど私服を外に干し忘れたまま逃げたようだ。まあ、あの状況で洗濯物なんか気にしていられないが…

まあ簡潔に言えばステイルの馬鹿ガキに燃やし尽くされたということだ。私服とその学期の戦いを終えた僕の男子制服のふたつが、そして残ったのは前に封印していた霧ヶ丘の制服とインデックス事件？の時に来ていたせいで当麻の血やら埃やらで駄目になった私服と唯一無事だった邪魔にならないように小萌先生の部屋に脱ぎ捨てていた馬鹿みたいにでかいネルシャツ一枚。

まあどういふことかというところ、今は霧ヶ丘の制服でスカートのせいで嫌な開放感が満ちているということだ。

「早速だけど…不幸だ…」

今更どうしようもないことなので街をプラプラ歩く。

「お？かなめだにゃー。どうしたんだ？やっと自分の性別に気づいたぜよ？」

「……………どしたの？つつちー？一人？ロンリー？とうとう妹さんに

も見限られちゃった？残念だね？」

「色々違うにやあああ！？ちよつと忙しいっていったただけだぜよ！今日だって朝飯用意してくれたし、見限るなんてありえないぜい！」

ちよ、声大きすぎ、目立つちゃてるじゃん。誰か助けて…

「あれ？つつちーにかなめやん？どないしたん？つは！まさかつちー僕を差し置いてかなめとデート！？それは許せん！？」

こいつは助けにならないでしょう。チェンジを希望したいです。

「「エセ関西人、メツキが剥がれてるよ（ぜい）」」

「つは！？ええええエセちゃうねんて！僕はれっきとした関西人やねんで？決して米所出身じゃああらへんよ？」

「青ピの家では何の品種扱ってるの？」

「僕？…えーとたしか……って！？ちゃうゆうてんでしょ！僕はけしてツツコミじゃあないねんで？ボケをかますのが僕の仕事やねんで？」

「一回もボケてない米所の倅が何言ってるぜよ、ドンドンメツキはがれてるぜい？」

「うつうつ、うるさいねん！僕もう帰る！」

走り去ろうと数歩走ると振り返った。

「じゃあね？」

「ここは引き止めるところとちゃうん！？僕をここで帰してええん？」

「鬱陶しいからもう帰れにやゝ振り向かず涙を流さないように上を向いて帰るんだぜい？」

うわあああ、と本当に泣きそうなのか上を向いて走っていった。

「ねえつつちー？」

「なんだぜい？」

「青ピ、スキルアウトの集団がいるの見えてないよね？あっ、ぶっかった」

「俺には何も見えてないな」

僕の目にも何も残ってないな。ってわけにもいかないか…

「助けないの？」

「痛いのは嫌だぜい！」

「同感、ちよっと様子見ておこうか」

というわけで路地裏に連れ込まれた青ピを近くで見守ることに。

「もうかんべんしてやゝ、僕の心はもう折れてんねんで？」

「だから落し前つけたら帰ろつが何しようがいいってんだろ!？」

「僕は能力もなければ喧嘩も弱い一般人やねん。君等とは違うねんで?」

「仕方ねえな、じゃあ俺とタイマンしろよ。それで許してやるよ。」

「堪忍してやー」

堪忍してやとか言いつつも逃げられないのがわかったのか構えをとる青ピ。

「始まったにやゝ、俺はスキルアウトに三千円だぜい」

「え? 賭けるの? じゃあ大穴に三千円ね」

「随分ギャンブラーぜよ」

いやいや、二人とも賭けたら成立しないでしょ?

なんてやっているとかボコボコの青ピが。

「どうだ? 降参するか?」

「するで!」

「させねーよ!？」

「ひどうい!？」

おお、殴られてる。負けちゃいけないよ？僕の三千円！

そんな流れで見ていたが、スキルアウトの拳の軌道が目の上を通るのが見えた。あれは危ない！下手すれば失明する！そんな切羽詰まった状況だから能力を発動させた。自分自身ではなく、《青ピ》という自分以外を対象にして《能力が発動した》。

青ピも驚いているだろうがチャンスと見たらしく、右手を振り抜いたのかそんな恰好をしていた、スキルアウトはその前で倒れて気絶していた。

「は…はは…僕やったねんな…」

「あいつがやられるなんて…」

スキルアウト達はざわつき気絶したやつを回収して逃げた。

青ピは…

「僕は時間操作タイムマニピュレータだったねんな！？」

と喜んでいた。まあ僕の力なんだが黙っておこう。

「青ピが勝ったにや…」

ちょっと狡い気もするがいただくものはいただこう。僕自身こんな事でレベルが上がるとは思わなかったけど…

7月27日（後書き）

さて、原作一巻が終わりましたので！お待ちかね（？）日常編入りますよ！

レベルも上がったしね霧ヶ丘の制服だけど。

三千円も貰ったしね霧ヶ丘の制服だけど。

夏休みだしね霧ヶ丘の制服しかないけど。

そんな内容でしたが…この小説は需要はあるのだろうか…？

チヨロチヨロ評価されていてとてもうれしいですが…感想が無いということは内容が薄いつてことなんでしょうね（需要が無いなんて信じない、男の娘は誰もが求めるものはず／笑）…精進します。

7月28日

今日は当麻が退院する日、ということインデックスと一緒に迎えるに行く。まあ僕が居ないといけないうて事はないんだけど、何とも不安が残るからねえ…。

「そういえば、ご飯ちゃんと食べた？と言うより美味しかった？」

インデックスは昨日、当麻の部屋で寝るといつて聞かなかったのだから僕が救援物資として餌やりしていたのだ。

「とっても美味しかったんだよ！」

はああつとキラキラと輝き腕を振るう、これが後光かつ！と無駄にキラキラとしていた。

「ちゃんと電子レンジは使えた？」

「ムッ、あまり見くびらないでほしいかも。一度覚えたら忘れない私を見くびりすぎだと思う」

「そう？ごめんね？昨日説明しないままだったから備え付けの生卵も一緒にやつちゃったんじゃないかって心配してたんだよ。爆発しちゃうからね」

目を向けると、ギクツといった反応をしていた。あーあ。

「大丈夫だよ、当麻にあつたら何も説明せずにごめんって謝つてけば」

「それは謝るって言わないかも、でもわかったんだよ！」

うんいい返事だ、なんて話をしているうちに当麻の病室に。部屋を見るともういつでも出れるようだ。

「おはよう、当麻」

「ん？ああかなめとインデックスか」

「とうま…」

「なんだよ？畏まって、上条さんに話してみてはどうでせう」

「ごめんなさい」

すっかり頭を垂らす、当麻はついて行けず慌てている

「許してあげなよ当麻、可愛そうだよ」

「許すも何も。上条さんには何がなんだかわからないんですが…？
ええい、何がなんだかわかんねえけどよお！上条さんの広い心で許すから頭あげるよ！」

「ホントに？」

「ああ！任せとけ！」

「よかったんだよ、部屋中卵まみれになっても怒らないなんて聖人君子なんだよ！」

え？といった顔でフリーズした、まあ何となく事情を察知したんだろう。

「ちなみに電子レンジだから相当ひどいことになってるかも」

フリーズ状態からひびが入る、まあ入院していたほうが幸福なのかもね？ご飯出て来るし基本ヒッキーだから不幸な目にも会わないしね。

「不幸だあああ……」

僕だってそれをいいたい、まだ僕霧ヶ丘の制服だよ？服を早急に買わないと。

「じゃあ帰ろっか？」

「お腹も空いたし何か食べて帰るんだよ！」

「そつだね、じゃあ適当に行こうか？当麻く？いくよ？」

目の前で手を振っても見えていないのか、顔を覗き込む。

「うおおー！」

と何かすごいものを見たような顔された。ごめんね、不細工で！くそう、何でこっではもつとイケメンにしまった。それは私の知らぬところだ、と聞こえた気がした。

「むっ」

と唸りながらギロチンインデックスが出動した、お腹が空いてご立腹らしい。何ニヤニヤしてるんだよ！とか、鼻の下伸びきってるんだよ！とか聞こえる、なに？当麻はDM？

「えー、姫の暴行もとい制裁も終わったことですし何か食べにいきませう」

「インデックスはね、お寿司が食べたいんだよ！」

「うーん、じゃあ100円寿司でも行こうか？」

「わーい」

とりあえず安いところへ、道中当麻がずっと財布を気にしてたけど…まさかあの小銭しか入ってない状況？まあ今回は快気祝いとかも入ってるから僕がだすんだけどね。

というわけでちょっとした人気店もピークを外せばほら、こんなに空いてる。ということで特にストレスも貯まることもなく、むしろ発散していた。主に当麻とインデックスが。

「寿司うめえ…幸福だあ…」

「がつがつがつ」

どうやってそんなにがつがつ行けるのか、回転寿司だし後ろの人が可愛そうだ。と思い見ると睨まれた、もうやだ。

「あれ？かみやんだにゃー」

「マジ？入院中やないの？」

という声が聞こえ振り向くとつつちーと青ピ何故か当麻に敵意丸出しだった。

「かみちゃん、何一人で両手に花状態なんだぜい？」

「そうそう、何でこないにいい状況になってんのか気になっただけやんな、別に妬ましいわけやないで？」

「かなめが退院祝いつて連れて来てくれたんだよ！白状な奴らとはちげえんだよ」

まあ、お隣りさんですし？

「いつの間にかなめの好感度あげたんや〜！」

「青ピ」？

「何や？かなめちゃん、かみちゃんやなくてやっぱり僕やった？」

「はいこれ」

といってマグロを渡す、まあわさびがすごいことになってるやつだけ。で、何で受け取らないの？

「かなめちゃん、あ〜ん」

ニコニコと口を開ける、高いよ。としゃがめといいしゃがませる、

青ピがつつちーと当麻に勝者の顔をしていた。まあ構わずに突っ込む。

「かつ…辛い！」

わさびにやられて泣いている。

「あはははは！お前！好感度超高え！」

「流石かなめだぜい、笑いがわかつてるにゃー」

「せっかくのおいしそうなのに勿体ないんだよ！」

インデックスの追撃のわさびマグロ、我ながら酷いなあ。

とまあそんなことがあったけど快気祝いとしては成功じゃないかな？

そして気になるお会計は…僕が5皿、当麻が22皿、インデックスが46皿

さようなら諭吉さん。こんにちは野口さん

そして途中で捨ててきた青ピ以外の全員で寮に帰った。青ピ？知らない。

そして帰宅、ドアを開けた当麻が固まっていた。

「わ、忘れてた…ふ、ふふふせっかく楽しい時間過ごしてたのになあ」

「インデックスは今日はかなめのところに泊まる約束なんだよ！」

といい僕の部屋に入ってくる。まあドンマイ当麻。

「不幸だあああ！」

「近所迷惑だにやー！」

不敏だ。

7月30日(前書き)

時間軸が違っしggggだし何がしたいの?ってなるかもしれない
気にしねーぜ!って方。私をけなすためだけに読むドSさんの方は
お進みください

7月30日

さて、僕は何故こんな事をしているのだろうか？僕は常盤台の生徒でなければ女でもない。じゃあ何で常盤台のプールの清掃をしているのかなあ？

「朝からやってもう昼過ぎだったのに3割もおわってないってどういうこと！？」

僕も掃除をさせられているってどういうこと！？というかさも当たり前のようにやらされるのっておかしい！？

「これ今日中に終わんのかしらねー」

僕の今日を返してください、特に用事はなかったけれど…いや服買いに行きたかったけれど。

何でこんな事になっちゃったんだろう…あれがいけなかったのかな…

7月25日

インデックス事件？が終結し当麻が入院しインデックスが僕と当麻の部屋を行き来しているころ、といっても入院したその夜の僕。僕は特に大きな怪我などはなかったので部屋の片付けをしようとしていた。まあ、あんな事の後なのでやる気はおきなかったんだけどね。そんなこともあってちよつと息抜きに外に出た、ちよつとした買い物をしてコンビニに。

「あれ？白井さんに御坂さん…って！？どうしたの？ずいぶん傷だらけだけど！？」

「あんたか…」

「ちょっと事件に巻き込まれましたの、急いで寮へ帰らなければならぬのでまた後日お会いしましょう」

足引きずってるって…あ、こけた。

「わかった、ずいぶん急いでるのも、足が辛いのもわかったからとりあえず家によって怪我の治療をしようか」

「あんたね…急いでるって言ってるでしょ！もう門限過ぎてるのにこれ以上遅くして私たちどうなると思ってるのよ！痛ッ！？」

「はいはい治療しましょうねー」

「人さらいー！？」

うるさい！？僕の評判を下げるな！？

「白井さんは怪我してなさそうだね、じゃあ御坂さんの治療を手伝ってね？」

「は、はいですの」

「はーなーせー！」

とまあ、暴れる御坂さんを治療してもらってる間に常盤台の寮に電

話をかける。

「あ、もしもし。神城と申しますが常盤台中学の寮でよろしいでしょうか？」

「ええ、常盤台中学寮ですが、何かご用でしょうか？」

「ええ、ただいま御坂美琴さんと白井黒子さんが家にいるのですが、何か事件に巻き込まれたらしくて家で治療をしているのです、そちらの門限を過ぎてしまつてからの連絡で申し訳ありませんが考慮の方をいただきたくて」

「わかりました、何があつたのかはわかりませんがうちの生徒の治療をしていただき感謝しております」

「いえ、では治療が終わり次第寮の方へ送らせてもらいますので…そうですね、今から30分後くらいでしょうか、近づき次第連絡を入れますので、では失礼します」

電話を切る、いくら厳しいといつても連絡を入れたのだから大丈夫でしょう、うん。

「何をしていらしたのですか？」

「ちょっと電話をね。治療もすんだことだし行こうか？送ってくよ？」

「早く帰らないと何されるか…」

そんなに怖いのか…まあそこは僕に感謝だよね？連絡を入れてあげ

たんだし。

というわけで、寮につく。御坂さんと白井さんはコソコソとスネークの様にステルスしていた。その後ろで電話をかけている僕、出ないけど。

「全く、ルームメイト二人とも門限を破るとは…時期ハズレだが部屋替えも考慮する必要があるか？」

「お、お言葉ですが」

「いい、知っている。よく無事だったな」

「へっ？」

おお、かっこいい、御坂さんもほづけるくらいかっこいい。まあ違う意味だと思うけど。

「電話した神城です、無理矢理治療させていただいたので遅くなつてしまいました。」

「君が親切にしてくれたのか、あらためて礼を言わせてもらおう。ありがとう」

「どういうことなの？」

「ここにいる神城が君等が事件に巻き込まれて怪我の治療と遅くなるということを連絡してくれたのだ。全く、自分達で連絡してほしかったがな。」

「う…申し訳ありませんでした」

「すみませんでした…」

うんうん、子供とは一つミスをすることで成長するからね、これで連絡を入れることをするようになるでしょ。

「反省しているならよろしい」

「それじゃあ…」

「だが」

途端、白井さんの後ろを取ったと思ったら首をコキツと一発、ゴミのように放り捨てた。あれ？僕連絡とか入れて考慮してもらったんだよね？

「規則を破るということは風紀を乱すということだ。致し方ない理由で遵守出来ぬ事もあるだろう。しかし君達は我が校を代表する能力者だ。どんな事情であれ規則破りを黙認しては他のもの達に示しがつかん、規則破りには罰が必要だ、そうは思わんか？ん？」

考慮の結果がこれだよ！って事でいいのかな？まあ多分掃除とかでしょ、そこら辺が打倒じゃない？

「そうだな…30日にプール掃除だ、忘れるなよ。あと、その神城もだ」

えッ、僕！？何で？何も悪いこととしてくない？というより僕この寮の人間でもなければ常盤台の生徒でもないんだけど！

「あの、かなめさんはうちの生徒では…」

「だが、うちの生徒を拘束し門限に遅れさせたのも事実だろう？まあ連帯責任だと思え。」

何だろうこの理不尽な仕打ちは。僕悪いことは何もしてないというより、いいことをしたと思ってるんだけど。

「かなめさん、巻き込んで申し訳ありませんの」

「ごめんね、私たちの罰に巻き込んで」

あれ？逃がすつもりはないの？

なんだか思い出したら泣けてきた、なんだか今日は枕が濡れそうだ。

「ウうえっへっへっへ…」

白井さんは白井さんで変な笑い方してるし…御坂さんに聞かれたらいろいろ終わると思うんだけど…

「おねーさま！炎天下の作業には水分補給が必須ですよ、わたくし特製のドリンクはいかが？」

ドリンク…いいねえ…プール掃除なんて一、二時間で終わると思ってそんなの準備してないよ。そろそろ枯れ果てそうだ。

「で、でも味には自信が…っ！」

そろそろ、危ないかも…仕方なくプールサイドに登り後ろに声をかける。

「ごめん、ちょっと飲み物買ってくるね？ついでだしいっしょに買ってこようか？」

「あら、ドリンクならございますわよ」

「え？もらってもいいの？」

「ちょ、くろ」

何か言ってるけどまあいいか。ってなんだこれ、物凄く飲みにくいんだけど…よく吸収出来るってことにしておこう。

あれ？白井さんと御坂さんが真っ青な顔してるけど…

「どうかしたの？」

「あんだ、なんともないの？」

「ん？熱中症とかにはなってるないけど？」

「大丈夫そうね。」

何が大丈夫なのか詳しく。って、何か頭がふらふらしてきた…

「ごめん、ちょっと熱中症掛かってるのかも…フラフラする…」

唯一の外での服、霧ヶ丘の制服が濡れるのも構わず、水槽の壁にもたれ込み座り込んでしまふ。ちょ！とかいろいろ聞こえるけどちょっと休ませて…

「お姉様のそばに…いる資格が…ありませんのオオ…」

「パートナーなんだからさ」

何だか断片的にいろいろ聞こえる…目を開けると白井さんと御坂さんが…というよりなんだ？すごくかわいい…いや、知ってるけどさ。何だかいつも以上に可愛く見える。

「はあ…はあ…んっ」

「大丈夫ですよ！？もしかして本当に熱中症ならすぐに保健室に行つたほうがいいですよ」

「白井…さん」

「ホントに大丈夫なの？」

「御坂…さん」

二人が並んで僕の顔を覗き込んで来る

「わっ！」

「なっ！」

僕は無意識のうちに二人に抱き着いていたようだ。あれ？何で僕抱き着いてるんだ？

「ううう、ごめんなさい！」

冷静になり土下座をする、二人とも、いや僕も含めて三人とも顔が赤いだろう。

「あたしにそっちの気はない！」

「わ、わたくしはお姉様一筋ですよ！」

「いや、もうごめんなさい。自分でも自制が聞かなくなってて…どうしちゃったんだろ」

「くーろーこー…」

「あつ！お姉様！流石にそれは身体が…あうつ！？」

「かなめさんがおかしくなっちゃったじゃない！」

僕がおかしく？そうか…やっぱりおかしかったか。まあ自分でもおかしいと思うくらいだしそりゃそうだよな？

「黒子、取りあえずかなめさんを家に帰してあげて」

「わ、わかりましたの…」

そんなこんなでリタイアしてしまった僕、白井さんは僕をテレポ―トで寮まで送ってくれるとすぐにトンボ返りで帰って行った。

「ダメだあ…何か…おかしい…」

「かなめゝ鰹節ないか…」

「あつ、とうま。うんちよっとまってて?」

鰹節を持って振り返ると顔が赤かった。どうしたんだろう、風邪?

「サンキュー!じゃ、じゃあな!」

当麻が帰ると僕もベッドに寝転がり眠ることにした。

今日は…散々だったなあ…

その頃、当麻の部屋。

「はあ…何かかなめ…顔が赤くなってて可愛かったなあ…」

「と…ま?」

隣の部屋からの不幸絶叫でかなめの目が覚めたのは言つまでもなかった

8月1日

一昨日のプール掃除、あれは僕にとってもいい運動だったようだ。このたくましき腕、惚れ惚れする様な胸板。ふ、ふふ僕は男の中の男Men of Men、sになったのだ！

という妄想をしていた、目の前の鏡を見てつい現実逃避をしてしまっていたようだ。ワイルドな髪型、男らしさ溢れる雑誌に載っていた服。これだけの要素を集めたのにも関わらず丸つきり似合わない、どういうことだ…僕は漢じゃなかったのか？いやそんなことがあるわけがない、この男らし過ぎる心を持っているんだ、間違いないはず。この服は僕に合わなかった、そういうことにしておこう、うん。というわけで新品同然の服を綺麗にたたみ袋に入れ直す。誰かにくれてやろう。

「舞夏がいつもお世話になってるお礼って言ってたぜい？中身はクッキーみたいだからいっしょにお茶にするぜよ」

「さも当然のように話し掛けないでくれる？不法侵入だよね？警察行こうか？」

「紅茶でいいにゃー？アッサム茶が美味いって噂だぜい？持ってきたから入れてやるにゃー」

会話のドッジボール、勿論ボール二個で受け取るなんて事はしない。なんだい。

気付くとお茶会の準備は終わってるし、にゃーにゃーうるさいし、クッキーおいしいなあ…

「インデックスはダージリンも好きなんだよ？でもアッサムでもいいからのみたいかも、入れてくれるとうれしいな」

「何でいるの？何で食べてるの？何でさも当然のように紅茶入れさせようとするの？…すみません今すぐ煎れます」

歯をガチンガチンと動かす、それだけで優先順位が変わってしまった。トラウマって怖いね！いや、トラウマだから怖いのは当たり前か…

「どーぞー煎れ方なんてよくわかんないから適当だけど…」

「うん、全く容れ方ちがくて旨味が全然出てないけど気持ちは伝わったよ。」

ひでえ、僕の精一杯を完全否定したあげく何も籠ってない気持ちだけ汲み取るなんて…

いや、気持ちを汲み取るなんて出来ないか…ってことは完全否定するだけして後は社交辞令ってこと？何だか泣けてきた。

「それにしても食い過ぎだぜい？かなめの分も残さないとダメだぜよ、それが紳士淑女の嗜みってやつだぜい？」

「む？インデックスは神の使いだからお告げのとおりもらいにきてるだけかも、だから貰えるものはもらっとくんだよ？」

「ちよつとまって？その理論はおかしい」

「神のお告げなら仕方ないにゃー」

「その納得の仕方はおかしい、ってなんでインデックスはそんなに誇らしそうなの？え？これは僕がおかしいの？え？あれ？」

「宿命なんだよ」

ならしかたないな

「で、かなめ。さっき仕舞った服は誰が着るんだ？どうみてもサイズが一回り大きかった気がするぜよ」

「…仕方ないじゃん、僕にはM大きすぎるみたいなんだもん。S何てあまり売ってないし…」

「よしじゃあ今日はかなめの服を買いに行くにゃー、その大きい服は俺がかみやんに売ってきて資金作って来るぜよ」

「インデックスは当麻の部屋に戻ってお昼ご飯食べて来るんだよ」

「じゃあいつしよにかみやんのところにいくぜい。定価の倍くらいでぼったくって来るから期待してるぜよ」

嵐のような二人だ、何だかどつと疲れた…寝よう、うん。

「じゃあかなめいくぜよ！早く準備するにゃー」

「わかったよ、ちょっと顔洗って着替えて来るから待ってて」

何でそんなに元気なんだか…オッサンにはついていけないよ。精神年齢的にね？多分きつと。うん、精神年齢アラフォーのはずなんだ。

つて、着替えかあ…冒頭のがれが駄目となるとまた制服になっちゃ
うんだよなあ…いやね？霧ヶ丘のじゃあないんだよ？一応制服は頼
みであるからね？だから昨日できあがったからそれを着て行くつも
りなんだけど…おかしいな？同じところで作ったはずなのに…同じ
オジサンに頼んだはずなのに何でか知らないけれど女物の制服何だ
よね…死にたい。でもまあこれを着て行くしかないわけで、鬱だ。

「準備オツケー、行こうか」

「じゃあいくぜい、ってお下がりの制服じゃないにやー。」

「あれ、お下がりじゃないって言ってるよね？巻くよ？巻いちゃう
よ？」

「って巻にかかってから言うもんじゃないぜい！」

「暴れるなあ！ってうわ！」

簀巻き暖房の刑にしようとしたが返された。だけどおかしい、布団
挟まずにロープでそのまま縛られてるんだけど…

「へ、変態！」

「変態じゃないにやー！あらぬ噂立てないでくれ！」

「助けてー！むがつ！」

「ちよつと黙ってるぜよ！」

「かなめー、醤油ないかー？」

当麻が部屋に入ってくる、不法侵入も何のそのだが救援だ、ありがたい。

「てめえ！土御門！見損なっただぞ！」

「誤解だにやー！」

「ロープで縛って口ふさぐ、どんな誤解があるってんだよ！違うだろ！か弱い僕っ子を力付くで押さえ付ける？違うだろ！それはただの犯罪じゃねえか！それでいいのか？心は捕まえられず、その身を犯罪に染める。そうじゃないだろ？少しづつ少しづつ近づいていくもんだろうが！そんなことも出来ねえのかよ！ならばまず、その犯罪的思考をぶち殺す！！」

そげぶスイッチ入りました！。こんなところで見るとは…何て思ってるうちに幻想的な右フックがつつちーの顎にヒット、世界を狙えるんじゃないだろうか？まあボクシングなんか見ないしわからないけどね？だって見てるだけで痛そうじゃん？

何てやっているうちにロープを解いてくれる、くそう僕にもっと力があれば…腕力だけど。

「で？何やってたんだ？いくら変態でも友達に手を出すと思えねえんだけど」

「反撃された？のかな、うん」

「はんげきい？」

「イラつと来たから巻いてやろうと思ったたら反撃された、ほら名残」
布団を指差したため息をつく、もっと力がないと駄目かー。アイニー
ドモアパウア -

「で、何で制服着てんの？確か補習なかったよな？」

「私服が燃やし尽くされたから…ね」

「あー…ご愁傷様」

「服を分けてくれてもいいよ」

「サイズあわないにやー、M着れないかなめちゃんなんだぜい？」

シャキーンと立ち上がり失礼なことを言うつつちー。ナメんな着れないことはない、だって4L着てるんだし。

「何？僕が低身長で貧弱とでも言いたいの？男なんてここが強ければいいんだよ！」

グツと親指で自分の心臓を指差す、ふふっ決まったね。

「かみちゃんより臭いことをここまで堂々といえるのも才能だにやー」

「ちょっとまって！俺そんなに恥ずかしいこと言っていないって」

「いやいや、かみちゃんも結構臭いところつくぜよ」

「あれくらいか？そこまでいかねえって」

ひ、ひでえ。何なの？僕って恥ずかしい人間だったの？……そう
思ったら恥ずかしくなってきた。

書き置きしていこう、旅に出ます。ってね？

ちようどあーだこーだ収まらないみたいだし、じゃあね！

「かなめ、消えた」

「かみゃん、口調が崩壊してるぜい？」

「って、そんなことはどうでもいいんだよ！かなめが逃げた」

「どうせ恥ずかしくなったからにゃー、外歩いてれば見つかるぜよ」

「だな、じゃあ飯でも食いに行くか」

「行くにゃー」

さてと、つい逃げちゃった訳だけど…

服買いに行こう、うん。僕に合うBest of bokuを探し
に。

そんなことを思いながら近くの人気のメンズショップを目指す。そ
ういえばお腹すいたな…次見えた御飯処に入る。

そんなわけで来ました『漢定食屋』もうね、ビビッと来たよ？僕を待ってたんだよね？このお店。

『おう、遅かったなかなめ』

「あれ？おかしいな、置いてきたはずの二人が見えるなあ…疲れてるのかなあ？」

「俺達の事を見てないとか疲れてるんじゃないのか？」

「現実から目を反らしちゃ駄目にやー」

よし、違う席に座ろう。テーブル席じゃなくてカウンター席、いかにも男らしい。

「いらっしやい」

「オススメつてあります？」

「お嬢ちゃんには炒飯、漢なら激烈炒飯がおすすめだよ！」

ふつ僕が食べるものなんか決まっているようなもんじゃないか。

「激烈で」

「おつ威勢がいいねーでも辛いよー？」

「望む所です」

「多いよー？」

「…………大丈夫です」

「箸一本10kgだけど重いよー？」

「炒飯で」

「あいよ！炒飯1！」

なんなの？今日のこの敗北の連続は…腕たてでもしなきゃいけないの？いや…今日がおかしいだけだね？気にしないでおう。

「お待ち！お嬢ちゃん可愛いし威勢がいいからおまけで杏仁豆腐付けちゃおう！」

「あ、ありがとうオジサン」

「おっと！俺はまだお兄さんで通すからな？忘れんなよお嬢ちゃん！」

おまけしてもらった手前否定できない…僕は男なんだよう。

ってこの炒飯おいしいなあ、ちよつと量多いけど。

「ご馳走さまでしたー」

「あいよ！炒飯一つで480円ねー！」

ちよつと払い店を出る、当麻？つつちー？放置放置、激烈頼んだみたいで必死だったしそつとしておう。

今日こそは私服を買い直すんだから。何て決意とともに店に入ろうとしたら手を握られた。

「何だ白井さんか、ビックリさせないでよ」

「ちょっと付き合ってもらいますの」

「え？」

僕がこの日このメンズショップに入ることはなかった。

「急で申し訳ありません、ただお姉様が」

「あっかなめさん来てくれたのね？」

「拉致とも言っね」

僕が言った瞬間高速で睨む御坂さんとそれから逃れる白井さんが。何て早い首ふり。

「で、どうしたの？」

「黒子がかなめさんがいま私服なくて困ってるっていうから、一緒に買いに行こうと思って…プールのお礼もしたいしね」

「ホント？じゃあオススメの服屋でも教えてもらおうかな」

「任せといて」

そして歩き出す僕ら三人、これは……りり両手に花じゃないか！僕の時代来た！これで彼女いない歴〃年齢という不名誉なKIRIN状態から解放される！

期待と夢を胸に年甲斐も無くワクワクと歩き進んだ。

「お姉様くん！これなんていかがでしょう」

「んゝこつちもいいんじゃない？」

「一回着てもらわないとわかりませんの、というわけでこれ着て来てもらえますの？」

わたされる数々の女物の服、何で？どうして誰も僕がここにいることの異常性に気づかないの？おかしいよね？男の僕がこんな所にいるなんて。まあ仕方ない、軽く流してすぐに解散しよう。

「これでいい？」

もはややけくそどうにでもなれ

『かつかわいい……』

僕を見て動きを止める二人、あれ？どこがおかしかったかな？

「それじゃあ次はこれよ！」

まあ…早々に解散なんて無理な話だよねー。それから二時間近く着せ替え人形と化していた。何だか女の服に抵抗を抱か…っは！僕は今何を恐ろしいことを考えていたんだ…男の精神すら浸蝕するとは…恐ろしい。まあ一番恐ろしいのは、白井さんがレポートで家に送ってくれた私服群何だけどね。確かゴスロリとか入ってたよあれ。まあ何とかパンクな感じの服があるから…どうにかなるのか？どうしようもない気がするなあ…正直滅入る。

これでまた仕送りのお金が尽きちゃったから私服買えないや…どうしてこうなった。

帰りは白井さんと御坂さんの三人で食べ歩きツアーを、途中で初春さんと佐天さんも合流、姦し過ぎる。ハーレムだとは思っただけどなにか違う。何て言うかこう…中の良い女の子グループ的な？それに僕も食い込まれてるみたいな感じ。泣けてきた。

泣けてきたけどこのクレープおいしい。ちょっと甘いけど。

「じゃあ今日はここいらで解散といきますか、あたし達も門限あるしね」

「そうですねー、あー楽しかったなあ」

「そうですね、久し振りにゆつくり出来ましたわ」

「じゃあ白井さん私たちはこっちなんで失礼しますね」

「うんまたね初春さん佐天さん、じゃあ僕はあっちだから。今日は楽しかったよありがと、またね」

「こちらこそたのしめましたのよ？またお会いしましょう」

「ええ、それじゃあ」

何て言って急に淋しくなる、やっぱり騒がしかったからなあ。

そんなことを思いながら寮に帰る。幸いすぐそこなので帰ってすぐに片付ける時間があるだろう、多分泣きながら。

楽しかったけど…今日は楽しかったけど…どうしてこうなっちゃったんだろう、人生ってよく出来てるよね？全く自分の思うとおりに行かない。

あ、そういえばつつちーからお金受け取ってないや、メールで持ってきてさせよう。

『件名 重要案件

本文

早く金持ってこい』

これでよしと、資金調達出来た！一つくらい服買える、やった。

「忘れてると思ったにやー、あの服はかみやんが買ってくれなかったから青ピに売ってきたぜよ、定価の三倍くらいにやー」

といって受け取る、何故か寒気がした。

8月2日

何でこの人が目の前にいるのだろうか？そして何で一緒にお茶をしているのだろうか？

「何だア？」

「いや、べつに。ベクトル操作凄いですね」

「そうでもねエよ」

何だかとてもない有名人に絡まれた小市民みたいだ。まあ小市民だけどさ。それにしても一方通行さんとお茶とか常軌を逸してる。

それもこれも僕がスキルアウトに捕まったからいけないのか？それとも出かけようとした時点でいけなかったの？まあ何故か一方通行さんに助けられ何だか気に入られ何だかお茶してるんだけど…今思い返しても理解できないね。

「そういえばなんで俺の能力知ってんだア？」

「有名じゃないですか第一位アクセラレータ一方通行、能力はベクトル操作、こんなバンクで調べれば一発ですよ？」

「ふーん、まっどうでもいいけどよオ」

聞いたってそれはないんじゃない？まあいいけどさ。

「オマエ…時間操作なんだろオ？」

何を言われたのか、何故それを知っているのか。わけがわからなかった、確かに霧ヶ丘の一部の人達には知られているみたいだったけど…だからといって一方通行さんが知っているのはおかしい。霧ヶ丘だって情報をわざわざリークする必要がないし…もしかしたら『竜王の殺息』でツリーダイアグラムが貫かれた時に漏れた？情報が足りない過ぎる、早いところ情報の出所を確認しないと、僕自信が危ないかもしれない…

「別に警戒なンざしなくてもとって食いやしねエよ、ただ研究者（糞）共が血眼になって拉致しに来るかもしんねエけどなア」

そんな不吉なことを言いながら笑わないでください。やめませんか？人の不幸は蜜の味みたいなの？

「うええ？その情報はどこから出たかわかります？」

「あア？知らねエな、研究者（糞）共がざわついてんの聞いたただけだしなア。ただ、もう目を付けられてるみてエけどなア。」

一方通行さんの向くほうをチラと見れば成る程、屈強なSPみたいな人が監視のような事をしていた。ふむう？大ピンチなんじゃないかな？街を歩けば監視カメラ、寮は住所バレしてるだろうし…僕に安息の地はないのだろうか？いやいや、あれは僕じゃなくて一方通行さんの監視だって、きっとそうだって。

「モテモテじゃねエか、よかったなア？」

どうせなら可愛い子達に囲まれたかったです、御坂妹に囲まれたら卒倒するかもしれないけどね！同じ顔でステレオ再生とかシャレにならないって。

「どうしよう…もう寮にも帰れないよ…」

「はア…これやるよ、後はテメエの好きにしな」

そして渡された書類、それには研究所の名称が羅列されたもの。研究所の位置。タイムリーチルドレン内部構造。それと…時間操作量産計画。タイムマニピュレータ時間移動計画などなど、正直どうしようもないくらい羅列されていた。まあ気持ちはわからなくもない、時間移動という理論としては不可能な事に一番近い位置に僕はいるのだから、間違いなく人類の夢の一つにして叶ってしまえば一番の禁忌。

「僕にどうしろって言うの？」

「気に入くわなけりやあぶち壊すもよし、ヘラヘラと媚びへつらうもテメエの勝手だ、俺の管轄外ツて奴だなア」

じゃあ俺はそろそろ帰るぜエ？といって席を立つ一方通行さん、うんどSなのは間違いない、笑ってるもん。置いていかれて店出た直後に捕まるとかシャレにならないから直ぐに追いかける。ちよつど会計していた。

「はい、僕の分」

「あア、じゃあなア？」

受け取ると直ぐに歩いてしまふ、ちよつと待ってって、今置いていかれたらやばいんだって。必死においかける。

「おい、あれって一方通行じゃねえか？」

「隣は彼女か？置いていかれてるってのに健気だなあ」

「レベル5だからって可愛い彼女自慢しやがって…」

周りがなにか言っているけど気にしてはいられなかった。ただ…何かを失った気がした。

まあそんなことを気にしているとベクトル操作している一方通行さに追いつけないから全力で走る。向こうもこちらがギリギリ追いつけるスピードに抑えてくれているみたいだ。それなら一緒に歩いてくれればいいものを…何て考えているうちに路地裏のまで来ていたようだ、嫌がらせか！これなら人通りが多い道を歩いたほうが安全だったかもしれない。そんなことを思いながらももう後には引けない、まだまだ時間操作は温存しておく。まあ老けるのが嫌なだけなんだけど…

「ハハツ犬ところみてエだなアオイ！散歩が好きなンですかア？」

もはや無視しかない、相手にしてられないけど離れたら僕はバツドエンド直行だ。そんなことを考え悔しさに歯を食いしばれば不意に右の路地から人が出てきて僕は避けられなかった。

「うわっ」

「痛ってえ！？んだゴラア！」

向こうは大柄な男だったらしく僕は弾かれて転んだ。運が悪いことに足を捻ってしまったようだ。

「痛っ！？…ご、ごめんなさい大丈夫ですか？」

「テメエか！痛てえじゃねえか！」

目の前の男はスキルアウトだろう、足を捻ったこの状態じゃあ逃げられないし、周りには…SPがもう囲みを作っているようだ。

「な、何だテメエら！」

「君！早く逃げて！痛っ！」

「関係ないものには消えてもらおう。」

SPがポケットに手を入れるとスキルアウトは後ろを向き逃げようと走り出した、だけどそれは背後から銃で頭を撃たれて終わった。僕は頭が吹き飛ぶのを見てしまい吐き気を堪えるのに精一杯だった。

「こちら、目標の確保に成功した帰還する。」

堪えている間にさるぐつわと目隠しそれと腕と足を縛られ大きな鞆のような物に詰め込まれそこで僕の意識は途絶えた。

「確保は出来たのかよ？あア？」

「作戦は成功だ」

8月2日（後書き）

一通さん口調難しすぎ、漢字に横文字当てるの難しすぎ。

結論

駄文

そして一話、と言うより一日じゃあ終わらなかった

8月3日

目が覚める、辺りを見渡す。どうやらここは研究施設内みたいだ。

いかにもな作りをしているし僕の座らされている椅子も機械に繋がっていた。もちろん腕は椅子に拘束されていた。

けどまあ、身体をいじられた様子が見えないところと頭に付けられた機械から推測するに、僕が目覚まして能力を使ったときの脳波を調べたかつたんだろう。

いきなり実験材料を使い物にならなくても意味ないしね。とまあ現状の確認が済んだのはいいけど…これからどうしようか。拘束具は頑丈だし、現在地もわからないし…取りあえずはこのまま待機かな。と思っていたがどうにか抜け出すために拘束具を調べることにしよう。

形状は腕輪のようなかたち、材質は革、腕力さえあれば切れそうかな？まあ無い物ねだりをしてもしかたがない。革の部分をよく観察する。意外と摩耗しているようだ、所々弱そうな部分が見える。しかも根元の部分、両腕とも同じような部分が摩耗していた。ということは僕以前にもこういう目に遭っていた人がいるということ。その人達の必死の抵抗でここまで摩耗したということだろう。可哀相だけど今だけはその人達に感謝しよう。そしてその摩耗した部分をさらに擦り減らす。これでいつでも切れる位に擦り減らす。あとはタイミングかな…

また部屋を見渡す、電気はついている。部屋の隅には監視カメラ。そして部屋を見渡すような配置のガラス張りの部屋が少し上に見える

た。そこに人は3人。一人が僕を見下ろし、もう一人が機械を見てもう一人は電話をしているようだった。

この配置には見覚えがある、一方通行さんのリークしてくれた研究施設の地図の一つ。といっても似たような配置の地図は全部で三つあったので候補は三つだ。

確か部屋を出てすぐ前にトイレがあれば候補の中から一番広い研究施設。

右が行けずに左だけならば小さい。

目の前に右左真つすぐどこにも行けるならば中くらいだったはず。そして中くらいならばアンチスキルの詰め所が近い。小さければ寮が一番近いが詰め所までは意外とある。大きければ詰め所も寮も遠く一番厳しい配置の研究施設だったはずだ。

ベストは中くらいの研究施設、

ベターで小さい

バッドで大きい

こればかりはどうにもならない。僕自身の運に左右されるところだ。まあこんなめに合っていること自体運が悪いという事なんだと思うけど…

特にやれることもなさそうだし目を閉じる。そこまで神経が太いほうじゃないので眠れはしないが落ち着くことは出来る。そんなことをしているうちに目を開けガラスの向こうを見ると機械に向き合っ
て頭をかいている人しかいなかった。チャンスだろう、罠かもしれないけれどもしかしたらこれ以上のチャンスは無いかもしれない。拘束具を切り能力を発動し速攻で部屋を出る。

部屋を出ると能力を切った。目の前には三つの通路が現れた、中くらしいの研究施設らしい。運が回ってきた。脳内の地図を呼び起こし出口と潰しておくべき研究施設のスパコンの位置を思い出していた。

「出口と正反対か…能力をうまく使っしかないか」

ピーッピーッピーッピーッ

眩くとアラート音が鳴り響く、もうばれたか。

近場に研究施設の監視カメラの端末があったことを思い出しその部屋に入り込んだ。都合がいいことに誰もおらず監視カメラもなかった。

「とりあえずこれを壊しておけば…」

手段としてはパイプ椅子をたたき付けるものだった。手が痺れたけどね！

直ぐに移動しよう、壊したことでここにも人が来るだろうし。スパコンの部屋に向かい走る、途中すれ違うことになった研究員は角で最大出力の能力発動で気づかれないように走り抜いた。

そしてたどり着いたスパコンの部屋。誰もいなかった。不審に思ったが居ないものは仕方ない、運がよかったと思えばスパコンの操作をする。

「なに…これ…」

そこにはタイムリーチルドレン時間操作量産計画とその運用方法だった。

その運用方法とは量産された僕を複数使い脳波をリンクさせ演算効率の上昇。そしてその演算は時間移動の演算だった。そうこの研究施設は僕を量産しタイムマシンとして活用しようとしていたのだろう。

「ま…さか」

それだけじゃあなかった。『一方通行絶対能力移行計画』
レベルシフト

これにも僕がからんでいたようだ。概要を読むと本来ならば御坂妹だけでやる予定だったらしいが、僕とのタッグを組ませた状態で殺させることによる効率化。それを読んだ瞬間カッとなり何度も何度もパイプ椅子をたたきつけついに破壊した。

「はあ…はあ」

「やっと気付いたんですか？ 案外弱いおつむしてんなア」

肩で息する僕に後ろから聞こえる声、一方通行のものだった。

「あの時…僕に接触して来たのは僕を捕まえるためだったんだね？」

「ハッ、当たり前じゃねえかナンでオマエなんかを助けなきゃいけないんですかア？」

「信じてたのに…」

「チッ、さつさといけよ。さもねえと…殺ッちまうぞオオオオ！？」

瞬間、ベクトル操作で僕に向かって来る。僕に撃退する手段はない。逃げるしかないのだ。

能力を使い最大の力で逃げる。もちろん今回は一方通行にも遅くするようにしているためみるみるうちに距離をとることが出来た。

「チツ、これでアイツも危機感を抱くンだろうなア？世話かけやがツて」

いつの間にか僕は研究施設から脱出していた。それにしてもおかしい。ベクトル操作なら僕の進行方向のベクトルを変えてしまえば逃げなくすることは容易だったはず…もしかして逃がしてくれた？だつて逃げるとき不自然なくらい人に会わなかったし…アラートが鳴り響いていたからすれ違つてもおかしくないはずなのに…それにスパコンの部屋に誰もいなかったのもおかしい話だ。

「…ありがとう」

目の前にはいないけれど、一方通行さんにお礼をいう。これからはそれなりに気をつけた生活をしよう。

それよりも大変なのはこれからだろう。おもに僕の服装のせいで、何で布一枚なんだろう？首から足首まで隠れる大きさといつてもその下はなにも身につけていないのだ。今が早朝でよかった、若干人はいるけど今ならそこまで人目につかず寮に帰ることが出来るだろう。

朝日が昇るなか、施設からの開放感と服装の尋常じゃない開放感で顔を赤くしながら帰ろうとしたのは言うまでもない。

「不幸だあああ…ってアンチスキルのところに行かないと…なにこの羞恥プレイ不幸だあああ」

近くの詰め所に駆け込むと知的なお姉さんが対応してくれた。はあはあ言っただけど大丈夫なの？風邪？無理しちゃあいけないよ？

「わかりました、それでは直ちに調査に入りましょう。スパコンを壊してしまったとはいえ他にも研究資料は残っているでしょう。貴女は私が家まで送ってあげるからだいじょうぶよ？」

とにかくこの羞恥プレイからの解放が最優先。というわけで車で寮まで送ってもらった。助手席に座っていたけどすごい視線を感じた。やっぱり車の外からでもわかつちやうのかな？は、恥ずかしい！と身体を見えないようにもぐりこませたが。

「危ないからちゃんと座りましょうか？」

ひどい…結局我慢して大人しく座っていた。車から降りれば礼をいい走って自室に飛び込んだのは言うまでもないよね？

8月3日（後書き）

という訳でオリジナルな話、危機感を抱いてもらっお話でした。

そして気付いたら一通さん超いい人w

もはや誰だかわかりませんね

8月5日

拉致事件から二日、僕はやっと外に出ようと思った。昨日一日はご飯も何も取らず鍵をしめて引きこもっていた。さすがにお腹すいたからご飯でも買いに行こうかと着替えているところ。昨日一日あの布のままだったのは内緒だ。

で、着替えているときに気付いたことがあるんだけど…携帯とか無くなってる、拉致られたときの服に入りっぱなしだよ…

「不幸だああ…」

歎いていても始まらないので着替えて外に出る、取りあえず当麻辺りにお金を借りよう、じゃないと何も出来ない。

「当麻ー？いるー？」

「はいはい、今出ますよーってかなめか、昨日はどうしたんだ？ずっと家に籠り切りだったみたいじゃねえか」

「ちよつとね…。でさ？申し訳ないんだけど…2千円位貸してくれない？」

「え？珍しいな、かなめが金欠なんて」

「やむを得ない事情があつたんだよ…」

つい遠い目をしてしまうのは仕方ないことだと思う、いまだに実感が沸かないけど僕の身柄が危ないということはわかった。…何で僕

なんだよ、もつと他にいるんじゃないの？

「そうか…ほらこれでいいか？」

「やった！ありがと当麻！」

手を握りグラツチェ！と頭の中で言うておく。何故か赤い顔をしていたが気にしないでおう。色々危ないからね、おもに僕の心が。とまあ資金の調達もすんだことだし昨日のアンチスキルの詰め所に向かう、もしかしたら僕の服とか見つかったかもしれないからね。

「残念ながら服は見付かっていない」

「え？じゃあ財布とか携帯もですか？」

「いや、財布と携帯は君の事を調べていたと思われる部屋から見付かっているが服だけは見付かっていないんだ。」

「どういうこと？普通貴重品から持って行くものじゃないの？まあそんなに大層なものは入ってないんだけどさ…」

「取りあえず財布と携帯が見付かっただけよしとしますよ、ありがとうございました。お仕事頑張ってくださいね。」

対応してくれた男の人に感謝を伝え、事務所の中の人にも声をかけると外に出た。何か男臭い今日の事務所はお祭り騒ぎになっていたが何か事件の手がかりでも見付かったのかな？

取りあえず財布と携帯も帰ってきたことだし、中身も無事だったことだしよしとしよう。

「当麻ー？うんそうそう、でさ、今日これから暇？どっか行かない？あー補修だっけ？わかったごめんねー」

そうか今日補修なのか…どうしようかな。

「あれ？かなちゃん？かなちゃんだよね？」

後ろから声をかけられ一瞬びくつとしたけど聞き覚えのある声でほつとする。

「うん？あー！鈴木さん、久しぶりだね」

霧ヶ丘時代の友人だった・

「うん、久しぶり。かなちゃんどうしたの？一人みたいだけど」

「ちょっとした用事でね？まあ終わっちゃって暇になったんだけど…」

「あ、そうなの？私も今日暇なんだ、買い物に行こうと思ったんだけど一緒に行かない？」

「いいの？じゃあ行こうよ何買うの？」

うん、思いがけない再会だったけど、今日は時間潰しに悩まなくてすみそうだ。

「うん、下着」

前言撤回色々悩みそうだ。男として。

そんな僕の思惑とは別に既にランジェリーショップが顔を見せている、もつと遠くにあればよかったんだ！そんな心の叫びも虚しく店に入ってしまった訳だけど。

「そういえば、かなちゃんてあまり派手なのは好きじゃないんだっけ？」

「うん、だって僕に勝負時なんてないし。」

あつてたまるか、あつたとしてもそれは相手が女の子であつて僕の服装は男のもの何だからこんなものを履いているはずがないんだ。

「意外、かなちゃんなら共学に行ったと同時に男漁り放題だとおもつてた。」

「僕はそんなにモテないよ…」

その方向の愛はいりません、もっとガチムチの人にむけてあげてください。

「かなちゃんこんなにかわいいのになー」

「うわ！」

「何でこの魅力に気づかないかなー？」

抱き着き、頭撫で、ほお擦り、何だか玩具だ。いやこんなに冷静でいる場合じゃないんだけど。おそらく一周して冷静になってるんだ

と思う。

「と、とりあえず下着選んじゃお?」

「んー、名残惜しいけど真面目にやろつか」

真面目に…ねえ?下着なんてこれいいなーと思ったらそれでいいんじゃないかな?少なくとも僕はそうだし。まあ男と女じゃあ勝手が違うつていうのはわかるけど。

「これなんかどう?かなちゃんの魅力が一層引き出されること間違いないって!」

「…僕は変態じゃないんだよ?」

僕を変な方向に連れていかないで…まあついていくつもりは無いけど。

「かなちゃんの魅力、なんでみんな気づかないかな?」

「そういうのは鈴木さんの目立たない大事な人に言っておいてください」

「かなちゃんだから…だよ?……………なーんてね私にそっちの気はないし?」

「その疑問形は危ないって。でさ?決まったの?」

「うん、今買ってくるね」

たた、とレジに向かう後ろ姿を見る。鈴木さんって悪ふざけが過ぎるんだよね、おかげで僕は振り回されっぱなしだよ…

「お待たせ、じゃあこれ」

何やら二つ紙袋を持っている、そのうちの一つを僕に渡してきた。

「ん？なに？」

「かなちゃんのも買ってきたよ、ダメだよー？いまどき勝負下着の一枚や二枚持つとかないと」

え？僕はそんなものより鈴木さんとの関係をより親密にだね…え？思考は明後日の方向に旅立ったようだ、身体は認めたくは無いが紙袋の中へ、一応中見て感想の一つや二つを言わないとダメだろう。

「こ、これ？」

「うん、かなちゃんが履けばどんな男も一発だつて」

一発で逮捕ですね？わかります。意味がわからない、男の僕がヒモパンとか意味わかんない、永久封印間違いない。捨てないのかって？買ってもらったのにそんなことは出来ません！勿体ないお化けが出るよ。

「う、うんありがとう。一生で履く機会があつたら履かしてもらうね？」

「意外とすぐかもよー？つとそろそろいい時間だね帰ろつか？」

「うん、そうだね。霧ヶ丘の寮はあっちか…僕は向こうだからここ

でお別れだね？」

「うん、じゃあまたね。今度メールするよ」

「うん、僕もするよ」さあ、帰って今日あったことを忘れるためにも部屋片付けよ。僕…帰ったらこの下着永久封印するんだ…

ああ、当麻に二千円返さないと。

8月7日

8月6日白井黒子

最近お姉様の様子がおかしい、急に足をバタバタし始めたり。前はこんな挙動不審な事はしていませんでしたのに…まさか！あの殿方と何かあったんですの！？私はそんなことを考えながら隣のベッドで悶えているお姉様に目を向ける。ああ…相変わらず美しいですわ。

「お姉様？」

「ん？何よ」

「いえ、何でもございませんのよ」

「変な黒子。さて、明日にそなえて私はもう寝るわよ？」

「わかりました、おやすみなさいませお姉様」

パチツと電気が消される。それにしても明日…ですの？私とは出かける予定ありませんのに…まさかあの殿方ですの！？これは一大事ですわ、一刻も早く対策を練らなければ…

私はとあるところにメールを送りましたの。

『神城かなめ

無題

一大事ですの！明日の朝迎えにいきますの』

無骨なメールですが、一大事というのが伝わればよしとしますわ。

8月7日神城かなめ

朝起きると携帯にメールが来ていることに気がついた、差出人は白井さんらしい。迎えに来るって…僕何も連絡入れてないんだけどねえ。まあそんなことは今に始まったことじゃないし（何だか泣けてきた）とりあえず準備をしてしまおう。

「はて？準備って何すればいいんだろう？」

僕は何も聞いていないしメールにも何が必要とかは書いていなかった。とりあえず着替えておけばいいかな。

クローゼットから着替えを取り出す。もちろん制服なんて事は無く、私服を…女物なんだけどね…。まあその中でも割りと中性的なものをコーディネート、僕の男らしさがカバーしてどうやってみても男にしか見えないという寸法。しかし、今一度見返すと僕のクローゼットって男としてどうなの？こんなフリフリのゴスゴスしい服やワンピース、スカート、女物の制服2着、しまいにはパン…ちよっとまって？何でこれがここにあるんだ？もつと奥に隠さないと大変なことになる！具体的に僕の人間性が終わってしまう。

すぐに奥深くに隠さないと、クローゼットの足元にある収納スペースにしまう。ふう、大惨事が起きるところだった。まあクローゼット見られるだけで大惨事なんだけどね。

「あら、色々な服を持っていますのね」

なん…だと？まあ重要機密を見られなかっただけ「さっきのはかなめさんの勝負下着ですの？」がつつり見られてたよ。

「白井さんは何も見なかった」

「まあ勝負下着なんて気に入った殿方にしか見せないもの…はっ！かなめさん、気になる殿方がいるんですわね！？」

「いないよ！」

「大丈夫ですよ、わかっておりますわ。で、ここだけの話誰ですよ？まさか上条という殿方ですよ？」

「当麻はそんなじゃないって」

全く、あれなの？僕をおちよくって遊んでるの？

（さっきの言い方と、態度…全く、あの殿方はお姉様だけに飽きたらずかなめさんにまで手をだすなんて）

お互い何か考え事をしていたようだ、とりあえず朝ごはんでも作ろうか。

「白井さんは朝ごはんは食べてきたの？」

チラリと時計を見ながら、ただ今午前8時、学校はないいい時間だろう。

「いえ、食堂が空いていない時間だったのでまだ食べていませんの」

「そう？じゃあ準備するから食べなよ」

「いいんですの？」

「うん、まあおいしくないかもしれないけど。それでいいなら」

「じゃあお言葉に甘えさせてもらいますわ」

「何かリクエストはある？」

「それならクロワッサンを」

「…やれないことはないけど時間がかっちゃうよ？」

「冗談ですよ、でも作れるとは思ってなかったですわよ？」

冗談って…それで作りはじめちゃったらどうするんだろ…まあいいか洋風にしようかな？ああ、確か常盤台って洋が多いって聞いたことあるなあ、和風にしておこうか。幸い色々あるし。

「じゃあ適当に準備するから待っててよ」

「手伝いますわよ？」

「お客さんだし座ってていいよ」

白井さんを待たせて料理を始める。今日は豪勢にいこう。多少は見栄を張るのは人間として仕方ないと思うんだ。

そんなことを考えながら冷蔵庫を開ける、食材を取り出して下ごし

らえから。まあ特にやることはないんだけどね。なんて考えながら
も鮭の切り身を2枚焼きはじめる。

鮭を焼いている間に味噌汁をつくる、水を鍋に入れお湯を沸かす。
そうしたら卵を溶く、作るのは卵焼き。

「卵焼きは塩と砂糖どっちがいい？」

「どちらでもかまいませんわよ？…まあ砂糖のほうが…」

なんて聞こえた、まあ塩か砂糖かで離婚する夫婦もいるみたいだし
結構重要なのかな？溶き卵に砂糖を混ぜ卵焼きを作りはじめる。焼
きはじめる前に鮭の様子を見ることは忘れちゃいけない、焦げちゃ
うからね。一気に卵焼きを作ったら切って皿にのせ完成。いい出来
だ。

次に昨日作ったほうれん草の胡麻和えを小皿に移し見栄えをよくす
る。見栄えは大事。そして鮭の様子を見ながら味噌汁の具ざいを切
る、今日はネギと豆腐。まあ出汁が出ないから粒状の鰹出汁を一杯
入れる、後は具ざいを入れて味噌を溶かす。蓋をしめて残りの準備
時間を蒸らせば完成。そうしたら焼き上がった鮭の切り身を皿に移
す。味噌汁を添え、あらかじめ炊いてあったご飯を盛れば完成だ。

一汁三採、理想的な日本のバランスだって聞いたことがあるような
無いような。まあ食事は出来たしいたごうか。

「料理上手ですね」

「そんなことはないよ、一人暮らしで自炊していればこれくらいな
ら誰にでも出来るよ？さ、いただきます」

「いただきますわ」

チラリと様子を伺う、多少自信があるとしてもそれはやっぱり一般人としての範囲内、プロじゃ無いんだからそれは心配になるって。最初に手をつけたのは味噌汁。いいなあ、僕猫舌だから最初に味噌汁飲めないんだよね。いつも一番最後に飲むよ。

次に卵焼きに手をつけた。これは結構自信作。

「どうかな…？」

「…おいしいですわ、しっかりしているのに中が半熟でフワフワ。味付けも私好みになっていますのね」

中々の好感触、まあこの焼きかたは冷めると美味しく無くなっちゃうから一度に食べ切れるときにしか出来ないんだけどね。

「ま、安心かな？」

「なにがですか？」

「白井さんの味覚に叶ったって事は僕の料理も捨てたもんじゃないなって」

「あら？この腕前でしたらすぐにでも嫁に行けますわよ？」

嫁ねー…よめ！？婿じゃなくて！？あまり気にしないようにしよう、うん。

そんなこんなで食べ終わり片付けも終わった、時間でいうと10時前くらい。

さて、なにしにきたんだ？この人は、僕の小説を読み始めちゃったぞ？

まあいいか、僕も宿題とか…はいいや、人前でやるようなものじゃ無いしね。本でも読んでようか。

そんな事をしていたら1時前、そろそろお昼時だ。

「そろそろお昼だけど何か食べに行かない？」

「もうそんな時間ですか？これが面白くて時間を忘れていましたわ」

「そう？なら貸してあげるよ？」

「あら？いいんですの？」

「もう読み終わってるしね、適当なときに返してくれればいいよ」

「ありがとうございます、買おうか悩んでいたんですよ？」

それはそれは、まあ借りれるならそれが一番だね。学生ってお金持っていないしね。あ、常盤台はお嬢様学校だから違うか。

「じゃあお昼はどうしようか？何か頼んでもいいし外に行くのもいいよ？何なら御坂さんとか呼んでもいいし」

「お姉様！？そうですわ、お姉様ですよ！」

「あ、うんわかったよ」

電話をかけてみる、3コールくらいで出た。

「もしもし？御坂さん？今日暇かな？え？うんああ、白井さんならうちに遊びにきてるよ？御坂さん達も来る？まあうちには何も無いけどね。ん？わかったよ待ってるね」

「どうしたんですの？」

「御坂さんと初春さんと佐天さんが家に来るってさ、何かお昼ご飯買ってきてくれるって、30分かかんない位には着くってさ」

「お姉様達が？」

「うーんと考え込んでしまった、何だろうはぶられたとか思ってるのかな？まあ僕なら泣くね、間違いないね。」

さて、人が結構来るみたいだし準備でもしておこうかな。

30分位経ってチャイムが鳴る、来たかなーと玄関を開けるとそこには当麻がいた。

「あれ？どうしたの？」

「俺の部屋が…ふこうだああ…」

何かあったんだろうか？ちょっと様子を見に行く。

「あ、かなめ！これを見るんだよ」

それは何ともまあご愁傷様でしたと言える。インデックスの前には積み重なって出来た皿等の山、開け放たれた冷蔵庫は空になっており役目を果たそうにも果たせない状態になっていた。

「財布は？」

「一応まだ入ってるけど…もたねえよ…」

「わかった、今日は食べに来なよ」

「いいのか！それを言うてくれなかったら上条さんのミイラが完成しちまうところだったぜ」

「ミイラか…みてみたいなー」

「鬼イ！？」

「あはは、ウソウソじゃあ後で家に来なよ、ご飯時になったら電話で呼ぶからさ」

「おう、わりないいつもいつも」

「いいよ、気にしないで。じゃあね？」

そして隣に戻ると何やら賑やかになっている、御坂さん達が来たのかな？玄関を開けて中に入る。思ったとおり御坂さん達が着いていたようだ。

「こんにちはって！何してるの！？」

何故か全員で僕のクローゼットを漁っていた。

「んー？かなめさんの服を拝見してね？こんにちはお久しぶりです」

佐天さんが答える、恐らく一番喜々としてやっていたに違いない。

「かなめさんって結構大胆何ですね」

「あれはあたしもびつくりしたわ…」

！？あれってなんだ！？僕は何を見られてしまったんだ？

「大丈夫ですわよ？勝負下着の一枚や二枚、どうってことありませんわ」

それは僕がいうべき台詞何だろうけど僕はそれを口にしたくない。

「で？僕の心をえぐったところで何するの？」

「あ、この服力ワイイー」

と、佐天さん。聞いてよ…何だろう、この無力感は。

「ほんと。あ、こっちも力ワイイですよ？」

「それは全部御坂さんと白井さんが選んでくれたやつだよ」

「でも全然着てないんじゃないですか？」

「僕にそんなフリフリは着れないよ…」

「似合いそうなのになー」

そんなことあってたまるか、どうせキモっていうに決まってる。

「それなら今来てみてくださいよー？」

「僕が？」

「それ以外に誰がいるんですか？」

君等が着ればいいじゃない、僕を巻き込むのはやめてもらいたい。
僕はNOと言える日本人。

「いや、やめておくよ。恥ずかしいし」

そんな感じで諦めてくれると思っていたら後ろから白井さんが忍び寄ってきていた。羽交い締めになれ耳元で囁かれた、なにこれ？恥ずかし過ぎるんだけど。顔真っ赤だよ絶対。

「このまま全裸にさせられて私達に着替えさせられるの自分では着替えるの、どちらがよろしいんですの？」

「っ！わかった、わかったから！自分で着るから！」

なにこのイジメ、僕のほうが年上だよね？つらい。

仕方なく洗面所に渡された服を持って入る、向こうも着替えを見て

ない状態で見えたかったからか何も言ってこなかった。

「ゴスロリなんて絶対に着ないと思っていたのに…タグつけっぱなしだよ…」

プチプチとタグを取っていく。そして着替え洗面所からでる。

「これでいいんでしょう？これで」

もうやけくそ、どうにでもなればいい。あれ？なんかデジャヴ。

「へえ、やっぱ可愛いわねー」

御坂さん、顔赤くしてチラチラ見られるのって相当恥ずかしいんだけど…

そんなかしましい時間は過ぎるのも早い。もう日が暮れかけている。よし、話題転換。夕御飯の準備しちゃうおう。

「そろそろいい時間だけど夕御飯食べていく？作るけど」

あれ？そういえば僕お昼食べてないな…ってあれ？明らかにファーストフードの空の包装紙が見えるなあ…白井さんは昼は食べたって事だね？ならよかったよかった。お腹すいた。

「いいんですの？私朝もいただいて夜もなんて」

「いいいいいよ、たまには先輩らしいところ見せないとね？」

今日なんていじられてただけだからね。

「私たちもいいんですか？」

佐天さんと初春さんがそと手を挙げて上目遣いで聞いてきた。あ
あもう、任せといて！

「アタシも？」

「もう任せといてよ」

というわけで決定、料理担当は僕、理由は朝と同じだけど他にもキ
ッチンが狭くて入れないというのもある。

作るものはビーフシチューとパン。パンはあらかじめ醗酵させてあ
るものがあるのでそれをオーブンで焼くのみ。

ビーフシチューも具材を焼いて煮るのみ、後はルーをいれれば出来
るという簡単なもの。

「準備完了ってね、後はお肉が柔らかくなるまで弱火でコトコト煮
るだけかな。」

「相変わらず見事な手際ですわね」

「すごいです……」

「……………」

上から白井さん、初春さん、御坂さん。

「け」

「け？」

「結婚してください！」

「うえ！？」

佐天さんの問題発言、それでも僕は平和です。きつと。

ちよつと時間を潰してちよつと小さいテーブルに人数分並べる。

「先に食べてて」

一言言い残し焼いたパンとビーフシチューを持って当麻の部屋に。

チャイムを鳴らすと玄関が開く、中からは当麻が出て来た、チラリと見たインデックスは餓死寸前なのか机に俯せに倒れていた。

「当麻、これ約束の。家今ちよつと人結構きてるから持って来たよ」

「おおお！サンキュー！」

「まあ簡単なものだけだね」

「有り難く食わせていただきます」

「うん、じゃあね」

玄関を閉める、インデックス！飯が来たぞ！なんて声が聞こえる。持つて行くの遅かったかな？まあそこは僕の都合に任せてもらいた

い。じゃないとどれだけ偉そうなんだ？つてなるから。

渡し終えて僕の部屋に戻ろうと顔を向ければドアが慌てて閉まる音が聞こえた、待っててくれたのかな。わるいことしちゃったな。

部屋に戻ると何故かテンションの下がった御坂さんがいた。ああ、そういえば御坂さんは当麻のハーレムの一員だっけ。

「お隣りさん金欠なんだって、困ったときはお互い様だからね、ちよつと分けてきたんだよ、じゃあいただきます」

フォローは忘れずに。ん？べつに僕は男なんだからフォローの必要は無いはず。無いんだよね？

悶々と頭の中はしていたけど食事を終える。

「御坂さんと白井さんは門限大丈夫？そろそろじゃない？」

「えっ！ほんとだ、じゃあアタシ達は帰るわ」

「初春、私たちもかえろっか？」

「そうですね、かなめさんご馳走さまでした」

初春さんのご馳走さまから次々にご馳走さまが、まあ満足してもらえたらよかったよ。

全員帰るとのことなので見送りに。寮の一階まで送った。

「じゃあね、また今度」

そして別れたのはいいけどよく考えたら当麻のところにゴスロリで行ってたことに気づいて泣きたくなった。

「ん？あれかなめだにゃー」

「ほんまや、つかゴスロリカワイイーなー」

「ホントだぜい、本人何か悶々してるけどにゃー」

「ああーそれもカワイイヤン、持ってかえってええか？」

「かなめがこっちに気づいたぜよ、青ピお前死ねって」

「酷い！」

8月7日（後書き）

最近更新速度が安定しない精進ですね

そんなこんなで全く気づいてなかったのですがユニーク100000突破していました、お気に入りも1000突破。

そろそろアクセスも100000突破のようで、何とも有りがたいことですね、これを励みに頑張らせていただきます。

8月13日（前書き）

お待たせしました、待ってたのか？

お察しのいい皆さんならタイトルというか日付で把握した人もいるでしょう。

取りあえずそのことで被害に遭った人に一言

姫神いいいいい！！ごべえええん！

後書きに連絡があるので一読していただければ幸いです

それではどうぞ

8月13日

「あれ？かなめ？さっきまで本屋にいたんじゃないのか？」

「え？今日僕はまだ家からでてないよ？」

ちょうど朝、寮の部屋からゴミを捨てに出た時に当麻とそんな話をする。

「だってさっき土御門が本屋に居たって言ってたぜ？」

「見間違いじゃない？」

まさか、タイムリーチルドレン？あのスパコンから情報をサルベージしたのか？それとも、他にバックアップを取っていた？まあいい、ちよつと調べてみよう。

当麻と軽く話して部屋に戻る、これからどうしようか？そんなことを考えていた。いくら考えてもまとまらなかったなので取りあえず外に出た。あの施設に向かうことにする。

施設は閉鎖されていたので忍び込んだ。電気は消えていて真っ暗だ。しかし耳を澄ましていると、パソコンのファンの音が響いている、スパコンの合った部屋辺りから聞こえていた。

音の原因と思われるところに行くと、スパコンの近くに合ったコンピュータを操作している人物がいた。僕だ。

何を言っているのかわからないけど顔は僕のものだ、だから僕と表現した。

今更ながら冷静に考えると、DNAなんて簡単に手に入るものだ。

例えば、学校の僕の机周辺では僕の髪の毛が。血液検査と称して血の採取だって。取ろうと思えばいくらでも可能なのだ。ただ、自動的にDNAマップを提供してもらえないと犯罪になってしまう。だから僕は今までDNAマップは提供しなかったけど、無断使用したのだろう。人類の夢でありながら叶えてはいけない夢物語。時間移動。

人間の欲望によって犯罪を犯しながらも、DNAの無断使用だけの犯罪だ。懲役を受けても生きて刑務所から出られる。それにもし時間移動が成功すれば、それだけのリスクで多大なリターンが見込める。そう考えたら、ツリーダイアグラムで僕のがばれた以上そんな人間が出てきてもおかしくなかった。その結果が目の前のタイムリーチルドレンなんだろう。

「あんたが俺達の兄貴か？何だ何だ、女々しい顔しやがって。そんな顔してっから研究員の阿保が性別間違えんだよ。どうしてくれるだ、ああ？」

確かに胸が少し出ていた。

「はは、DNAに性別を間違われるつてのもすごいよね？」

「笑い事じゃねーっつの！」

しょうがないじゃないか、もう手遅れだよ。もうね？最近女に生まれたほうが幸福だったんじゃないかって思ってきたくらいだよ。

「そっといえば君は何号なの？」

「あ？俺か？まだタイムリーチルドレンは俺だけだ、成功例として生かせてもらってる」

「クローンが失敗？」

「クローン自体は成功してる、ただ能力を伴わかったから処分されてる。俺も能力がなかったら消されてるとおもうとぞっとするぜ」

成る程ね、じゃあまだ時間移動なんて出来ないし。絶対能力移行計画もタイムリーチルドレンは関わってないのか。

「君はなにをしてるの？」

「あ？みりゃわかんذار？データのバックアップを取らされてんだよ」

そんなん知るか。そうは思ったけど、口にはしなかった。

「君はどうやって暮らしてる？」

「あ？さっきからうるせえな。研究所に決まってるんだろ？」

ほんとに僕か？こいつ、口、悪過ぎるぞ。

「ふん、別にお前の住んでる部屋で保護してくれても良いんだぜ？」

「なんだ？ツンデレ？君ツンデレ？ほんとに僕？」

「あ？お前頭大丈夫か？」

酷い…口悪すぎ、心に刺さる。

「わかった、家に来なよ。一応、僕の妹ってことにしておくからさ」

「一応って何だよ…俺じゃ認めてくれねえのかよ…」
最後の言葉は僕には聞こえていなかった。

寮に戻ると研究所の位置を聞いて、メモを取った。

「しかしせめー部屋だな？おい」

「霧ヶ丘の寮は広かったんだけどねえ…」

「よし。お前、霧ヶ丘に復学しろ」

「じゃあ僕じゃなくて君が通いなよ、あそこ女学院だし」

「そういえばお前男だったな、なんで通えてたんだよ」

はあ、なんて重い溜息をつかれた。その溜息は僕が吐くものだと思うけど。

「取りあえず俺の名前を決めろよ、名前が無いと怪しまれんדר？」

「そうだね、考えておくよ」

食べ物がなかったので外に食べに出る。二人組の男達にナンパされまくった。女一人しかいないいつつの。

途中、一方通行が居た。回転寿司を食べていた。カウンター席で一人で。そのレーンを挟んで向かい側のテーブル席で食べているとたまにレーンが逆走していた。間違いなくベクトル操作だろう。能力の無駄遣い。

「これが寿司か、寿司って安いんだな。」

「回転しない寿司は高いよ?」

「ああ、確かに品質が…」

そこは貧乏人に合わせてるからね、期待しちゃいけない。

一通りお腹いっぱいになると帰路につく。途中またもナンパされる。モテモテでよかったね。僕?もちろん男だし誘われるわけ『お前のほうがしつこく誘われてたじゃねえか』地の分に電波で突っ込むなといいたい。

「しかし、何て言うか…家族って良いな」

「ん?なんかいった?」

「なんでもねえよ!前向いてあるけ馬鹿!」

グイッと引つ張られると信号だった、危ない…

「ありがとう」

「ふん、腐つても兄貴だからな。死なれると寢覚がワリイからよ」

途中危なかったけど寮についた。少し狭いベッドだったので一緒に寝るかと聞いたところ。

「ふざけんな、お前は妹に欲情する変態かよ」

「オーケーわかった、君は風呂場で寝るんだね？」

「…………ちつ、わかったよ寝りゃあいいんだろ？じゃあな俺の純潔」

「……………」

なんだか悔しいので風呂場に引きこもって寝た。あいつの意地悪い顔が頭にハッキリと浮かんだ。鏡に写った自分を見て怒り狂って自分を殴って静かに泣いた。とても惨めになった。

8月13日（後書き）

読んでいただきありがとうございました

アンケート何ですがかなめの妹の名前を募集したいと思います

今日から一週間募集してみます、良い案のあるお方で提供しても良いよという方は感想にお願いします

m (・・) m

誰も書いてくれないなんて事はありませんように…

外伝 8月11日（前書き）

読まなくても大丈夫です

外伝 8月11日

少し薄暗い部屋、そこには様々な機械が置いてあった。種類は豊富で一般人が見てもこれはだいたいこういう使い方だろうと連想させるものから、使い道不明のものまで多種多様のものが詰まっていた。そんな何となくこれは何かを中に入れて使うと連想させるカプセルの様な機械が動いた。蓋が自動で動き中に入っている物が動いている。

それを監視カメラのモニターで見ている者達が動いた。複数人いるが人数ではない。ほとんどが白衣を着ていたので研究員だろう。

「今度こそ成功なんだろうな、資金だって有限なんだわかってい
だろうな？」

「ええ、今までは能力が発現しなかった、だから『自分だけの現実』
をより認識させるために感情を付けたんですから。」

「そうか、見物だな」

クライアントだろうか？ スーツを着込んだ初老の人物と研究員の中で主任とでもいう人物が話しているうちに先程監視カメラに映っていた部屋についたらしい。そこで中央に置かれていたカプセルの中で半身を起こしていた人物が居た。

彼女は神城かなめであって神城かなめではない人物、彼のクローン体だ。今は名前が無いため妹とも呼んで置こう。

「そつちをここに。ああ、それでいい。じゃあ脳波を計るぞ」

妹は起き上がったてはいるがまだハッキリと覚醒はしていないようだ、頭に機材を付けられても腕に管を通して何の反応もなかった。

「脳波はどうだ？オリジナルを参照してみろ」

「脳波、オリジナルとのシンクロ97%。数字で見れば成功ですね！」

「まだ喜ぶのは早い、どれだけシンクロしていようが能力を発動できるかどうかだ、出来なかつたら意味が無い」

数字を見ていた研究員を落着かせた後、主任と思わしき人物は妹に接触を計った。その際に妹が全裸だったこともあって白衣を着させた。その後、会話に持ち込んだ。

「おい、こちらの言うことがわかるか？」

「あ？何だテメーは。いくら俺を作った親だからって嘗めてんじゃねーぞ？」

「わかつているようだ、……………全く誰だ？こんな性格にしたのは」
そのつぶやきに答える奴はいなかった。皆一様に作業をしているか目を逸らしていた。

「おい、俺はどうなるんだ？」

「ああ、能力を発動させるんだ。出来なければ排気処分だろうな」

妹は顔を青くさせると目をつむって祈るように胸の前で手を組んだ。瞬間、妹の世界の時間軸がズレる。見るものすべてが遅く感じ、目の前に居るはずなのにまるでそこに居るのは無機物のように感じた。怖くなり無意識に壁際によってから能力を解いた。

一瞬、主任研究員は妹の姿を探した。それはすぐに見つかったがそれ以上に彼が気になったのは一体どうやって移動したのか？という疑問だった。その答えはすぐに導き出され、数字を見ていた研究員に声をかけた。

「おい、あれに取り付けた時計はどうなっている？」

「主任！時間がズレています！成功ですよ！」

妹をおいてけぼりにし、研究員達は能力持ちのクローンが成功したことを喜んだ。

昼過ぎ、妹は街に繰り出していた。研究員に邪魔といわれ仕方なく適当に歩いているうちに施設から出てしまっただけなのだが。

なんともなしに歩いていると目の前に既視感を抱く顔があった。施設から出るときのガラス張りの自動ドアで見た顔だ。

「あれがオリジナル…か」

妹は喜びとも悲しみとも取れる顔をしていた。心情を如実に表して

いた。

「俺に会ったら…気味悪がるだろうな。同じ顔の奴なんて…」

そう呟くとオリジナル…かなめに背を向けて走り出した。

目につく人間皆が誰かしらと関わっている。そう思うと急に怖くなった。誰でも良い、誰か俺を助けてくれ。そんな思いだっただろう。一度は振り返りかなめの方を見たが既にいなかった。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ、頭の中は嫌だという感情で埋まっていた。

無我夢中に走っていると誰かにぶつかった。主任研究員だった。

「なんで外に出ている」

「え…あ」

主任研究員は妹の腕を掴むと有無を言わず歩いて施設に向かった。妹は何故か安心した。そしてこれが人の温もりかと気づいた。

「家族…」

妹の頭の中にはかなめの顔が思い浮かんでいた。会いたい…

「ヘエ？次のスライムはコイツかア？」

夜になり、白髪赤目のアルビノの人物が施設に訪れた。一方通行である。

「おいおい、こいつしか成功例がないんだ、まだやめてくれよ？」

妹がビクツと震える。その様子は誰も見ていなかった。

「で？俺を呼んだのは何のはなしがあんだア？ふざけた用件じゃあねエだろうなア？」

「ああ、これを今日だけで良いから引き取ってくれ。明日になったら任せる」

「ハア？ナメてンですかア？…チツ仕方ねえな。おら、行くぞ」

一方通行が言うとは妹は動いていないのに強制的に動いた。ベクトル操作だろう。そのまま連れられていくと廃ビルだった。

「好きなところで寝ろ俺はもう寝るからよオ」

一方通行は毛布を一枚放り投げると寝床に潜り込んだ。妹は毛布に包まり寝ることにした。

毛布は暑かった。

外伝8月11日（後書き）

なんで妹に感情があるのかという話し、こじつけですが。

一通さん、優しいなあ…ラストオーダーいらないんじゃないかとい
うくらい優しいなあ…orz

妹の名前、まだまだ募集していますのでなにか案のある方は感想ま
で。

外伝 8月12日（前書き）

妹強化週間と言つ名の繋ぎ

外伝 8月12日

とある廃ビルの中、妹は目を覚ました。手には暑苦しい毛布、抱き枕として機能していたようだ。チラリと見えた時計は短針が5を指していた。暑苦しく毛布を払いのけようとするが思い止まる。妹の中では初めてのプレゼントだったからだ。なんとなく、毛布を抱きしめる。やっぱり暑苦しかった。

辺りを見渡すと昨日はすぐそこで寝ていた一方通行の姿が見えなかった。

「まだ、名前も聞いてねーのに…」

仕方ないと割り切り、毛布をたたんで端によせておく。立ち上がる
と廃ビルを後にした。行き先は決まっていな、捨てられたのか？そんな
想いにかられるが冷静に考えたところ、唯一の成功例なのだ、
一方通行が適当なだけだと思うことにした。

「皆テキトーだな…」

妹の他人の評価が下がったところで、知らない男に前方を阻まれて
いる事に気付いた。それもそうだろうこんな朝早く…向こうからし
たら徹夜明けだが、路地裏に女が居れば訳ありだと思っし、だから
こそ色々やっても大事にはならないとふんだのだろう。

「おい嬢ちゃん、金くんね？」

「は？持ってねーよタコが。他当たんな。」

妹のこの言葉にプチツと来たのか青筋を立てていた。

「あんまナメた口聞いてんじゃねーぞ？女ってのは金なくたって価値があるんだからよ！」

暴力で屈服させようとしたのだろうが、妹は難なく避ける。

「そんな遅せーパンチ当たると思ってんじゃねえ。ハエが止まっちまうぜ？」

「こつちが下手にでてりゃあいい気になりやがって！」

相手は下手になど出てはいないのだが…ともかく男は押し倒そうと突進を試みるが、またも難なく避ける。狭い路地裏でだ。

「なんで当たんねーんだよ！まさかてめえ、テレポーターか？」

「全然ちげえよ」

そう、妹はオリジナルと同じ時間操作をしていた。相手の時間は弄れないが、自分ならば妹でも操作は出来た。

「喰らつとけ！」

近くに落ちていた鉄パイプで腹…正確に言えば鳩尾を突く。うまく当てられたのはもちろん時間操作のおかげだった。

声もなく倒れた男を尻目にその場…路地裏を抜けた。

そこは結構広い公園だった。朝方なので誰もいないが。

妹は初めて見る遊具に興味が尽きなかった。知識として知っていたが、体験などしたことはない、興味が沸くのは当たり前前の事だった。まず見ていたのは、ジャングルジム。感想としてはこんな物があったても何の楽しみがあるのかと思っていた。しかしそれはジャングルジムのテッペンに上がった時に解消された。

「侮れねえな…意外とやるじゃねーかジャングルジム」

公園の回りは基本的にビルが建ち並んでいて、多少一軒家が建っていて景色も何もなかった。だがジャングルジムのテッペンに上がった時、一軒家がある方向だけ景観が素晴らしく良くなった。富士山が一望出来たのだ。これには妹もナメていたと認めざるを得なかった。

次に目をつけたのがシーソー。これも知識としてあったので二人いないと機能しないのもしっていたため、眺めるだけに終わった。

すべり台、一度滑ってみたが、何が楽しいのかわからなかったようで二回目は滑らなかった。

最後にブランコに乗った、なんでか気持ち悪くなってきたのですぐに降りてしまったが。

最終的にはジャングルジムのテッペンにいた。なぜだか、富士山…妹からすると遠くにある綺麗で大きな山を眺めているのは飽きなかった。

どれ程そうしていただろうか、不意にお腹の虫が妹に文句を言い出

した。時間はわからないが朝から食べていないのだ。お腹も減る。だがどう考えても一文無しだった。要するに空腹を満たすことが出来ない。途方に暮れていた時、どこからともなく主任研究員がやってきた。

「何をやってる」

「別に：ただ腹が減った」

主任研究員は手に持っていた紙袋を妹に投げた、それを妹が掴む。

「急に腹がいっぱいになった、いらなからやろっ」

「わりいな」

それはハンバーガーだった。お気に入りの景色を見ながら食べていると主任研究員が去っていた。

「飯：もってきてくれたのか」

また景色を眺めていようとしたが、流石にずっといるので子供もヒソヒソと話しているのが見えていた。

だからというわけではなさそうだが、妹はジャングルジムから降りた。

「あれ？かなめさん？」

そんな声がしていたが、妹は歩いていく。

「…人違い？」

声をかけた人物、御坂美琴は首を捻り近くのコンビニに入り雑誌売場に直行していた。

妹が目的もなく歩いている、気付けば自身が生まれた施設に着いていた。記憶を頼りに主任研究員がいた部屋に入ると主任研究員と目があつた。

「戻ってきたか、ちょうどいい。ここに行つて端末からこのデータのバックアップをとってこい。そのデータはここに送るようにな」

「ああ？」

「廃棄されなくなればやるんだな」

「……………」

バツが悪そうに顔を背けると雑務の内容が書かれた紙を奪うようにとり、バックアップをとりに部屋を出ようとした。その背中に主任研究員は声をかけた。

「今日からは好きに過ごせ、その結果野垂れ死にしようが構わない」

妹は聞こえていない振りをしていたが目からは涙が流れていた。

「なに泣いてんだ俺…だっせーな」

外伝8月12日（後書き）

まだまだ妹の名前案募集中ですよー

10月23日の23:59でしめようかなーと思っています

8月15日

「名前…ねえ」

昼を食べているときにまたその話が上がった、妹？はそんなに名前がほしいのか。それとも僕と間違われたとき何も言えないのが嫌なのか。僕的には後者だな。

「早く決めとけよ、じゃねえと俺はいつまで経ってもお前のドッペルゲンガーだ、まだ死にたくねえだろ？」

お前がドッペルゲンガーなら僕は既に死んでいるんだけどね。まあ名前なんてそう簡単に決まるわけもなく、保留だ。

「あれ？どっか行くの？」

「ああ、忘れもんだ。大事な…な」

ふむ？まあ僕の管轄外というところだね。

「じゃあこれ、無駄遣い禁止ね？」

そういつて僕が買って使っていなかった黒の財布に福沢諭吉様を一枚入れて渡す。使い方くらいはわかるだろう。それと一緒に合鍵を渡しておく。

「良いのか？もらっちゃって」

「だって…一文無しでしょ？」

「わりいな」

そっいつて玄関から出ていった。夕飯は食べるのか？まいいか作っておいて損はないでしょ、電子レンジと冷蔵庫、コンロに感謝。

さて、夕飯の準備だけして僕も出掛けようかな。

「かなめー僕と結婚するで〜」

「うるせえ！死ね馬鹿野郎！」

「ぐぶっ…」

とても近くで聞こえたわけだけど…あまり行きたくないなあ…まあ誤解を解くために行かなきゃいけないんだけどね。外に出るとつちーと青ピが、青ピは倒れていたけど話していた。

「どうしたの？変な声が聞こえたけど」

「あれ？かなめだにや〜、いまエレベーターで下いったんじゃなかったのか？」

「さっきのがでびーるかなめなら今度のはエンジェルかなめやんな！」

ガバツと立ち上がり抱き着こうとするが僕との間につつちーがいて阻まれている。

「多分会ったのは僕の妹だと思うよ、双子なんだ」

「姉妹井やって！？なんでそれを早くいわへんの？」

「ああ、だから口調が違かったんだにゃー」

「そうそう、仲良くしてあげて」

「わかったぜい」

そして部屋の中に戻る。後ろから青ピとつつちーの「かなめ、何かつめたない？」「きのせいだにゃー」という声が聞こえた。

取りあえず部屋に戻って…カレーでも作っておく、お腹いっぱいこの匂いはきつい、お腹すいててもきついけど。

取りあえず作り終えて着替えるために、クローゼットを開ける、相変わらず男物がない。…これ、妹に見られたらアウト何じゃないか？もう今更な気もするけど。

取りあえずまたも中性的な服を選ぶ。フリルとかフリルとかフリルとかは妹に着せよう、向こうはちゃんと女だしね。

そんなことを考えながら外を歩く。ちょうどアイス屋がいた。暑い。

「おじさん、一つ」

「毎度、もう少しからおまけしてダブルだ！」

そんなことをしなくていい、甘いのが得意じゃないんだから…そうは思っが苦笑で済ます。

そんなやり取りをしているうちにギヤーギヤー喚いている二人組がいた、というか二人は二人だが…御坂美琴とその妹だ。僕の妹と同じクローン体。

「その双子、姉妹ケンカはよくねーぞ」

「コイツは妹じゃない!」

「おいおい、冗談でもそんなこと言つもんじゃねーな。ほれ、これやるから仲良くしろよ」

「アイス?押し売り?」

「ケースを洗うんでね、よかつたら食つてくれな」

その言葉の前に御坂妹は食べ始めているわけだけど。

「濃厚でいてくどくなく、後味がさっぱりした甘さ…牛乳が良いのは当然ですが、研ぎの良い和糖を使わなければこの風合いは出せません。コーンはクッキーを砕いたクラスト生地を意識したものです。グッジョブです!とミサカは惜しみない称賛を送ります」

流石の品評といわざるをえない。なんてやっているうちにアイス屋は走り去っていてちょうど影になっていた僕は御坂さんたちと鉢合わせた。

「かなめさんじゃん、どうしたの?」

「いや、暑かったからアイスでもと思って食べてたんだけど。良い

妹さんじゃない」

「だから…！」

「かなめ？もしかして神城かなめでしょうか？とミサ力は確認をとります」

「うん、神城かなめだよ。何か用かな？」

「ZXC741ASD852QWE963」とパスの確認をとります」

「Qwerty：これでいい？」

「確認しました、とミサ力はパスを認証したことを伝えます」

「な！？かなめさん！なんで！」

肩を掴みグラグラと揺すられる。ちょ…やめて。

「タイムリーチルドレン時間操作量産計画。これが僕と御坂さんのつながり…かな」

「かなめ様、関係者以外の方への情報は…」

「大丈夫、君が御坂さんの前に出た時点ではれることだから。そうそう御坂さん」

「な、なによ」

「PDA…だっけ？使えばすぐだから、今日は妹と過ごしてあげて

「？」

「……ッ！わかったわよ、今日はお姉様に任せておきなさい！」

「お姉様にお任せします、と言ったは良いものそこ知れぬ不安をミサカは隠します」

「全然隠してない！？」

そんな姉妹を置いて適当に歩こうとしたが、妹に携帯でも買ってもらうと思ってシヨップに向かった。

「いらっしゃいませ」

ふむう、適当に安いので良いかな、連絡手段にしかならなそうだし。

「これで」

「わかりました、プランの方は？」

「これで」

指を指し安いのを、豪華にはいけないしね。貧乏学生だし。

買った携帯に所有者情報と僕の連絡先を書き込む、それをかばんにしまった。

時間は…8時か…結構遅くなっちゃったな。もしかしたら帰ってるかもしれないし一度帰ろうか。

8月15日（後書き）

名前案の受付終了です、案をだしていただいた皆さんありがとうございました。

8月15日後編（前書き）

遅くなりましたがここで妹の名前が出ます、名前案を頂きありがとうございます。

またアンケートですみませんが後書きを一読してもらえると助かります

8月15日後編

家につくと妹がもうカレーを食べていた、まあ8時なので遅いくらいかな？

「おう、遅かったな」

「うん、手続きに時間食ってね」

「手続き？」

とりあえずカレーを取りに行く、うんカレーって気分じゃないけどしかたない。

「で？手続きってなんだよ？」

カレーを食べながら、目だけを向ける。

「ん？これこれ、携帯無いとやってられないでしょ？」

「…………俺のか？」

「そうだよ、僕の連絡先は入れてあるから」

そついうと、カレーを食べおえた僕は妹の分まで皿を持って台所に向かう。

「個人情報自分で確認してね？じゃあ片付けは僕がやっておくからあなたは適当にやっててよ」

皿を洗いながら言うと返事がなかった。携帯弄るのに忙しいのかな？見てみると妹…あなたは静かに泣いていた。

「なッ…なんだよ…み、見てんじゃねえよ…」

「目の前で泣いてる妹がいるのに訳を聞かない兄がいると思う？どうしたの？」

「……………っ たん…だよ」

「ん？」

「うれしかったんだよ！同じ顔で同じ遺伝子でお前のクローンの俺が！名前を貰えて！家族って認めてもらえて嬉しかったんだよ！」

すると顔を赤くしたかなた良い早さで家を出て行った。え？ちょっとついていけなかった。とりあえず追い掛けなきゃ。

時間は9時まで10分前、こんな時間の女の子の独り歩きは危険だ。色々と。

追い掛けて外に出るとつつちーが家に入ろうとしていた。声をかけられる。

「今から出掛けんのかにゃー？」

「ちよつとね、急ぎなんだ」

「こんな時間の女の子の独り歩きは危険だぜい？」

とりあえず何故か持っていた靴べらを投げ付けておいたのは良い判断だったはずだ。

そんなつつちーを置いて寮を出る、どこに行ったかわかんない。

こういうときこそ携帯なんだろうけどまあでない。向こうから掛かってくるのを待とうかな。とりあえず商店街の方かな？

適当に走り回るが見付からない。すると前方に御坂さんが走っているのが見えた。何をしているんだろう？とりあえずついて行ってみるが…あしはやっ！追いつけないし。

まあ河川敷の方に向かっていているのは何となくわかった、見失ったけどそっちに行つて見よう。あれ？僕ってかなたを追いつけていたようないし…

まあ完全に見失った挙げ句音信不通のかなたより、何となく行き先がわかつて危機迫る感じのダッシュをしている御坂さんの方がまだ時間を有効に使えるというものだろう。

「はっ…はぁ…はぁ…」

何とか河川敷が見えてきた、完全にこっちで正解の様だどんぱちやつてる…と言うより戦争してる。

「あまり気が進まないなあ…」

それでもとりあえず下に降りると御坂さんと一方通行が派手にやっていた。実験を目の当たりにしたのか…仕方ないよね。僕だってか

あなたが実験にされたら許せない。

御坂さんはちょうどレールガンを撃とうとしていた。え？反射の餌食じゃない？

時間操作ですぐに近寄ろうとしたけどやめた。理由は隣にあなたがいたからだ。

僕の思惑通りかなたは時間操作で御坂さんを射線から外して助けていた。

「お前何なんだよ？何で俺と同じようなやつを殺していくんだ？」

「絶対的なチカラを手にするため、最強だとか学園都市第一位だとかそんなつまねエモンじゃねえ。俺に挑もうと思うことすら許さねえ程の絶対的なチカラ、無敵（レベル6）が欲しいんだよ」

「叶うことが無いものを求めて、向上心が強いのかな？」

「アア？」

「かなめ…」

「かなめさん…」

三人共僕の方を向く、御坂さんに至っては僕が二人いるような顔をしている。実際二人いるのだけど。

「実際、敵うと思えなくても戦ってきたのが人間だからね。それはいつまで経っても変わらないだろうし、いつか能力を無効なんてす

る能力者が出てくるかもしれない。人間という括りにいる以上、無敵にはなれないよ。それこそ人間をやめるくらいの事をしなくちゃね」

「おいおい、説教ですかア？」

ため息をつかれた、そして後ろを向いて一言「やる気が削がれた、俺ア帰る」といつて去って行った。なんで？

「何しに来たんだよ？」

「泣いた妹を追いつけちゃいけないかな？」

「けつ、うるせー！」

「…いい、妹？まさかタイムリーチルドレン？」

「そう、唯一の成功例。最近研究所を逃げ出して僕のところに来た？」

「べつに逃げちゃいねーよ」

「そう？まあそういうわけ名前はかなたって言うんだ、よろしくしてあげてね？」

「はあ…よろしく」

何だか、イライラしているみたいだ、御坂さんもかなたも。

かなたは先に家に帰ったが御坂さんは動く様子を見せない。

「^{シスターズ}妹達を救いたい？」

コクリと頷いた御坂さんは決意した目をしていた。携帯にメールでも入れておく。帰りは遅くなると。すぐにメールが帰ってきた。今晚はお楽しみですか？やかましい。

これから作戦を練るため、一度落ち着けるところに移動することにした。

8月15日後編（後書き）

かなめの容姿を説明した文が無いという指摘を受けました。

個人的には各々の妄想で脳内保管の方が良いかな？と思っていたのですが…

どうでしょうか？容姿が必要ならば序盤の方を修正いたします

この小説は素人も良いところなので皆さんの指摘で育ちますので気軽に意見を貰えれば幸いです。

もちろんほかに思うところがあればそこも指摘していただけると助かります

8月19日

準備は出来ている、覚悟もオッケー。そんな感じで御坂さんと研究所を潰していた、家にはあまり帰ってないが毎日電話をしているので、かなたには安心してもらっている。安心してゐる？

とにかく残りは後二基というところまで来た、お互い寝不足でちょっとあれかもしれないけど、気力だけは十分。そんな感じで施設の前に立っている。

施設名は何だったか覚えてないけど、まあ潰すんだから覚えていなくても良いだろう。

まあ今日の襲撃はばれているだろう、どっちの施設も障害が居ると見て間違いない。と言うより本編じゃあこんなイベントなかった気がする。まあ昨日の一方通行さんと御坂さんの絡みも知らないし。

……あれかな？超電磁砲とか言う外伝？まあ今更感もあるし今を生きる僕には関係ない。

なんて考えていたら天井が降ってきた、インディじゃあ無いけど崩れ落ちてきた。欠陥住宅かここは。

時間操作で体感を遅くし落ちてきていないところに御坂さんと逃げ込む。

「やっぱり障害は居るわね」

「まあね、向こうだって必死何じゃない？ねえ暗部の方？」

反応はなかった、角から覗き込んでいるのはわかってはいるけど誰なのかわからない。まあグループじゃあ無いでしょ。アイテムとかかな？…………あれ？原子崩し？

とりあえず向こうも自分の距離を崩されたくないからか距離をとるようだ、階段を上っているのが見える。すぐに追い掛けるがこちらにファンシーな人形がちらほら、なにこれ？

そんなことを思っていたらシュゴオオオオという音と共に床や壁に引いてある修正テープのようなものが発火しながら人形に触れた、その瞬間僕と御坂さんに爆風が襲い掛かって来る。なるほど。

「なんでこういう奴らは人形に爆弾を……………」

御坂さんが喋っていると思ったら止まっていた、何だろうと思い見ている方を見たら粉々になったゲコ太が…

「…許さない、絶対によ！」

えええー…階段まで距離があるにもかかわらず磁力を使いながらもダッシュしていた。早過ぎ、ボルト涙目クラスの早さだよそれ。

置いていかれてもあれなので僕も時間操作で先回り、したのは間違いだっただかもしれない。

「うわ、すごい形相、捕まったら八つ裂きにされちゃうかも…ないんちゃって（はあと）」

うん、多分こんな感じの事を言ってたんだと思う。僕と御坂さんは階段を崩された。

「うわっ！ たつと！ つほ！」

僕は時間操作で体感を最大まで遅くし、崩れ行く瓦礫を足場に崩れていない階段まで飛ぶ、完全にスタイリッシュ！

御坂さんは磁力で階段を作っていた。

更に逃げる相手、今更顔の確認したけど女の子だった、まあ女の子だからどうこうって訳じゃないけど気が引けるのも間違いない。

でも僕は女の子を殴って一人が救えるなら殴れると思う、多分、うん、きっと。

なんて考えながら、追い掛けていたけど、少し遅れた僕は御坂さんと向こうが会話していたのに気づかなかった。そして頭上のシャッターが閉まるのにも気付くのが数瞬遅れた、もう少し遅かったら、現世とさよならしていたと思う。

「結局っ追い詰めた方が追い詰められたってのはよくある話な訳よ！！！」

頭上から複数の、かなりの数の人形が落ちてきた、回りには導火線。ピンチ！

「こんなことに余計な力を使うなんて」

御坂さんがそう呟くと、床が持ち上がり導火線が断裂した。……ただの天災じゃない。

「覚悟は良いかしら」

御坂さんが突撃しようとしたが相手が何かを落とした、爆弾？いや、それだと自爆する。そこに思考が行き着くのにコンマ2秒。

慌てて走り御坂さんの目を無理矢理手で塞ぐ、そして僕は目を閉じる。耳はしやうがないとして、目だけでも生かそう。

スタングレネードが終わると同時に向こうはまたもファンシーグッズのミサイルを飛ばしてきた。阿保かと。じゃあね僕の現世。

なんて思ってたならグイツと引っ張られた、御坂さんの磁力だろう。壁超痛い。

「にゃーはっはっは！ま、結局私にかかればこんなもんな訳よ！」

すごい喜んでいようだ、後ろに回り込んでいるのに気づいてない。本当に暗部？

「チェックメイトってところかしら」

バチバチと放電している。ゲコ太恐るべき執念。何だか向こうに同情してきた。

「M i j i c a v i n o」

なに？何語？みじ？カヴィノ？

御坂さんの方を向くと向こうも知らないようだった。

「こんな言語ねえっつの」

ないんかい！と突っ込みたいけど、なにか瓶を投げてきたので掴む。

「あ…あはは」

「これなに？」

「教える訳無いつつの！」

もういつこ同じようなものを投げてきた、御坂さんが電撃を出すと空中でぶつかり爆発した。爆薬好きだな君。

すると辺りでシューシュー音がしていた。ガスが漏れている…と言うより向こうがバルブを開けたようだ。確か窒素ガスだった気がする。書いてあるしね、壁に。

「学園都市特製の気体爆薬『イグニス』この気体は人体には影響は無いけど放出後一瞬で拡散して空間を満たす。要するにこの部屋自体が巨大な爆弾で訳よ」

まあこれ…僕が持っている奴が爆発したら全員おだぶつつて訳よ。
……うつつた。

なんてしていたら御坂さんに蹴り入れようとしていた。

何だかムカついたので声をかけた。

「君の命は僕が握っていると見て間違い無いよね？」

「はあ？結局それが爆発したら全員死ぬ訳よ、こっちは暗部で長いことやってんのよ。死ぬのが怖くてやってられるかっての」

「ふーん、そう？」

さっきの爆発を見るかぎり全員範囲外になっている場所に投げつけて爆発させた。

「さて、君は窒素ガスで何がしたかったのかな？」

ちよいちよいと指を指すと口をあぐりと開けていた。気持ちはずからなくても無いけど馬鹿だね。

「そつかそつかあ…結局は子供だましかったって訳ねー。ははっ結局だつてうつっちゃったかしら」

……………とりあえず御坂さんが怖い、なにこの威圧感。

ご愁傷様…

8月19日後編

中ボスを倒したら親玉が出て来ました、そんな感じかな？

「麦野：だっけ？原子崩しさん」

「ああ？」

怖いって、まあここは御坂さんに先行してもらって：大丈夫かな？
確か淹壺だかなんだか名前忘れたけど、追跡能力じゃなかったっけ？

「御坂さん：僕が足止めするから先行して施設の破壊を、あともしかしたら相手が追跡能力有るかもしれないから気をつけて、向こうにとっては壁なんて見えないだけだから、盾にはならなそうだからさ」

「ーっ：わかったわ、かなめさんも気をつけてね」

なにか言いたそうだったけど、まあ先行してもらおう。じゃないと御坂さんが来た意味が無くなるからね、何よりも優先するのは施設の破壊だし。

僕は：まあ時間操作いっぱい使えばどうとでもなるでしょ
きつと。

とにかく、御坂さんが麦野だかなんだかを突破しない事には始まらない。という訳で時間操作で御坂さんの体感を遅くした僕たちから見れば気がついたら御坂さんが居ないという状況に陥っている、現に向こうは把握できていなかったみたいだし。

「テレポーター？」

「さあ？」

うん、イライラも溜まっているようだ。前に戦っていた女の子がへましたからかな？とりあえず女の子3人だと誰が誰だかわからないので暫定的にリーダーシップのが（恐らく）麦野、金髪が金、黒髪が黒としておこう。

何だろうこのもしも麦野じゃなかったら的な恐怖…茶にしておこう、うん。

なんて脳内で名前というか呼び名が決まった頃…といっても「さあ？」といってから数秒しか経ってないけど、茶からなんか凄いの飛んできた、ナイスビーム。

横っ飛びで避けるとその先の人形が爆発した、流石に直撃するとまずいので時間操作で何とか範囲外に…といっても爆発が広がる速さの方が速いため多少被害を被ったけど…まあ問題無い。

とりあえず僕が転がっているうちにトドメを刺しに来るかと思ったけど茶は明後日の方向に撃ちはじめた。

「対象は依然として移動中」

黒がそんなことを言っていた、ああ御坂さんね？って撃たせちゃまずいんだった…気をつけないと。

とりあえず足元に広がる導火線が見えたので一応退避しておく。

「で？君らの依頼は僕と相方の始末ってことで良いのかな？」

「そんなこと話す馬鹿いないっつーの。話で長引かせようなんて…結局は戦うことに怯える甘ちゃんって訳？」

「フレンダ、あんた黙ってな」

茶にいわれて落ち込む金、というかフレンダって言うんだ。

「まあ時間稼ぎがしたいのは間違ってるんだけどね、そのために先行してもらってるんだし」

という訳で僕の話術が生きる！なんて思ってた茶はまたも明後日の方向に撃ちはじめた。とまंनीって無理無理。

御坂さん死んでないよね？うん、舌打ちしてるし当たんなかったんだろう。

「フレンダに滝壺、あの女追い掛けなさい私はこいつを消してから」

「結局はそうなる訳ね、わかったわ」

走っていった、黒も頷くで行った。何となく面白そうだから金の体感を速く…要するに僕らからみると遅くなっていた。茶の額に青筋が見える。ご愁傷様。

なんて思ってた。いきなり僕の方にビーム撃ってきた死ぬ。なんて事はなく避ける、大振りだし直線的だからわかりやすい、まあ弾速はそれなりに速いからすぐに射線から逃げないと危ないけど。その回避運動に集中をしていたため時間操作が切れる、金が普通の速

さで走っていった。先で黒は待っていたみたいだ。

「ふうん？」

僕の仕業って気づいたみたいだ、だからなんだって事にもなるけど。とにかく厄介な奴って印象は付いたかもね。正体不明の能力に御坂さんと違って無名だから誰が誰だかわからない。まさしくアンノウンインベーター。正体不明の侵略者とか何処の厨二？

「うわつと！」

とりあえず目の前に集中しよう、じゃないと消される。

「ちよろちよろちよろうつとうしいんだよ！」

何故か怒ってるし、怒らせるようなことしてないはずなのに。

「理不尽だああ！」

「世の中そういうふうに出てんのよ、あきらめなさい」

音譜つけてないで砲撃をやめろといいたい。

すると施設が揺れた、それもかなりの振動だった。恐らく御坂さんが壊したんだろう。

「あらら？これで僕らのミッションはコンプリート何だけど…見逃してくれないかな？」

目の前がビームで埋まる。咄嗟に時間操作で避けなかったらさよならしてた…

そんなやり取りをしていると御坂さんがスタッと降りてきた。忍者かど。

「ミッションコンプリート？」

「勿論、早く逃げるわよ」

コクリと頷くと時間操作を僕と御坂さんに使い入口まで走る。これで逃げ切れるでしょ。

「……………」

背中にずっと視線感じたけど今日のところはお互い寮に帰るとする。

時間操作はそのままにしたから時間的にはかなり早く寮についた。

「それじゃまた明日ね？」

「そうね……………」

「くれぐれも今日行こうなんて思っちゃダメだよ？身体が持たないからね。」

「……………」

何で目を反らした。

「じゃあ今日はうちに泊まってこっか？」

「え、遠慮するわ！迷惑だし、ね？」

「じゃあ行かないね？」

「はい……」

よろしい、といわんばかりに頷く僕、たまには偉いところもね？

そして家に入ると愛する妹からの熱烈な愛という名のドロップキックが。

「テメエ今更帰って来てんじゃねえええええ！」

「なん…で…」

「よし、ほとんど帰ってこなかった弁明を聞いてやろう」

それは暴力の前にだね…まあ口にだしたら更にやられそうだからしないけど。

「なんかムカつくこと考えたな？」

「いふあい…」

なんで僕は抓られているのだろうか？と言っより理不尽だ…

「で？家を開けた理由は？」

かなたがイライラしていますといった態度で聞いてくる。

「人助け」

「そうか、なら先ずは俺の空腹をどうにかしろ。」

「はい」

僕：兄貴だったよねえ？まあそんなことでへこたれていられないので夕飯の支度をしようと冷蔵庫を開ける。からっぽ。

「……………中身は？」

「食えるもんは食った」

「出前にしよつか？」

「俺玉子丼な」

電話をして頼む、なんだか悔しいので僕のは上位互換の親子丼を頼んどいた。

結論から言うと玉子丼のほうが美味しそうだった。親子丼は鶏肉が固くておいしくなかった。誰だよ、玉子丼の上位互換とが行った奴は。

「じゃあ俺はもう寝るからな」

電気を強制的に消される、まあ僕も寝るところだったから別に構わないけど…

8月20日

朝方、まだ朝日も昇っていない頃。変な物音で目が覚めた、その音は玄関から聞こえている。

「あゝもう、鬱陶しいわね。ここ消し飛ばせば一発じゃないの」

「それは住人に気づかれるので超オススメ出来ません」

「結局はアタシのツールの出番って訳よ」

「頑張ってフレンダ」

何だろぅ嫌な予感しかない。と言うよりもうダメだこれ。

意を決してドアを全力で開けた。なんだかゴツという鈍い音が聞こえた。

「フレンダを倒すなんて…」

「勝ち目は無いかもしれないね」

「これは超マズイ状況ですね」

笑いを堪えながら3人が言う。何とか玄関の命は守れたようだ。後は僕の命なんだけどね。

「何のようですか？もう依頼は終わったんじゃないですか？」

「個人的に遊びに来たのよ」

暗部のメンバーで？冗談はやめてほしい。

「間違えてません？」

何て言うって首を麦野に掴まれた。なんだか光っている。

「今から消し飛ぶのと私達を家に入れる…どっちが良い？」

「い、入れても良いですけど妹がいるので。へ、変な話は出来ないですよ？」

超吃る。まあ仕方ないよね？誰だって命掴まれたらこうなると思う。

「そう、じゃあ勝手に入らせてもらう訳よ」

じゃあってなんだ。僕、今、断ったじゃ無いか。

首を掴まれたまま中に連れ込まれる。僕の家だけ。かなたは寝たまま、神経図太すぎでしょ。

「単刀直入に聞かせてもらいます、あなたは超何者ですか？」

「超人ですが何か？ちよっタイム！」

首もとの手が光る、命はなげすてるもの…ではない！死んだらおしまい。

「とりあえず何やってるんですか？」

僕の見ると先には黒が僕の部屋を弄っていた。

「それよりこっちの質問に超素直に答えてください」

「名前は神城かなめ、能力は無し。そんな平凡な高校生です、はい」

「バンクに登録されている通りね…で？本当のところは？妹の前で頭を弾け飛ばしたくないでしょ？」

「じゃあ飛ばすようなことをしないでもらいたい。と講義しようものなら一睨みでだまらされる…ばくよわ。」

「どうせ知ってるんでしょう？時間操作くらい」

「あ…それ知ってる、一方通行のレベルシフトの短縮に使われる能力だ」

部屋を弄っていた黒が反応する、弄っていた辺りは何だかゴチャゴチャだ…

「よしよし、人間素直が1番」

そういつて首を離してくれる。良い笑顔で。

「じゃあこれからはアイテムの構成員になる訳よ。そんな訳でアタシはフレンダ」

「麦野様でいいわ」

「滝壺…」

「絹旗です超よろしくお願いします」

うん、ハーレム来たとか思うなかれ。死亡フラグのオンパレード過ぎる…

「不幸だあ…」

聞こえない位の音量で呟いた…その間に勝手に携帯を弄られアドレスが流出していた。

「じゃあ何かあったら連絡しますので超早く出てください」

「結局は逃げられないって訳よ」

フレンドが肩をポンポンと叩いた。同情するなら逃がしてほしい。

すると僕を置いてゾロゾロと玄関を出ようとしていたところ麦野が振り返った。

「着拒したら…殺す」

…じゃないって！恐すぎるでしょう！

ボタンと音を立ててドアが閉まる。ちょうどあなたも目が覚めたようだ。

「うるせえ！静かにしてろ！」

枕が飛んできた。怒りがMAXになった！泣いた。

今は夕方色々切ない感じに過ごしてきた、部屋の片付けとかね。

でも理由はある、計画の最後の砦と思われた施設が機能していなかったから。御坂さんは喜んでたっけ、僕にはまだ早計なんじゃないかって思うけど口にはしない。何か起こっても当麻が何とかしてくれるでしょ。

なんて無責任なことを考えながら歩いていると当麻と御坂さんが何やらやっているのが見えた。あ、自販機蹴った。

……これはあれかな？原作の奴だよね？うん、当麻ご愁傷様、二千円札を使う君が悪い。

でも使いにくいのは認める。ATMで一万円卸した時に5枚の二千円札が出てきたときは思わずあれ？って言っちゃったくらいだ。

なんで諭吉で出てこなかったんだろう？まあ置いておこう、とりあえず僕は僕の買い物をしなと…

「いらっしゃい」

「トランクスタイルの水着のチョイスをお願いします」

この店は水着等売っている店、方向性を言えば水着をチョイスしてくれるナイスな店らしい。一着千円お手頃な値段もナイス。

弊害として返品は受け付けてないらしい、クーリング・オフ涙目。まあ御坂さんとかに聞いたらハズレはないみたいだし期待していて

良いだろう。

「後はかなたのか…」

めんどくさいので携帯に水着を買ってきたとメールを送る。すぐに帰ってきた。

『死ね変態』

何だろうこのやるせなさ…

色々とかなたにやられているので一人外食をしようと歩いていた。

前方に御坂さんが見える。

「どうしたの？って妹さんのほうか」

「なんでしよう？とミサカは間髪を入れずに答えます」

「いや、見知った顔だったから。どう？ご飯でも食べに行かない？」

「時間は空いているのですが…よろしいのでしょうか？とミサカは確認をとります」

「いいよ、一人で食べてもつまらないしね」

「一緒に一緒にします。とミサカは夕飯の確保が出来て喜びます」

じゃあ笑おうよ。何て言うこともなく店に入る。

「栄養バランスが崩壊しています。とミサカは警告します」

「いつもじゃないから良いの。たまにはストレス発散しないと」

僕の目の前には肉肉肉。入った店は焼肉屋だった。まあ分かってて入ったんだけど。

「太りますよ？」とミサカは世の女性が聞いたら動きを止める魔法の言葉を使います」

ピシリと僕の動きが止まる。勿論太るという部分じゃなく女性という部分で。

そーかそーか。僕は自分から言わないとDNAにも間違われるくらいだもんね。期待はしちゃいけないんだね、すっかりしてたよグスン。

「やはりこの言葉は強い。とミサカは確信しながらも食べ頃の牛タンを掴みます」

強い子や…なんて思いつつも僕も牛タン取る。確かに食べ頃だった。

そんな自棄食い…もしくは自棄肉も終わり店を出る。

「そつえば君は何号なのかな？」

「ミサカは10032号です、とミサカは答えます」

妹さんは振り返ると夜道を歩いて行った。

8月22日(前書き)

残念なほどに短いです

∴ 前話とくつつけておけばよかったorz

8月22日

今日、恐らく当麻と一方通行さんの一騎打ちだろう。

それまで僕はミサカさん…検体番号10032号と遊んだり食べに行ったり…フラグの一つでも立てておこうと思ったが…僕にはむりか…っ。

まあそんなことでへこたれてはいられないんだけど…というか余り関係はないんだ。

とりあえず僕が今向かっているのは病院。冥土帰しがいる病院。通称蛙医院。通称はどこから来たかって？僕しか使ってないよ。

「…こんばんわかな？」

「どうしたんだね？」

「今日一人怪我人が出るから」

「医者としては出ないほうが有り難いんだけどね」

「上条当麻が来ると思うから、迎えに来てくれると助かるかな」

「……また彼か、一体何をやってるんだ」

カエルは呆れていた。まあこの短期間に3回入院？するんだあきれもする。とまあ、そんな話をして病院をでる。空は夕焼け空、もう

少しで夜になるという時間だった。

早足で帰宅。第一声は…

「メシ」

どこの亭主関白だよ。

仕方ないけど作る。簡単なものになったけど文句はいわせない。

「ちよつと焦げてる、おまえのよこせ」

ズイツと奪われ渡される。

「何様!？」

「黙って食え」

「はい…」

食べ終わり皿も洗い終わって時間を見る9時を回っていた。

「ちよつと出掛けて来るよ」

「あ?どこ行くんだ?コンビニなら飲むヨーグルト買ってきてくれ。」

「わかったよ」

買うものを聞くと外に出る。今日は風がない。ちよつと蒸し暑い夜

になりそうだ。

そんなことを考えながら歩く、向かう先は以前、御坂さんと一方通行さんがやり合ってた河川敷の先、実験現場だ。

少し遠く…距離にして200mくらい先でプラズマが見える。戦いもクライマックスという奴だろう。

僕は走り出す。勿論行く先は当麻たちのもと。

「歯を食いしばれよ最強^{わいぢやぐ}

俺の最弱^{わいぢやぐ}はちつとばっか響くぞ」

当麻の右が一方通行の顔を貫いた。

一方通行は倒れ、当麻もその場で崩れ落ちた。僕はカエルに連絡を入れて二人の容態をみようとした。が当麻のほうはミサカさんと御坂さんが見ているから問題無いだろう。

僕は一方通行のほうを見た。気絶しているだけだろう。

そっと背負いその場を離れるとちょうど、カエルとすれ違った。

「向こうにいるから」

「おや？この彼は良いのかい？」

「気絶してるだけだよ。大丈夫」

「そうか、もし何かあれば連れて来なさい」

コクリと頷いて背負ったまま僕の家に向かう。飲むヨーグルトは買えそうにないなんて思いながら進む。

寮が見えてきた、またかなたがうるさいんだろーなーなんて思いながらエレベータにのり、階を移動し降りる。玄関を開くとかなたが寝ていた。

ちょうどよかった、適当に一方通行を寝かせるとコンビニに飲むヨーグルトを買いに行った。

8月25日（前書き）

勢いで投下してるから元々悪い作品の質が更に激悪に…

バッチコイ！ナラ、ドウゾ。

8月25日

なんだかつまんない。自室での僕のそんな言葉から今日の方角性が決まったといっても過言じゃあない。

「急にどうしたんだにゃー？」

僕のつぶやきに勝手に僕の部屋に上がり勝手に雑誌を読んでいたつつちーが顔を上げ反応する。

「なんでこの夏休みがそこまで面白くないか考えてたんだ」

そういうとこれまた勝手に僕の部屋に上がり込んできた当麻がゲームから顔をこっちに向ける。アクシヨンゲームだったがお構い無しにこっちを向いたので死んでいるのは御愛敬。

「で？結論は出たのか？」

「圧倒的に青春が足りないと思うんだ」

ふたりして首を傾げている。僕は何もおかしなことを言っていないはず。

この部屋を見ればわかる。ワンルームに男三人が集まって好き勝手ダラダラやっている。女の子分が圧倒的に足りてない。まあかなたが居るけど今はここに居ないし。あれは女の子とは思えない、凶暴かつわがままな獣とでも思っている。

現にかなたの領域にはゴミはないけど僕とかなたの領域の境目：ギ

リギリ僕のほうにゴミを追いやっている。片付け、掃除くらい自分でしなさい。

「うん、彼女がいればきつともっと面白くなると思うんだ。どうかなつつちー？」

「間違いないぜい。ただしかみゃんテメーはダメだ」

「なんでだよ！俺だって彼女欲しいって！」

「ふーん…じゃあインデックス呼んで来るから楽しんでなよ！」

「ちょっと待て！上条さんは包容力のある管理人さんタイプが好きなんですよ？インデックスさんじゃあ荷が重いわけですよ」

やれやれ…といった感じで首を振る。

「じゃあ今の言葉をインデックスの目の前で…」

立ち上がると当麻が腰に抱き着いてきて涙目で首を横に振っていた。キモいから離してほしい。

「にゃー！かみゃんがとうとうかなめに手を出すつもりだぜい！」

「とりあえず暑苦しいから離れよっか？」

そっついつつグイグイと引きはがす。意外とあっさり離れた。

「という訳でナンパでもしに行くべきだと思うんだ。異論は」

「「ない」」

「青ピは？」

「「いらん」」

OK、じゃあハントの始まりだ。

夏のナンパとしては海が思い浮かべられる。でも学園都市に海はない。あつてプール。だから僕たちはプールに向かうことにした。

「学園都市のプールなんて久しぶりだぜい」

「俺はいったことねえ」

「僕もないよ」

そんな、まだ見ぬプールに…と言うよりプールの女の子に思いを馳せた。

入場のチケットを買い更衣室に入ろうとした時にプールの女の子のスタツフ…おばさんに声をかけられた。

「お嬢ちゃん！女子更衣室はこっちだよ！そっちは男子更衣室！」

キョロキョロと周りを見渡す。僕らしか居ない。どこを見ても女の子は居なかった。なんてキョロキョロしてたらおばさんに肩を掴まれ女子更衣室に連れ込まれた。え？なんで？

「ふう、あんたみたいな可愛い子が行ったら何されるかわかんないよ？自分の体、大事にしなよ？」

え？行っちゃうの？男はみんな狼なんだよ？いいの？…なんて事は僕には出来なかった。誰もいなかったからすぐに着替えて荷物をもつてプールに。水着は勿論御坂さんオススメのナイスな店のナイスなライトグリーンのトランク스에Tシャツ。話しによると濡れても透けないようになってるらしい、これはシャツを着たまま入るみたいだ。で、シャツの下に着た胸当てのようなものは何だろう？防弾性でもついているのかな？

なんてキョロキョロとロッカーを探す中には無いようだ。更衣室を出てすぐにあった。位置的には男子と女子更衣室の間くらい。

ロッカーに荷物を置いて当麻達を探す、ちょうど向こうも探していたらしく目が合った。

「さあ狩りのはじまりぜよ」

「上条さんの底力見せてやる」

うん、変なスイッチ入ってる。ちなみにつつちーは花柄の…と言うより紺地にハイビスカスのトランクスタイプにいつものサングラス。センスが逸脱している。

当麻はデニムのトランクスタイプだ。絶対重い。

「じゃあとりあえず吟味してトップバッターは誰が行く？」

「ここは俺に任せとくのが吉だぜい？」

「さすが土御門便りになるな」

当麻がつつちーの肩を叩く、僕らに振り向き笑顔を向けるつつちーはいつもと違った…気がした。

三人で見ているとちょうど三人組が歩いて来た。会議の結果有りと可決。つつちーの特効が始まった。

「……………」

「泣くなよ……」

察してくれといわんばかりにつつちーが墮ちている…まあめげていられない。

「土御門の敵は俺に任せとけ」

熱血している。

「当麻、頑張つて」

「おう」

……………目の前に残骸が二つ。こりや使い物にならないね。ちなみに当麻は彼氏持ちに手を出して必死に逃げきって倒れているだけ、いわゆるスタミナ切れだ。あとは僕が頑張るしかないのか。

そんなことを思いながら顔をあげるとちょうど三人組が。辺りを見渡しても彼氏持ちな雰囲気はない。逆にキョロキョロしているから探しているとも見える。

「ねえ、ちょっといいかな？」

「え？なに？ナンパ？…って違うか」

いやナンパ何だけれども…

「一緒に遊ばない？一応あそこに居るのが連れなんだけど」

フイツと親指で指し示す。女の子達はちょっと考えると。

「うーん…正直このプール居なかったしね…まだカッコイイ部類だからいいよね？」

「そうだねー」

「いいだろう」

何とか決まったようだ。……僕って凄いいんじゃないだろうか？

「そのぼんくらー？これで良いんでしょう？」

「なにこれー？もしかして撃沈した？」

「当たり前」

「『『キャハハ』』」

全くもって情けない連中だ。

まあ女の子の確保が出来たから街にでも繰り出そうか。そろそろ良い時間だし。

今はファミレスに入って談笑している。

僕は疲れてあまり喋れてないけど。なにがあったかって？着替え…いや、察して。

「あんた…良い身分ね…っ！」

ん？と思い顔をあげると御坂さんと白井さんが居た。御坂さんはビリビリいつてる。

「かみちゃん、ちょっと向こういつてるぜよ」

ドーンと当麻を御坂さんに引き渡すつちー。悪だ。

「あれはどうした？」

「かみちゃん常盤台のレベル5に怨まれてるんだにゃー」

「へー…上条君って凄いんだー」

「無能力だけどねー」

「じゃああたしらはそろそろ解散するわね、今日は楽しかったよ」

そして去る女の子三人。あれー？

「これは当麻のせいなんじゃ…」

「かみやん…」

意見が一致して後ろを見ると電撃に襲われていた、そのまま当たれ。

「なんだか拍子抜けしちゃった…かえろつか？」

「そうだにゃー」

僕らもファミレスを出る。後ろから当麻の助けを呼ぶ声が聞こえるけど無視。

「不幸だあああああ!？」

うん、すごい音がした。僕とつつちーは頷くとすぐにその場から逃げた。

「なんで誰も電話に出てくれないんやー…」

8月26日

ある意味では昨日のナンパは成功だ。でも失敗だ。

その理由を一人残り少ない宿題をやりながら考えていた。

何がいけなかったんだろう？昨日の女の子達の言ってたことを思い出す。

『あの中ではカッコイイ部類』

『両手に花』

『可愛い子いるのにナンパしてたのー？』

これくらいかな？まあカッコイイ部類ってのはわかる、この僕の溢れんばかりの男気がそうしたんだろう。ん？鏡？何をいつてるのかな？かなたが写ってるだけじゃない。

まあ最初のカッコイイ部類って言うのは間違いなく好印象ととって間違いない。

次の両手に花：これは多分二人もしくは三人が僕につくっていう事をいつてるんだと思う。

え？男2の女4に見えたって？眼科医って眼球くり抜いてもらった方がいいよ。代わりに邪気眼入れてもらいなよ。

「あ、間違えた。ここはこの公式か」

消しゴムで消し書き直す。えーと？結論は僕がかっこよすぎたんだっけ？え？違う？知ってるよ！

で、最後は…可愛い子いるのにナンパしてたのー？

これは疑問が満ちた。僕とつつちーと当麻しか居なかったはずなのに…

心なしが僕以外の二人に言ってたし僕の事をチラチラ見てた気もするし…

いやいや！きのせいきのせい…がいいなあ…。

「僕はこのままで大丈夫なのかな」

「あ？どうしたいきなり」

「うん…男として生きて行けるか不安になってさ」

「？…あゝ！？ああ、そうだなそうだったな」

「まさか妹に性別を忘れられる日が来るとは」

「そつえばお前兄貴だったよな。姉貴にしか見えないけどなー」

それはどうなんだろう…？というか人生の先行きが不安過ぎる。

「だって俺と並んでたら間違いなく俺が男って言った方が信憑性あると思うぜ？」

「この僕が女々しいって？どれだけ男らしく生きてると思ってるの？」

「少なくともそこら辺の女よりも女してるんじゃないか？まあ俺よりは女してるよ間違いないな」

「あなたもそれは女の子としてどうなの？」

「俺は元々お前のクローンだからな、性別以外は間違っちゃいないんじゃないか？」

「じゃあなに？僕は性別を間違えてきたとでも？」

「違うのか？DNAに否定された男？女？」

「男だよ！そこははっきりしようよ！」

「ああ、ワリイな姉貴、間違えた」

「訂正する気なし！？」

「あなたのくせに…男女のくせに…」

「仕方ねえな今日は俺が飯を作ってやるよ、可愛い姉貴のためにな」

「またそついうこと言うか！」

「怒んな怒んな、上条が口出しにくそうにしてんぞ？」

「え？って当麻どうしたの？」

「いや、ちよっとインデックスを預かってもらいたくてな」

「別に良いけど…」

「ホントか？サンキュー。おーいインデックス！オッケー出たぞー」

隣の玄関が開く音がする、パタパタとする足音がそうだろう。

「じゃあかなめ、後頼むな」

「よろしくなんだよ。じゃあねとうま」

ブンブンと手を振っている。あ、壁にぶつけた。

「いや…僕のせいじゃないから睨まれても…」

「こんなところに壁が有るのがいけないんだよ、もっとこっちにやるべき」

「じゃあ当麻の部屋を改築して玄関狭くしないと。というか壁に怒る人なんて初めてみた」

「おい、飯は食うのか？」

「たべる！」

即答！？まあ別に良いんだけどさ…でもかなたが仕切ってるのってなんだか納得いかない。

「そついえば今日はどうしたの？珍しく来たけど」

「今日はね、当麻の食糧が無くなったから来たんだよ。情けないよね」

情けないとかそれ以前に、そんなに食べるの！？って話なんだけど。

「おう、家のはコイツのだから食糧難になるまで食うんじゃねーぞ」

「わかったんだよ！今日のご飯は炒飯！」

何についてわかったのかはつきりしてほしい。

結局かなり食べられた。まあ食糧に一時的な損害だから…今月はもつ。というか今月はもう終わるからね。

今はインデックスはマジカル何とかかんたら…覚えられない…まあカナミンだかなんだかを見て徹底的に考察していた。原典の無駄遣い。

邪魔すると噛まれるから気をつける。頭がいたい。

P r r r r r r

「おい、携帯鳴ってんぞ。あとそこのがきんちょ携帯くらいでビクつてすんな」

「し、してないもん」

「ほーお？じゃあお得意の神に誓えるのか？」

「当たり前かも。というより神に誓うくらいでごまかされるならこによごによ」

本音駄々漏れ、なんてほのぼの見ていて電話に出るのが遅れた。

「殺すわよ？」

携帯を全力で投げそうになった。鉄の精神で何とか落とすに堪えたけど。

「今から来なさい。場所は第8学区の」

ぷつん、という音とともに電話が切れる。え！？僕切ってないよね！？電話のマーク出てるよね！？

というか第8学区のどこに行けば良いの！？

完全にプチパニックになっているがすぐに準備して行かないとまずいことになる。宿題を中断しクローゼットを開けたは良いものの奇跡的にスカートとかしかなかった。意味わかんない。洗濯を怠ったからか！

確かどっかのヨーロッパではスカートが基本の国が合ったはず。だから大丈夫、と自分に言い聞かせて仕方なく服を選ぶ。青いスカートに白いブラウス。アルエー。

「ちょっと出掛けて来るね」

「ん？ああ」

「わかったんだよ」

まあ女の子同士ゆっくりやっててください。

奇跡的に麦野を見つけた、神っているんだなって思った瞬間でもある。ちなみに麦野しかいなかった、絹旗しかアドレス知らないはずなのになぜしってる。

「ようやく来たわね」

「場所の詳細くらい…」

「それは置いといて。かなめ、ここ制圧してきなさい」

意味がわからない。

そして良い笑顔なのはなんでよ。そして建物を見上げる普通のビルだった。

「制圧するのは地下」

あらそうですか、ということとで階段を見る。うん、これスキルアウト的な奴らがいっぱいいるって。

「僕には無理ですって。攻撃能力は皆無ですし」

「うつさい、さっさいきなさい」

瞬間、感じる浮遊感。階段を蹴り落とされたと気付くのにそんなに時間を要しなかった。

「ん？ぶげえ！？」

ちょうど階段下のドアから出てきたらしい人物と接触。奇跡的に無傷。いや打撲くらい有るかな？まあ殆ど怪我はなかった。

「いたたた…」

腰をさすつているといきなりの拘束…というよりハグ。顔を埋めるな息できない。

「神様ありがとよ、彼女がほしいう願を叶えてくれて」

「むー！むー！」

「はっはっは、喜ぶのは早いんじゃないか？」

「全く…世話が焼ける」

いきなりの開放感。ハグしていた奴は気絶していた。

「いきなり蹴り落とさなくても…」

「じゃあ私も手伝うから殲滅するわよ」

仕方なくついていき時間操作で麦野を助ける。原子崩しでの殺人は

してなかったけど時間操作の恩恵と元から持つてる麦野の格闘能力で無双。

「なかなか便利な能力じゃない。これからも私のために尽くしなさい」

なんで？まあ首押さえて手を光らせてるから従うしかないんだけど。

「私とかなめと滝壺がいれば勝てない奴はいない…っ」

一通さんには勝てないと思う。

8月28日

海。それは男と女の青春を過ごすために必要不可欠な場所。

そんな青春を送りたいものだよね。ちなみに僕は今海に来ている。

それは問題ない。家族で来ているのも別に不自然じゃあない。たまには遊びに行こうとか言われて言われるがままに外出許可証を貰った。何故かかなたがついて来たけど、というよりなんでゲスト認証されてたのか。まあ謎は説明かされることはないでしょう、うん。そして両親にかなたの事情を話したらあっさり僕の妹と認めたのも100歩譲って認めよう。特殊な人だしね両親。

「プールのときより成長してる？いやいや待て、あまりじろじろ見るのも失礼だ」と言うよりかなめは親友だそんな目で見ちゃダメだ。見ちゃダメなんですよ上条さんんんん」

なんだか苦悩しているけど当麻、今何て言った？小声だったけどはつきり聞こえたんだけど…？

で、なんで当麻のお母さんがインデックスになってるの？と言うよりなんでインデックスがかなたになってるの？

で？この御坂さんもどきは何者？演技？助演女優賞狙いの？

なんでかなたがつつちーになってるの？というか僕は？僕はかなたにでもなってるの？見た目変わんないから良いけどさ。というかあれ？もしかしてこれって僕がかなたでインデックスが僕で…いかん、なんだか混乱してきた。

この混乱は見たかぎり僕と当麻だけでほかの人達は特に混乱してなかった。

認識がおかしいのは僕たちだけなんだろうか？ いや、でも僕も姿が変わっているってことは魔術にかかっているはず…なんだけど。

「あらあら、当麻さんは欲張りなんですね」

チラと見る、インデックス（見た目僕）と当麻のお母さん（見た目インデックス）を何故か父親から守るようにしていた。マザコンに独占欲が強い、と。それは欲張りだよ当麻。

まずは落ち着こう。落ち着いてどこかに座ろう、いつまでも部屋に入った状態で立っていたらおかしいからね。赤いキャミソールを着た子の隣に座る。僕が青いキャミソールだから隣にインデックス（見た目僕）が座ればどこぞの国旗になるだろう。本当にどうでもいいことだけだね。

「おはよう」

「あ、おはようおねーちゃん」

ピシッとした音が自分から聞こえたのがわかる。恐る恐る隣に座っていた子を見るとどこからどう見ても御坂美琴だった。

「お、おねーちゃん…ね」

「ん？どうしたの？」

「うつん、なんでもないよ」

ふと、思う。自分の両親はどうなったんだろう？誰になったんだろう？気になるけど昨日。

『あれ？かなめの御学友かい？なら家族でいるより一緒の方が楽しいだろう。お金を渡すから行ってきなさい。父さん達は父さん達で楽しんで来るから。かなたもかなめの言うことを聞くんぞ？』

なんて言い残して失踪して行った。家族の団欒のためじゃなかったのかといたいが消えたものは仕方ない。

はあ…と溜息をつき気が付いたら隣にいた子が居なくなってる。あれ？と思っただけど気が付いたら当麻が降りてきていてショート…まあいわゆる知恵熱とか発症していた。

「神城さん、君も着替えてきなさい。海に行こう」

いつの間にか当麻のお父さん、刀夜さんが隣に来ていた。

「あ、はいわかりました」

「当麻も連れていってくれるかい？多分当麻の方が準備早いだろうから場所とりするよう言ってくれるかな」

コクリと頷くと当麻を治しにいく、治し方は…正義のヘッドバッド。

「いてえ！？」

おそらく僕の方が重傷だろう。声すらあげられない。なんて石頭。

頑張つてさつき刀夜さんに言われたことを伝える。

「じゃあ着替えにいいうぜ」

そして手を差し延べられる。それを掴み前屈みになり立ち上がった。

「だから親友だっていつてるでしょうがああああ！？そこに目を向けちゃダメなんですよ上条さんんんん」

壊れた。まあすぐに立ち直ると思い先に行く。案の定当麻は後ろからついて来ていた。下着が…下着が…って眩きが聞こえた。ビリッと破けた？ご愁傷様。

水着はプールのときと一緒だ。身体は僕のものじゃなかったけど。僕の…僕の男としての尊厳、象徴が！？

それを着て外に向かった。当麻は早かった。

まあ座つているところの邪魔をするのも悪い、ということ？チラチラと見えている。人物を見ていた。アイドル『――』（ひとついはじめ）とステイル「マグヌスだ。何の関連性がある二人組か知らないけど確か神裂とつつちーだったはずだ。まあ僕には関係ないだろう。海を見ていると当麻の両親とかインデックス（見た目僕とかかなた（見た目つつちー）とかが遊んでいた。と言うよりかなた。何その水着、僕もほしくらいかつこいいぞ。

ハーフパンツタイプにTシャツ。つつちーが着ててもおかしくない

感じに仕上がっている。というか下がデニムタイプなら外出歩けるよそれ。

まあ僕は関係ないし混ざりにいこうとしたら肩を捕まれた。ステイル「マグヌス（神裂）だった。

「どこに行こうというのですか？」

「僕の日常に…」

「なら『御使墮し』（エンゼルフォール）を解除してからにしてもらいましょう」

ギリツという音が肩から聞こえる。背中では冷や汗で一杯だ。

「何を言ってるかわからないんだけど…やめてもらえます？警察が見たら捕まっちゃいますよ？週刊誌には大男海岸で暴行未遂ってところかな？」

「大…男？」

「あれ？たしかステイル」マグヌスだよね？」

沈黙する、その後ろではアイドルが安堵していた。

「では…何故あなたは入れ替わっていない？」

「入れ替わる？もしかしてこのちぐはぐな状況は君が作りだしたのかな？」

またも沈黙する。

「やはり、貴女が犯人ですね？御使墮しの状況下で影響を全く受けていない。」

「多分受けているはずなんだけどね…これのおかげじゃないかな？」
シャツの下に入れていたネックレスを取り出す。それは銀の細工もなにもない無骨なロザリオ。お近づきの印しに昨日刀夜さんから貰ったものだった。

「クロス……………信じましょう」

目を見開いてたところを見ると何かすごいものだったらしい。

尋問も終わったらしく関係ないよね？ということとで日常に戻る。遠めに見ると当麻がセクハラされていた。

頑張れ当麻、君の分の幸せ（日常）は僕が堪能しておくから。

8月28日（後書き）

ついに男をやめてしまった

まあエンゼルフォール中だけですけどね

8月29日（前書き）

よーし！久々に時間が作れた！更新ですよー

そしてですがこの拙い作品を読みグダグダ、駄文ということでご分
を害された方、申し訳ありませんでした。感想の返信も遅れたこと
も同時にこの場を借りて謝罪させていただきます。本当に申し訳あ
りませんでした。

そしてこれから改善できるよう書いていければと思います。指摘あ
りがとうございました。これからもアドバイス、よろしく願いま
す。

8月29日

「ちっ、うるっせーな…」

かなたのけだるけな声が聞こえる、隣の部屋はドタバタと喧しい。もう朝のようだ、隣人…当麻の日常（不幸）は今日も絶好調のようだ。

「おい、うるせえから黙らせてこい」

つつちー…土御門の姿をしたかなたが無茶振りをしてくる。口調、顔、双方ともつつちーには出せない迫力があつた。つか怖い。

「自分で行った方が早いって」

「めんどくせえ」

ごもつとも。かなたは二度寝するつもりなのか布団に潜り込んでいた、それとは真逆に寝転がっていた僕は起き上がって伸びを一つ、欠伸も忘れずに。

「さて…今何時かな」壁に掛けられた時計を見る、朝7時健康的な時間だろう。休みの学生にはまだ早い時間だとは思うけど目が覚めたのだから仕方ない。

鞆を漁り着替えを取り出す、今日は下に水着を着て下はデニム、上はパーカーというラフな格好でいこうかと思う海行くだろうしね。

着替えは手早くがモットー…てわけでもないけど早く着替え「神城

く…」声がする方を見ると刀夜さんが立ち尽くしていた。

上半身裸の僕（前は着替えて隠れている）、立ち尽くす刀夜さん。

「す…すまな」「てめえこらあああああ！？インデックスだけじゃ飽きたらずかなめにも手を出そうとしてんのかこの野郎おおお！？」

目の前で当麻が現れて消えて行った。簡単に言々と跳び蹴りで二人とも視界からフェードアウトしていった。

「うるせえこらあああ！？」

煩わしかったのかそのフェードアウトしていった二人に追撃を加えにいったかなた。その一連の出来事に呆然としながら残りの着替えを済ませドアの先をみた。

「何やってるのさ…」

思わず溜息を吐いた、刀夜さんを一番下に当麻、かなた（見た目つつちー）の順に折り重なっていた。全員寝ているようだ。

「あらあら、仲良しなのね」

ニコニコと笑う詩菜さん（見た目インデックス）はその横を通り過ぎると階下に降りて行った。強い人だ。そんなことを思いながら詩菜さんについて下に降りた。

階下に行くとステイル（親父さん）がイカを焼いていた。

「朝からいっちゃうんですか？」

クイツと呑む仕草をすればがははと笑いながら「嬢ちゃんはもう少し経ってからだな」といい朝何を食べるのかを聞いてきた。

「親父さんのオススメでお願いします」

嬢ちゃんと言われても気にしなくなってきた、そりゃあかなたの身体なら仕方ないからね？かなたのせい、かなたのせい。と思いつつ朝ご飯が出来るまで先に座っていた詩菜さんの隣に座る。

「あらあら、当麻さんたらあのまま起きて来ないのかしら……ごめんなさいね、あんな子で」

どんな子だ、と思ったけど様々な奇行を思い浮かべると苦笑が漏れる。間違いなく昨日今日のせいで当麻はマザコンに認定されると。

「お待ちい！」

親父さんが御膳を2つ持ってやって来る、朝ご飯らしく納豆、味噌汁等の定番でまとめられていた。

「いただきます」

「そうね、いただきます」

僕と詩菜さんは一緒に手を合わせ食べ始める。傍らではテレビを見ながら焼きイカと日本酒で一杯やってる親父さんの姿が。

詩菜さんと他愛のないことで談笑しながらご飯を食べていると当麻の従妹さん、確か乙姫って言ったかな？が降りてきた、見た目は御坂さんだけど。

「おはよー」

「おはよう、乙姫ちゃん」

あつてたらしい。僕もおはよう、と声を掛けご飯を食べるのを再開する、それを見て乙姫ちゃん（見た目御坂さん）も注文しに行く。親父さんは任しとけといって作りにいった。

「ご馳走様」

そういうと周りを見渡す、ちょうど当麻、刀夜さん、かなたが降りてきたところだった。詩菜さんと乙姫ちゃんはまだ食べていた、乙姫ちゃんはまだ食べ始めたばかりだったけど。

「あれ？インデックスは？」

「あ？まだ寝てるんじゃないか？」

僕の問にかなたが答えると3人とも欠伸をして親父さんにご飯を頼んでいた、ついでにインデックスの分も頼んでもらうと僕は起こしに2階に向かった。

ふと、これは当麻の仕事じゃないかって思ったけどまあこまで来たなら今更戻るわけにもいかないのので部屋をノックする、返事はない。

「インデックス？入るよ？」

一応聞いてから開ける、布団でスヤスヤと僕が寝ていた。なんだかなあ…僕死ぬんじゃないかな、ドッペルゲンガー的な意味で。まああなたのせいで毎日死んでるようなもんだけど。

「どうしたものか…」

起きろー！と言いながら揺らす、まあ定番だね。

「はわあ！な、なになに何事！ってかなめか、驚いて損したかも」

「起こして損したよ、せつかくご飯頼んでおいたのに」

「わーい」

なにもきかず、僕など居なかったかのように下に降りて行った。せつない。

正午、当麻は夏バテらしくダウンしていた。僕の見解では寝不足とかいろいろ祟ってなったんじゃないかと。そんな当麻が海の家で休憩しているので僕等（当麻を除いた上条ファミリーと僕とかなた）は海に出ていた。ああ…今間違はなく青春してるんだろうな。主にお守りな気がしないでもないけど。

「かなめ君、ちょっと当麻の様子を見てきてもらってもいいかな」

「あ、はい見えます」

心配ならば自分で見に行けば良いのに…と思ったけど、思春期の高校生だ何か思うところでもあるんだろう、きつとね？

そんなことを思いつつ泊まっていた海の家に戻る、看板をたまたま見上げたところ「わだつみ」というらしい。海神または綿津見、海を統べる神の名前が付いていた、まあだからなんだっていわれたら元も子もないんだけど。でもオカルト（魔術）的には名前って重要なんじゃないかな？霊的なうんぬんかんぬん…まあよくわからないので中に入る。

「あれ？どっかいくの？」

居間を見るとちょうど当麻と会った。後ろにはアイドル、巨漢の外国人、赤いシスターさんの3人が控えていた。どこのお笑い集団かと。

「ああ、タクシーでちよつと俺ん家に行ってくる。インデックス頼むわ！」

そういうや否や外に出て行った、子守を僕に任して。当麻に続くように外国人、シスターが出て行った。

「…かなめ、何か気付いてるぜよ？」

口調はいつもと変わらないが顔は良いので何故か凛々しく見える。まあ色々駄目だけどね。そんな印象を持ちつつ、どこか鋭い？つちーの質問に答える。

「…本職じゃないからわからないけど、刀夜さんが怪しいんじゃないの？だって当麻は詩菜さんの姿がインデックスになっててテンパっていたのに刀夜さんにはその反応はなかったし。」

何処かほづけているつつちー、何故気づかなかったのかという顔を
している。

「でも、確定じゃないよ？火野だって姿変わってないみたいだし…
君等の知り合いなら赤いシスターだってもしかしたら姿が変わって
ないんじゃないの？」

「かなめの洞察力には脱帽だぜい、情報感謝するにやー」

実は知ってたんです、なんてことは言えるはずもなく、口を閉ざし
手を振って出ていくつつちーを見送った。

当麻達が火野を追い掛けている頃、というかタクシーに乗ったであ
ろう頃、僕は海に戻って当麻が出掛けたことを伝えた。

「知り合い…かい？」

「はい、学園都市の友人に偶然出会ったみたいですね、ちょっと出
掛けてくるって言ってましたよ」

まあ間違っではない…と思う。友人だろう、つつちーは。偶然じ
やないけど。そんなことを刀夜さんに伝えると困った奴だな…とい
って苦笑していた。

「えー、お兄ちゃんどっか行っちゃったのー？」

「すぐ戻って来ると思うよ？」

ぶーぶーとブーイングしている乙姫ちゃんを宥めていると、僕の顔がふて腐れていた、インデックスか。

「むっ、なんで当麻は私を連れていかなかったの、最近ちょっと冷たいかも」

「僕に言われてもねえ…何だったら抗議のために部屋のレンジに卵でも仕掛けて脅しかければ良いんじゃないかな？」

「それは良い案なんだよ！帰ったらやってみる」

そついうと目をキラキラさせていた、ああこれは…ごめん当麻。

そんな年下二人の子守を延々としていた。刀夜さんと詩菜さん…微笑ましいものを見る目をしてないで手伝ってください。

8月29日後編

夕方、インデックスと乙姫ちゃんとかなたは詩菜さんと共に買い物に出掛けた。最後くらいはバーベキューでもしようという刀夜さんの粋な計らいによるものだった。タクシーを呼び女だけで行っみたい。若干男みたいないるけど。

そして、当麻を待つといって残ったのは刀夜さんと僕。それで、今この海の家『わだつみ』に居るのは僕と経営している親父さん達だけ。刀夜さんは散歩に行ってくるといって出て行ってしまった。

人も居ない、時間を潰す手段もない。暇だった。暇を持て余していたからか、僕に何か予感めいたものがあつたのか：外を見上げた瞬間、黄昏れは消え去り宵闇が広がった。

「え？」

不可思議な現象を目の当たりにし、パニックになりかけたけど、ふと思ひ出した。

「ああ、神の力…だっけ」

ボソリと呟く。どうやら、この異変も佳境の様だ。そんなことを考えていると不意に両手を後ろ手に抑えられ口を抑えられた。感触的に男の手だろう。というかつつちーしか居ない。

犯人の目星を付けると耳元に囁くような声が聞こえた。

「貴様、何者だ？なんでこの現象が神の力と知っている？」

僕の口を抑えていた手を離すと両手で腕を抑えられた。

「…信じてもらえるとも、納得してもらえるとも思わないけど。その質問の答えは知っているから。としかいえないよ」

「全く、かなめは謎ばかりだぜい…」

やれやれといった風に溜息をつく。

「つつちーほど謎だらけな人に言われたくないけどね…」

負けじと？こちらも溜息をついてやる。

「で？なんで僕は拘束されてるの？僕が術者じゃ無いのは明らかにしたよね？」

「人質にやー」

意味がわからなかった。何だか知らないけど人質になるの二回目だよ？僕って呪われてるんじゃないの？

つつちーはそんなことを考えている僕を肩に担ぎ外に向かった。

「ねえつつちー？」

「どーかしたか？冥土の土産に教えてやってもいいぜい？」

「エン、ゼルフォールだっけ？止め方解った、の？」

肩に担がれたまま喋るためちょっと揺れるだけで声が途切れる。でもまあ言いたいことはわかるでしょ、日本語だし。

「かみやん家を吹っ飛ばす」

「惜しいなあ、僕が警官、学園都市ならアンチスキルか…。そのどっちかだったらつつちーを現行犯で捕まえられるのに」

今現在捕まってる僕が言うのも何だかおかしい話だけど、まあいいや。

「かなめがアンチスキルだったら学園都市は無法地帯だにやー」

そんなことを言いながら笑われる、僕も一緒になって笑った。

「あははは、天誅!!」

肩に担がれている状態から膝と肘を思い切りつつちーの身体にたたき付ける。

「甘いにやーかなめ、バレバレだぜいですよ?」

振りかぶった膝と肘はつつちーが僕の身体を肩から持ち上げることによって空を切った。

「つつ…」

「はっはっは、かなめが睨んでも怖くないにやー。可愛いだけです
たい」

その言葉を聞き急にやる気が萎えた、と言つよりも諦めた、全部このかなたの身体が悪いんだ。

「そうだよ、肘膝が当たんなかったのも色々間違われるのも全部かなたがいけないんだ!？」

僕の咆哮。それに答えるのは思いもしない声だった。

「いや、それはかなめのせいじゃねーのか?一卵性だし同じ遺伝子だろ?」

何故か当麻の声が、後ろ向きに担がれてるので見えないが。

「さて、かみやん俺はもうお手上げだにやー」

ばんざーいと手を挙げて僕を担ぎあげた。正直降ろしてほしい。

「は?どういうことだよ?原因がわかんなかったのか?」

「いや、原因はわかったんだけどにやー…」

言い淀むつつちー、流星に当麻の肉親を殺すというのは言いにくいのかな?いや、つつちーに限ってそんなことはなさそうだけど。

「かなめが犯人だにやー」

途端、当麻の目が見開かれる。つつちーに親父じゃないのか?みたいに刀夜さんと僕を見比べていた。

「まあ嘘なんだけどにやー」

「阿保かあ!？」

当麻の右は華麗に避けられていた。その反動でつつちーが僕を落とす。頭から砂に落ちた。打ち所が悪かったのか目の前がぼやけ意識が揺らぐ。それを何とかつなぎ止め立ち上がった。

「いてて…うあー体中砂だらけだよ」

風呂に入りたい気持ち悪い。まあそんな状況でもないので黙っている。

「じゃあつつちー、やつちゃえば？ハッピーエンドの道筋、出来るでしょ?」

「まあ、出来てるっちゃ出来てるが…」

「え?じゃあ早く解決しようぜ?神裂があぶねえ」

「じゃあかみやんとかみやんの親父さんとかなめはわだつみに行つてくれ。俺はちょっと準備することがあるにやー」

そう促されわだつみに入る、取りあえず一階でわだつみの親父さん達と会話でもしていることにした。

親父さん達と会話していて、つつちーが遅いとか適当に理由をつけて外に出た。そこには頭から血を流しているつつちーの姿があった。

「かなめ？待っているっていったぜい？」

「それが遺言？そんなことより遺言なら上条家に家を吹っ飛ばしてごめんなさいって言ったほうが良いんじゃないの？」

「つっちーは苦虫をかみつぶしたような顔をした。」

「かなめもなかなか冷たいぜい。死に行く土御門さんに何か御褒美的なのはないのにかにゃー？」

「笑うつっちー、多分身体は辛いはず。」

「どうせ死なないよ、僕が死なせない。」

「邪魔だけはしないでほしいにゃー」

「大丈夫、全部終わったら何とかするから。」

「そっか、じゃああとは任せたぜい？」

「そついうと術式が完成したのかつっちーの身体が白光に包まれると同時にとてつもない轟音が鳴り響いた。そして倒れるつっちー。音に気付き慌てて外に出てくる当麻。ちょうど帰ってきたのかタクシーが少し離れた車道に泊まりインデックスがでてきた。僕の姿じゃない。」

「僕はつっちーを時間操作で出来るかぎりの速さで時間をはやくした。あとはちょうど帰ってきたタクシーに乗せて学園都市に向かってもらった。」

「色々な説明は当麻がしてくれるでしょ……」

そんな独り言を呟き海をあとにした。

8月31日かなめ

深夜、物音で目が覚めた。泥棒かとも思ったけれど、どうやら僕の部屋からじゃないようだった。

部屋に異常がなかったからだ。まあ、かなたがタオルケットに包まって寝ているくらいだろう。寒いなら冷房切れば良いのに。勝手に切ると何故か怒られるから切らないでおくけど。

となると物音は隣人の部屋からだろう。どうせ当麻と決めつけ二度寝しようと寝転がる。

「…………喉が渴いた」

面倒臭がる身体に喝を入れて何とか起き上がる。冷たい麦茶が入っているであろう冷蔵庫に向かう。

「天にましわす…」

隣から何か聞こえるけど、まあ気にせずに冷蔵庫を開けた。何に祈りを捧げてるのやら。

「おかしいなあ、昨日の朝に沸かして一度も飲んでないはずなんだけどなあ…」

冷蔵庫には空っぽの容器がしまつてあった、洗えよ。

仕方が無いので水道水を飲む。カルキ100%美味しくない。学園都市の技術で外よりかははずいぶんマシになってるらしいけど、美

味しくないんだからしょうがない。

水を飲んでいると隣から声が聞こえてくる、防音対策万全過ぎて泣けてくるね。

「うふふ、うふふふふ」

当麻、何がどうしたの？不幸メーターが振り切った？まあこの時間、この日付、でいくと宿題を何もやってなかったってところかな？ああ、かわいそうかわいそう。

こまめにやらないからこうなるんだよね？僕は前世で何度もやって学んできたから宿題は終わってるけど。全部夏休み序盤に。タイムマニピュレータは偉大だね、どうにかして手に入りたい科学者の気持ちもわからなくはないからね。

夏休みの宿題が数日で終わる快感。当時はインデックスの事件のただ中だったけど嬉しかったもんだ。小萌先生の家だったから学生としての印象は抜群のはずだ。まあ当麻の前でもちよこちよこやってたんだけど…記憶全部消えてるからねえ、忘れてるのもしょうがなかな？

欠伸を一つ漏らすと布団に入る。最終日くらいゆっくりしよう。

明日から9月、学生はほとんどが明日を思い憂鬱になりやる気無くすか必死に宿題をやっている日。私は宿題もなければ特に憂鬱というわけでも無く、ただ街に繰り出していた。誰かに会えないかと心待ちにしながら。

「暑いなあ……」

茹だるような厚さに嫌気を指しながらただ通りをぶらぶらと歩く、たまに店を覗いては涼みながら冷やかしたりして過ごしていく。

そんなことを二、三繰り返していると見覚えのある、少し待ち侘びた後ろ姿を見つけた、私は小走りで追い掛け肩を叩く。

「かなちゃん、夏休みも最後だっていうのに一人なのかな？」

振り向いたのは神城かなめ、私の友達。その友達は…何故かメイド服を着ていた。メイド服なのは突っ込まないほうが良いの？

「あ、鈴木さん。まあね僕にいい人なんて居ないし」

困ったようにはにかみながら連れが居ないことを言う、成る程かなちゃんもヒマと。

「かなちゃん今日一人なんだよね？じゃあ私に仕えない？」

「ん…？何だか不穏な単語な気がしたけど…今日暇だから付き合うよ？」

言質は貰ったよかなちゃん。そんなことを考え脳内で高笑い、これから何しようかなあ？

まあメイドさんが居るんだからどこに行っても幸せよね？

「じゃあ行こう？私のメイドさん」

そういうと「はうつ」といい落ち込みはじめた、やっぱり自分の意志じゃないんだね？

「ぼ、僕は好きでこんなの着てるわけじゃ……」

「でも私に仕えてくれるんだよね？」

「不幸だあ……」

失礼な、私はとても幸せよ？

どうしてこうなった？それが今の僕を表している。

右には佐天さん、左には鈴木さん。何故か睨み合っている。街を歩く人の注目を集めていた。ふふ、僕がハーレムの主になっているからね。………「ごめんなさいわかってます、女の子が二人メイドさんを取り合ってるんだよね？」

「かなめさんをメイドに仕立てあげたのは私ですよ？私のメイドになるべきです」

「あら？かなちゃんに逃げられた娘が何を言ってるの？それになかなちゃんは私に仕えてくれるって言ったの」そんなことは言っていない僕はメイドじゃない。いや、服はメイドだけれども……だいたい佐天さんは何で僕に着させたのか？……普通に似合いそうだからですけど？って言われそうだ。

「聞いてるんですか？かなめさん！」

佐天さんの声を聞いてじんわり逃避しかけていた思考を戻す。

「う、うん聞ってるよ?」

「じゃあかなちゃんとは私とこの子、どっちに仕える?」

仕えないから。そういうと同時に一目散に逃げ出す。

「こらっかなちゃん待ちなさい!」

「かなめさん!逃がしませんよ!」

二人して追い掛けてくる。うわーい、女の子が二人も僕を追い掛け
てるよ?…辛い。何でこうなってるんだろう?二人して僕をこき使
いたいだじやない。捕まってたまるか。全力で走り路地裏を通り
抜け小道に入りどうにか撒こうとするが一切距離は開かない。佐天
さんは居なくなっただけ。

「かなめさんストップですよ!」

ドーンという効果音が似合いそうな感じに佐天さんが僕の目の前
に仁王立ちをしていた。

前門の佐天さん後門の鈴木さん、万事休す?

「先程、さやかさんと話し合っただんですよ?争わずに共有財産にし
ようってねえ?」

「ええ、そうなのよかなちゃん」

ニコニコと笑う佐天さんと鈴木さん。というか鈴木さんの下の名前初めて知ったよ。

何て余裕ぶつてる暇は無くジリジリとにじり寄る二人。僕の負けは明らかだった。

「お嬢様、何で僕の家何でしょうか？」

二人に負けたあと、何故か僕の家に来ていた。おかしい。

「そりゃー決まってるじゃない、ねーさやかさん」

「ねー」

仲良いのか二人ナイスコンビで僕をおちよくってるのか、まあ後者だろうけど。とにかく二人の相性は抜群のようだ。

その二人は僕のクローゼットの服（自費は無し）を取り出しては分け取り出しては分けを繰り返し服の組み合わせを作りまくっていた。なんでもか見覚えのない服が見えているけど気にしちゃいけないだろう。

ピンポン。家のチャイムが鳴り響いた。

「かなめーいるかにゃー？」

「おるんやろ？ただ出てこないのは僕に会つのが恥ずかしいからやんな？」

ドアに付いているレンズで外を見ると前でたむろしていたのはつちーと青ピだった。何だろう？とても出たくなかった。

「出ないんですか？」

佐天さんが後から声をかけた。仕方ない。

「はいはい、只今多忙につき」

「か、かかかかなめ！とうとう僕にあんなことやこんなことを奉仕してくれ」「気持ち悪っ！」

ボタンという音とともに目の前から青ピの姿が消えた、佐天さんが辛辣な一言と共にドアを閉めたからだ。

ピンポーン、もう一度なるチャイム。またレンズを覗くとつつちーだけが写っていた。

ドアを開ける、青ピが不法侵入、佐天さんが反射的にビンタしていた。

「あーご、ごめんなさい、つい」

「しょうがないにやー、今のはエセ関西人が悪いぜよ。かなめ、お邪魔するにやー」

「そうそう、あまり気にしないでいいよ佐天さん。いらっしやっい

「つつちー。バイバイ青ピ」

「なになに？何の騒ぎってその青いの何っ？気持ち悪っ」

佐天さんの物理的なダメージから始まりつつちーの軽いジャブ、僕のジャブときて奥から姿を見せた鈴木さんの強烈な一撃の元青ピは玄關で泣き崩れていた。

泣き崩れている青ピを放置、部屋に入り各々好きなところに座った。

「そつえばどうしたの？何か用でもあった？」

女の子が居ることが多少嬉しいのか浮ついているつつちーに聞く。

「んー？かみやんが俺達を裏切ったからかなめのところに押しかけにきたただけだぜい？」

「裏切った？なに？女の子と遊びにでも行っただの？」

つつちーはコクリと頷くとため息をついた。

「常盤台の超電磁砲だにやー…かみやん絶対に許さ「え！？超電磁砲？レベル5じゃない、かなちゃん友達ってすごいよね」

鈴木さんがつつつちーに割り込んで何故か僕に抱き着きながら言った。抱き着いた意味はわかんないけど。でも女の子空のハグとか初めてだ、やわら…いや何でもない。

「そつだね、友達は凄いやいろんな意味で」

何たって最強に勝ったんだから、凄いに決まっている。あとフラグ

男としても……妬ましい。

「その、かみやんって人は前に見た隣の髪がツンツンの人ですか？」
首を傾げながら思い出すように佐天さんが聞いてきた、そういえば一度見てたね。

「そうそう。ねえ鈴木さん？そろそろ離れない？暑いって」

今だにハグを続ける鈴木さんに離れてもらおう言っていると渋々離れて行った。僕が言うのも何だけど、メイドさんは愛でるものとしてほしい。いや鈴木さんとか佐天さんからしたら愛でてるのかもしれないけどさ。

「かみやんさん…凄い、私とは大違いだあ」

佐天さんが自嘲気味に呟いた、僕以外には聞こえないくらいの声量で。まあたまたま隣にいたから聞こえただけだし、もし鈴木さんがまだ僕に張り付いてたら鈴木さんにも聞こえてたはず。

「佐天さん、当麻は…かみやんって言った方がわかりやすいかな？かみやんは無能力者、不良、駄目人間だから別に凄くはないよ？ただ御坂さんと縁が合っただけじゃないかな？僕だって御坂さんとは知り合いだし、佐天さんだって友達でしょ？」

「あはは…でも、ありがとうございます何だか自信が出ました」

僕が頷いて一安心とため息をつくとき鈴木さんがニヤニヤしていた。

「かくなちゃん？さすがメイドね、お嬢様の変化にすぐに気づいて

なおかつ対応するなんて。メイドの鏡といっても過言じゃないわ」

過言だよ、それに男にメイドが務まってたまるか。といえたらどれだけ楽なのか、言ったら言ったで鈴木さんと佐天さんから冷たい目で見られること濃厚だけど。

そんなことをやっているうちに佐天さんと鈴木さんが帰って行った、これでやっとメイドから解放される。そう思っていると不意に携帯が鳴った、発信者は…かなただった。

「もしもし」

8月31日かなた

30日の夜、俺は外から帰ってきた。部屋の電気は消えていて姉のかなめは寝ているか出かけているんだろう。あ？兄貴だったか？まあいい、とりあえず今この部屋で動いてるのは俺だけ…なんてかなりどうでもいいことを頭から追いやる。外から帰ってきた俺は冷蔵庫を開ける、あまり自由に使える金がないから飯は極力家で食うようにしている。

「何を食おうかねえ」

そう呟き適当に食材を出していく。が冷蔵庫の隣の棚に良いものを見つけそれを手にとった。それはレトルトのカレー。

「たまにはレトルトも良いよな」

呟きながら皿に保温してあった白米を盛る、その上から冷たいカレーをかけラップもせずにレンジにほური込んだ。温めている間に出した食材をしまつ、そのついでに残り7割くらいになっていた麦茶を出した。これを見るに俺が飲んだ昼からかなめは飲んでいないんだろう。

麦茶をコップに注ぎ一杯飲む、もう一度注ぐ。そうしているとチーンと言う音がレンジから聞こえた。スプーンを持ち皿を取り出すと移動するのも面倒なので台所のシンク棚を背に座りカレーを食べはじめた。

「おお以外と…」

うまいと思い箱を見る。『ザ・カレー』激烈な辛さを君に』それを認識した瞬間猛烈な辛さが俺に襲い掛かってきた。良い度胸だ、ぜってえ完食してやるよ。麦茶を飲みながら格闘していた。

15分ほど食事をしていただろうか？俺はカレーに勝った、相棒のリッター容器に入った約700mlの麦茶とともに。その戦友は俺に癒しを与えつづけた結果、無き者となった、だから忘れないためにもそのままの状態で冷蔵庫にぶち込んでおいてやった、洗わずに明日の朝、かなめが麦茶を沸かす姿が容易に想像できた。使いやすい兄貴だ。

満腹感と達成感に満たされた俺は台所から部屋に移動した。勿論皿は洗ってやった。自分で使った食器ぐらいいは洗ってやらないとな。そして自分の宛てがわれた寢床に転がる、暑い。どうしてこいつはこんな暑いところで寝られるんだ？かなめの顔を見ると暑そうにはしていなかった。こいつは何かおかしい。本当に兄貴なのだろうか？姉と言われた方がまだ信用できるくらいには女顔だった。

俺も同じ顔だが、間違われるので髪型は違う。かなめは腰まである長い髪だが俺はショート、違いは一目瞭然だった。まあ俺が髪を伸ばすとかウィッグを被るとかすればわかんねえかもしれないが、する予定はない。…いろいろ脱線したがこいつは訳がわかんない奴ということだ。辛いものが好きだったり暑さに負けなかったり。同じDNAが怪しくなってきたが間違いなく同じもの。でも性別は違う。……じつは他人だろこいつ。

まあいい、とりあえず冷房を強めに設定しタオルケットに包まる。冷房を効かせて布団に包まるのって良いよな。そんなことを思いつつ眠りについた。

朝、麦茶の香で目が覚めた。やっぱり、と思い起き上がる。

「かなた、飲んだら洗えとは言わないから冷蔵庫から出しておい
てよ」

苦笑しながらやかんから目を俺に向けた。それに「わりい」と返す
とタオルケットを畳んで置いた。

「朝は？何か作るつか？」

「ああ、適当に頼むわ」

欠伸をしＴＶをつけるが面白そうな番組がなかったので消した。す
るとピンポンという音が聞こえた、家のインターホンだろう。か
なめが料理中ということで俺が出ることにした。

「あ、あのこんにちは。かなめさんいますか？」

黒髪で花の髪飾りを付けた女が立っていた。こいつも髪が長い。か
なめほどじゃないが、背中にかかっている。

「ああ、かなめなら今料理中だ。まあ何だ、上がれよ」

「あ、お邪魔しまーす」

とりあえずかなめの知り合いなら良いだろうと思い家にあげる。

台所を通る際にかなめが驚いていたが知らん。

そして調度出来ていた朝食を取ると俺は家を出た。その際に女の名前を聞いた、佐天涙子か。

家を出た俺は日課になったジャングルジムに向かった。理由はわからないが一日一回行かないとイライラする。まるで麻薬の样だが、散歩にもなるし健康にいいのは間違いなかったから続けていた。

30分、それだけの時間を景色を眺めることに使う。今日は天気がいいので富士山が見えた。

「おい、ねーちゃん今日はなにやるんだ？」

「ああ？んだよてめーら俺は忙しいんだよ」

声をかけられジャングルジムから見下ろすとガキンチョが5人いた。ここらに住むだいたい毎日会う顔だった。

「忙しい奴はジャングルジムに何か乗ってボーツとしないぜ？なあみんな」

ウンウンと頷くガキども。良い度胸だ。

「よしてめーら今から追い掛けてやるからにげろよ。捕まえた奴からぼろぼろにしてやるぜ！」

言うと同時に逃げはじめのガキども。俺はジャングルジムから飛び降りるとにやりと笑い追い掛けはじめた。

「はっはっは、全員スタボロだなあこのやるー」

今、俺の目の前には疲れたのかガキども5人が息を切らせて転がっていた。だがその顔は全員笑っていた。

「もう3時か…てめーら遊びすぎなんだよ。俺は疲れたし飯食ってねーからもう行くぞ、てめーらはかーちゃんからおやつもらってろ」

じゃあなといい大通りに向かって歩きだした。後ろからは「待たなねーちゃん」という声が聞こえたので後ろ向きに手を挙げて返した。

3時過ぎくらいだろうか？ピークを過ぎたファミレスに見覚えのある顔を見つけて今日くらいは良いかとファミレスに入って行った。

「おい、一方通行。おまえロリコンだったのか？」

「あア？」

「ひえつまさかの自殺志願者にミサカはミサカは戦々恐々」

声をかけると一方通行は睨みを効かせ、もう一人のぼろ布を纏った女のガキは言っていることと顔が一致していなかった、何で自殺志願者が現れると顔をキラキラさせるのかわからねえ。なんて考えながらとりあえず空いていたガキンチョの隣に座った。ガキンチョの前には既に料理が並んでいた。ちょい冷めてそうだが何故か食っていなかった。なるほど、一方通行のがくるのを待ってるんだろっ。

「……日本じゃあ人身売買は違法じゃなかったか？ああ、ここは学園都市か…」

「どっちにしても違法だろうがア。それにこいつはかつてについて来やがったんだよ」

「ガーン！？ミサカはミサカはこの人とともに話せる人がいることに驚愕してみたり」

こいつうるせえな、よく話してられるもんだなと一方通行の顔を見た。一方通行はちょうど料理を持ってきた店員に顔を向けてそれ俺ンだといって目の前に置かせていた。

「店員、俺はこれだ」

そういつてハンバーグのセットを頼んだ。セットで600円は安いのか？定価がわからねえから何とも言えないな。

「まあ先に食えよ、冷めてんぞ？食わねえなら俺が」
手を伸ばすとガキンチョは慌てたようで。

「わー！これはミサカのであなたのは後から来るって既にレタスが一枚減ってるー！ってミサカはミサカは涙目になってみたり」

「その際にフライドポテトも減ってた」

「うっ、酷いとミサカはミサカは姑にいびられる嫁を演じてみたり」
何を言うか、主菜を取らないやさしさを見せてやったのによ。

「うぜエ」

一方通行のドスの聞いた声と睨みそれをみた俺とガキンチョは。

『ごめんなさい!』

二人が仕種と声を同じに一方通行に謝っていた。

いつまで経っても俺の料理が来ないので店員に文句とトイレに行っている間に不思議なことが起きた。一方通行とガキンチョが居なかったのだ。

「置いてかれたか？」

食べかけの一方通行の料理とガキンチョの料理を見て首を傾げた。途中で出て行ったのか？

まあせっかく料理を頼んであるので食べてから出た。伝票が無いことから一方通行が払ってくれたんだろう、そこだけは感謝だな。

午後6時半過ぎに俺の携帯がなった、その発信者は珍しいことに一方通行だった。あいつから連絡があるなんて奇跡の一つだろう。そんなことを思いながら電話に出た。

「なんだ？」

『オマエ、あのガキを知らねエか?』

「ああ? 知らねえな、つーかおまえと一緒に飯と俺を残して出てったんじゃないのか? 御蔭で一人淋しく食ってたんだぜ?」

『そオカよ、オマエもガキを探せイイな? 見つけたら連絡しろそれ以外で連絡してくンじゃねエぞ』

ブツツと電話が切れる、一方的過ぎるだろう、まあアイツの珍しい頼み事だ探してやるとするか。

探すとなると人手は多い方がいいだろう、姉もとい兄貴に電話をかけた。

『もしもし?』

「御坂美琴っているだろ?」

『うん』

「そいつを小さくしたようなガキを探せ、すぐにな」
『わかった着替えたなら「すぐにだ」うつ…わかった』

とりあえず人手は増えた訳だ。

『つつちー、青ピ、今日は解散ね。じゃあねかなた、見つけたら電話するよ』

「ああ」

電話を切ると少し能力を使い走り出した。体感時間は通常の半分になっただけだ。

8時頃一方通行から連絡があった。何でもガキンチョが見つかったらしい。場所を聞いて最高速度で向かうとそこには兄貴も居た。連絡もしていないのによく見つけたものだと感じた。

だが様子がおかしい、一方通行は汗でびっしょりになってガキンチョの頭に手を着いているし兄貴はメイド服で…まあそれはいい、どうやら時間操作をしているようだった。だが双方とも集中していて俺に気づいていなかった。

その時、がさりという音が聞こえた、スポーツカーから這い出して黒光りした銃を持って二人に歩み寄る存在を認知した。アイツが何をするのかわかった瞬間、俺は能力を全開にして銃を蹴り飛ばした。そのまま顔を蹴り、腹を蹴りボコボコにしていると不意に肩に手を置かれた。兄貴だった。

「もう充分だよ」

そう聞くと俺は能力を解除した兄貴は青い顔をしていた。自分と一方通行、両方の時間操作をしたからだろう。兄貴はまた集中を始めていた。それを俺は只見ているだけしか出来なかった。

でも、間違いなくこのガキンチョは救えるだろう。だから俺は安心してボコボコにしたオッサンの車で寝ることにした、勿論オッサンはトランクにほり込んであるし武器もマガジンを引き抜きマガジ

ンはテキストに全力で投げ捨ててやった。

運転席に座りリクライニングを寝かせ目を閉じた。

8月31日かなた（後書き）

うーん、一通さんの頭を破壊しない方向だけど大丈夫何だろうか？

8月31日

かなたから連絡があつたのは6時30分過ぎだった、何故か知らないけど打ち止め（ラストオーダー）を探してくれていう電話だった。……打ち止めで良いんだよねかなた、名前とか全く聞いてないけど。何だか先行きが不安だけど仕方ない。

「それじゃ、俺達は帰るぜい。といっても俺はすぐそこなんだけだな」

「まあつつちーはねー、青ピはパン屋に下宿してるんだっけ？」

「覚えててくれたんやね、そうなんよその子がめっちゃかわええんやで」。あ、もちろんかなめも最高にかわええから嫉妬せんといてなー」

青ピに話を振ったのが間違いだったかもしれない、誰が可愛いとか聞いたのさ。まあ青ピが話してるうちに財布とか携帯をポケットに入れる、これでいつでも出れるメイド服なのがやだけど。

「それで外、出るのか…？」

つつちーが呆れたふうに聞いてきたけど「察して」と一言言つと何とも言えない顔になっていたので察してくれたんだろう。

とりあえずまごまごしてるとかなたに怒られそうなので外に出る。

「じゃあね」

その一言で二人と別れた。青ピはまだつつちーの所で遊んでいくようだった。

打ち止め探しということで打ち止めの場所は大体わかっていた。超能力者『超電磁砲』の量産型能力者の開発を行っていた施設跡地。

その施設跡地の場所も、僕が知らずのうちに関わっていた計画を調べているうちに知っていたのでそれほど急いでなかった。早く着いた所で僕じゃあ何も出来ないし、だから時間操作はせずにゆっくりと目的地にむかって歩いた。

途中、影が物凄いスピードで僕の進む方向とは真逆に走って行った。僕に気づかなかったみたいだけどかなただろう、ご苦労様と心の中で呟く。焦ったかなたを見てもものんびり歩いていた。

僕が施設跡地に着いた時にはスポーツカーは止まっていたけど誰も居なかった、僕が一番乗りらしい。何だかなあと思いながらスポーツカーに寄って行った。

「すみませんちょっと良いですか？」

コンコンと運転席をノックするとビビったような動きを見せた天井亜雄がいた。精神的に追い詰められてるんだろっ。

「な、なんだ！わ、わたしは忙しいんだ」

「あ、すみません。少し場所を教えてもらいたくて」

すると天井は安堵したようで何だ？と聞いてきた。

チラリと横目で自分が歩いてきた方を見る、一方通行が歩いて来るのが見えたのでそれをごまかすようにポケットを探る振りをした。

「あれ？すみませんメモ無くしてしまっただけで……打ち止めてどこにいますか？」

間を置いて後半部分と言った直後、能力を使い開いた窓に手を入れ鍵を開ける、ドアを開けると引きずり降ろした。その間0.2秒。正直少しでも抵抗されてたら降ろせなかった、貧弱な自分が嫌になる。

「へエ」

僕の行動を見ていたであろう一方通行が感嘆の意を示していた。その一方通行が延髄を思い切り蹴っていた。天井、ご愁傷様。

「で、見つけたは良いけど何するの？僕何も聞いてないんだけど」

「うるせエ」

理不尽だ。

一方通行は電話しているので僕はその電話を聞いていた、説明が面

倒だったらしく僕にも聞かせる様にしていた。

その途中で打ち止めが意味不明な言語を話し出したりしててんやわんや。まあ事情は全部知ってるんだけどね。簡単に要約すると。

打ち止めにはウイルスコードなるものがインストールされていて、それが発動するとミサカシスターズが暴走して猛威を振るうというもの。

それを除去するには打ち止めを殺すかウイルスコード自体を改竄し正常な状態に戻す、とか。正直わからないということがわかったくらいだったけど、まあ僕自身何も手伝える事は無いしね。

それで今、一方通行が打ち止めの頭に手を当て改竄し始めた。

僕は打ち止めに時間操作を行い起動までの時間を遅くし、一方通行にも早く改竄し終えるように操作した。

初めて多数を目標に時間操作をしたけどこれが辛い。動く気にならないし汗も勝手に出てくる。

そんな作業を始めてすぐ、物音が聞こえると打撃音が続いた。その方向に顔を向けると天井がボコボコにされていた。一瞬迷ったけど、ボコボコにしているのはおそらくかなただろう、人殺しはさせたくないため無理矢理自分に時間操作をかけた。頭がパンクしそうだ。

フラフラと歩きかなたの肩に手を載せるとこちらに振り向いた、ずいぶんキレているようだ。

「もう充分だよ」

そういうと罰が悪そうな顔をしてボコボコにするのをやめたので自分の時間操作だけをやめまた一方通行の傍らにもどった。チラチラとかなたの方を見てるとかなたは天井をトランクにほり込んで転がっていた銃からマガジンを抜き投げ捨てていた。普通逆だろう。

マガジンを投げ終わると小憎らしいことに車のリクライニングで寝はじめた、何かやろうよ。どっちかの時間操作を肩代わりしてくれてもいいんだよ？ああ、出来ないっけ？

なんて思っていると作業が終わったらしい、打ち止めの口が動き始めた。

「コード000001からコード357081までは不正な処理により中断されました。現在通常記述に従い再覚醒中です。くりかえします」

止められたらしい、止まるとわかっていても安心出来ないのは僕にとってこの世界がリアルだからかもしれない。なんて思っていると後ろから叫び声が聞こえ振り返った。天井だった。

「あ、はは、う、あああああああ！？うがあああああああああ！？」

その手には銃が握られていたが別に怖くはない、さっきかなたがマガジンを抜いていたから。

しかし、ダァンという音が鳴り響いた。そのとき、衝^{ショック}槍弾頭^{ランサー}が僕の左胸辺りを食い破った。その弾は射線上にいた一方通行にも向かつ

ていた。当たる事はないと思っていたが、弾は額に飲み込まれて行った。

「な、んで…」この時の僕には知ることはなかったけど、一方通行にはまだ僕の時間操作がかかってた、だからこそ反射すると銃弾が僕に当たるのがわかっていたんだろ、慌てて演算をしたらしいが間に合わなかったということらしい。ちなみに銃に弾が残っていたのは仕様らしい、マガジン抜いただけじゃダメだったんだね。

ともかく、僕は崩れ落ちる寸前にかなたが走って寄ってきていたのを他人事のように見ていることしか出来なかった。まったく、なんて夏休みだよ。

ダンという音に驚き急いで運転席から出ると、そこには銃を持つ俺がボコボコにしたオッサンと、崩れ落ちる兄貴と一方通行の姿があった。何が何だかわからなかった、ただ兄貴と一方通行が危ないということとはわかった。すぐに駆け寄る。兄貴は左胸、一方通行は額が撃たれていた。

「あ、ははははあは？反射されてない？あはははは！？」

狂った声が聞こえる、その声は不愉快だ。睨み、いつでもコイツを殺る準備だけをしていた。いつでも、いける。

そんなときまた発砲音が響いた、撃たれた？いや、あいつからじゃない。誰だ…？そう、辺りを警戒していると、目の前のオッサンが崩れ落ちた、さっきの発砲音はオッサンの腹部を撃った音らしい。崩れ落ちたさきに白衣を着た女が立っていた。コイツも知らない奴

だ。

「デメエは…？」

「そんなことより早く医者を呼びましょう」

その女は手早く電話を取り出すと一度電源ボタンを押していた、もしかしたら一方通行と電話してた奴かもしれない、GPSでここまで来たんだろう。そのまま通話していてすぐに救急車が来るらしい。

安心したらへたり込んだ。しまった。

そのあとのことはあまり覚えてねえけど、途中オッサンが起き上がろうとしたのを見て思い切り蹴り入れて黙らせた。後は救急車が来ていっしょに乗って病院に向かったらしい。救急車で寝たらしい。つ着いたかわからなかった。

9月1日（前書き）

遅くなりまして申し訳ありませんでした。久々の更新二ヶ月以上あ
いたかな？やってしまった感癖になんないといいけど…

言い訳やらなにやらは後書きで

9月1日

結局、兄貴は治らずに入院した。一緒に撃たれた一方通行と一緒に蛙みたいな顔をした医者ところに居る。

兄貴は命に別状はない。意識は無いけどそれは失血からくる貧血が原因らしい。

一方通行も一命は取り留めたけど着弾が頭だからまだ予断は許されない状態だといっていた。

それ以上の事は聞けなかった。

そんな中一人無事だった俺は何をしているかというところ……

「え？かなた居ないのか？…参ったなあ」

目の前で頭をガシガシと搔いて悩んでいるのは上条当麻、あろう事が俺にシスターの子守しろとか言っ来て来やがった。

「うん、かなた友人が出来たみたい何だ、そこに行くって」

そろそろ気づいてる奴もいると思うが今俺、神城かなたは兄貴、神城かなめの振りをしている。俺のせいで怪我をしたんだ、出席日数くらい稼いでやらないと。

「そっか、悪いな朝から変なこと聞いて」

「いや、大丈夫だけど…時間大丈夫？」

上条はやべえ！と言うと家の玄関から飛び出していった。俺は既に着替えも準備も出来ているから外に出て上条を待ってやった。

「！悪い！待っててくれたのか」

「まあ、隣だし」

実は待ってたのには理由がある。俺、学校の場所知らないんだよ。

「じゃあ行くか」

当麻のそれにうんと答えると隣に並んで歩きはじめた。

（何か不幸続きな学校生活を覚悟してたけど、幸先いいんじゃないかねえか？）

「ん？顔になにかついてる？」

さっきからちらちらと見てくる、一応兄貴と同じになるようにウィッグ被って来たんだけどな、ズレたか？

「い、いや何でもねえ」

そんな焦って首振られてもなにかあるって言ってると思えねえよ。

駅に着いたらトイレの鏡で確認するか。

「はあっはあっ」

何でこうなった。朝からマラソンとかふざけてやがる。あのカラス焼鳥にしてやる。あ？何が起きたかって？カラスが線路上に石を置いていったらしい、そのおかげで電車が止まって上条と俺は走っているわけだ、ふざけんなこのやろう。

時間操作でもいいけど上条を置いていくのが心苦しい、だから使わずに付き合っているんだけどよ…しんどい。

「ぜえっはあっ。か、かなめ、先に行つてていいっぞ」

「ふうっふう。い、いいっよ。つきあうっつて」

そんなことより疲れたもういいんじゃないかな？兄貴、俺じゃあ力不足だったみてえだ。何て思っていると少し前を走っている上条のポケットからなにか落ちたのが見えて止まった、財布だった。あいっは…何を落としてんだよ…。と呆れながらも拾い自分のポケットにしまうと前を向いた。

「朝からおさかんですねー」

50メートル前方で御坂美琴と騒ぎながら走っていた。…むかく。何がむかくって人が財布というライフラインを拾ってやっているうちに楽しそうにしているのがむかく。というわけで時間操作を使い二人に追いつく。

「おはよう御坂さん」

「あ、おはようかなめさん。かなめさんもコイツの不幸に巻き込まれたんですか？」

「そうそう、だからこれで美味しい物でも食べさせてもらうんだ。」

隣で走りながらポケットをまさぐってえっあれ？不幸だー！？とか叫んでる奴がいるけど気にしない。むしろ拾ってやったんだから感謝されるべきだろ。

「へー、じゃああたしもそれ良いですか？」

ニヤニヤしながら俺に聞いてくる、それに勿論と答えるとまた隣で不幸だー！？という声が。

「当麻朝からうるさい、近隣の人々に迷惑だよ？」

ずーんという効果音を発しながら俺と御坂と上条は学校に向かった。正直疲れてヤバイ。

「えーであるからして…」

やべえ、超眠い。始業式の校長の話しがこんなに長くて辛いものだった何て知らねえよ。隣にいるはずの上条もいねえし…これ見越して始業式ぶっちしたんじゃないやねえだろうな？

そつえばさっきのホームルームはなんだったんだ？転入生の影が

薄すぎる。というよりその前のインデックスに全部食われた感じだな。まあ俺が気にするようなことじゃねえんだけどな。まあかなめに伝えといった方がいいか転入生姫神だっけか？

学校が終わりさて帰るかというとき上条が声をかけて来た。

「かなめ、このあと遊びに行かないか？」

「あ、ごめん当麻このあと用事があったさ。またこんど誘って？」

「あゝわかったまた明日な」

とまあこんなやり取りがあった。遊びに行くのはすげえ魅力的だけど兄貴に成り切ってる状態だと疲れるしな、それに兄貴の様子を見て起きたいからな。

「うん、じゃあね当麻」

そして学校をでる、後ろがなんか騒がしいが気にしねえ。当麻の声とか聞こえねえからな！ちよつと心が揺れてたのは秘密だからな！？

駅に着き電車に乗り込む。他の学校も始業式だから昼までなんだろう、結構人が乗っていた。

「あれ？かなめさんだ、初春」

ん？名前呼ばれたか？と思い振り返ると佐天と花満開な奴が居た。初春っていうらしい。

「ん？どうかした？」

「いえいえ、ちょうど見かけたので」

「このあと一緒に出かけませんか？ちょうど非番なんですよ」

またか、すげえ引かれるのにいけないジレンマ。兄貴何なんだよ。

「んー、ごめんちょっと今日は用事が…また今度で良いかな？」

「あうーわかりましたまた今度白井さん達もよんで行きましょう」

「おっ初春にしては良いこと言うね」

「それってどういうことですか！」

青春青春。俺は兄貴が復帰するまで青春を堪能できんのか…正直ジヤングルジムにいつてないから落ち着かなくなってきた。

「ん、駅に着いたね、じゃあ僕は行くね？」

「あ、はい」

電車のドア越しに手を振る、ドアの向こうの二人も手を振っていた
電車が見えなくなると改札を抜け家に向かう。

「暑い…やっと家についたか…」

家に入ると冷房の電源を入れウィッグを外す。蒸れて辛かった。
汗が酷いな…風呂でも入るか…

9月1日（後書き）

言い訳タイム！

予定

プロット作成する 話しがある程度まとまって余裕ができる アク
セスも増えて名前が売れる 彼女ができる

現実

プロットを携帯のデータに入れて作成する 携帯をなくす 話しが
更新されないのでアクセスが増えない いくえ不明

しかもプロット三回作って三回消えるという不幸属性を持ち合わせ
最強に見えた俺に隙はなかった。

もうプロット作成するのは諦めました。フラグとしかおもえなくて
嫌になった。

もう携帯ロストしたくないんです。

そんな自分は9級ブロンティスト。なんかブロントさん関係で書いて見ようかな…

9月1日

風呂の描写？変態がふざけたこと言ってんなよな！？

とりあえず家でゆつくり昼飯を食った後、冷房の聞いた幸せな空間を後ろ髪引かれる思いで泣く泣く後にした。冷房つけっぱだけどな！電気代？兄貴が払ってるからいいだろ、うん。

ブラブラと歩きながら病院を目指す。行く前にジャングルジムによって行く。公園には誰もいなかった。

「誰も居ねえ何て珍しいな…まあゆつくり出来ていいか」

今日は短めに景色を眺め病院に向かった。やっぱりあそこ落ち着くな。病院につくと受付に声をかけて病室に向かう。病室に入ると兄貴は起きていてこっちを見ていた。

「ん、かなた。お見舞いでも来てくれたの？」

「一応…俺のせいだしな…」

「うん、ありがとう」

sideかなめ

どうやら僕は一日入院するだけで出れるようで、もう退院できた。さすが冥土帰しといわざるをえない。

かなたが今日学校に行ってくれたらしく報告ついでの雑談となって居たけど出るように言われたので病院を出た。なんだかんだで夕方になっていた。

「ん〜ご飯でも食べに行こうか？」

「お、いいなそれ。じゃあ学食食いてえ。あるんだろ？学食レストラン」

無いこともないけど…あれ？今日はそこで当麻がドンパチやってなかったつけ？やってた気がする。

「……………ちよつとまってるね」

携帯を取り出して学園都市のニュースを見る。残念かなた学食は諦めた方がいい。

「はいかなた」

携帯を見せる。そこにはこう書いてあるはず。『地下街で謎の爆発？地下街はアンチスキルが封鎖中』みたいな感じのことが。

「んだよ、朝からホントついてねえな…飯も思ったとおりに食べねえのかよ…」

「まあまあ、今度にして今日は他のところに行こう？」

そういつとかなたは舌打ちしながら歩き出した。それにつづく大通りの方に向かう。そこで適当にご飯を済ませてしまおうという魂

胆だ。

「おい、あれ食おうぜ?」

そしてかなたが指差したのは『巨大ピザ食べ切れたら賞金あり』というものだった

「さて何食べよっか」

「おい、無視してんじゃねえよ!あれだって!今なら行ける気がするんだよ」

「絶対気のせいだって!僕より食べないのに何言ってるの!」

何とかかなたを説得するとその隣の店に入る。ラーメン屋だ。

「ラーメンーつと」

「チャレンジラーメン」

ギョーンという擬音が聞こえそうな位の速度でメニューを見直す。何で右下にひっそり書いてるの?目玉なんだからもっと目立つところに書いておこうよ。それと外にもさ。

首をあげると店員はオーダーを取り終わったからか去って行った後だった。

「かなた…」

「任しとけて、今ならホントに行ける気がするんだって!」

絶対無理な気がする。取りあえず僕のラーメンが先に来た、当たり前か普通のだし。先に食べているとかなたのも来た。麺2kgらし
いけど…

「かなた？」

「…正直悪かったと思っている。まあ物はためしだいぐぜ！」

その後、かなたの姿を見た者はいなかった。

「1/4位しか減ってないんだけど」

「食いきれるわけないだろ常識的に考えて」

「じゃあ頼まなきゃいいじゃん…」

なんでこんなに無鉄砲なんだ…絶対僕とDNA違うだろ…

「男にはな…やらなきゃならねえ時があんだよ」

「それ絶対今じゃないし、それにかなたは女でしょ…」

チラリとメニューを見直す。さようなら2000円。高いなあ…

会計を済まし外に出る。計2650円になりました。経済事情的に
大打撃。

「いやゝ食った食った、もう当分麺類はいらねえな」

「そついうのは食べきってから言ってね」

横を歩いてるかなたを睨みながらため息を一つ。当の本人は満足そうに笑っている、反省はしていないようだ。今度はかなたに会計させよう。

「よっしゃ、じゃあどつか遊びにいこうぜ!」

「一応僕今日退院した身なんだけど…」

「ゲーセンいこうぜゲーセン」

話を聞いてほしい、切実に。まあかなただししょうがないか…。いやいや、しょうがないって何？僕が兄でかなたが妹僕の方が偉いはずなんだ!…と思ったけど世の中兄貴が偉いなんて事はあまりないし…ああ、辛い。

「ゲーセンって行ったって地下街閉鎖って言ってたじゃん。他のところは遠いから嫌だよ」

「んだよ、ノリが悪いな。モテねえぞ?」

「ぐっ、余計なお世話だよ」

なんでこうも心をえぐる事を言うのだろうか?もう少し僕に優しくは…ならないね、諦めよう。何だか諦めてばかりな気がする。

「あ?あそこにいるの転校生じゃねえか?」

「ああ、姫神さんだね。そういえば転校生何だっけ」

「まあインデックスが乱入してきたせいで影は薄くなったけどな」

そういうのは言わなくていい。ってなんかキョロキョロしてるじゃん、どれだけ地獄耳なの？

「御学友と会話しねえのか？」

「忙しそうだからいいよ」

「どう見ても手ぶら何だが」

「気のせいだよ」

「お前絶対姫神嫌いだろ……」

「何その言い掛かり……」

何てやっているうちに姫神さんを見失っていたり。まあいいんだけどね、彼女不遇だし。いや、良くはないんだろうけどまあいいや。

「じゃあ、ご飯も食べたし帰る？」

「だからゲーセン行くんだって、話し聞けよ」

それは僕の台詞だ。

「行くにしたって警戒出てるしやってないんじゃないの？」

「なら飯屋もやってねえだろ」

こういうときに鋭いんだから…というかどれだけ家の生活費を浪費したいの？嫌がらせ？嫌がらせなの？

「実はもうお金がないんだ…」

「名門校に通ってたんだし金が無いとか言う嘘はいいから、預金かなりあるの知ってたんだぜ？」

「勝手に人の預金通帳見ないでくれるかな？」

「まあ気にすんなって。それより行くぞ」

はあ…もういいや、帰ろ。うん、それがいい。

というわけでかなたと反対方向に歩きだす、まだ向こうは気づいてないようだった。

「って！おいこら！？」

どうやら気づいたようだ、時間操作を使い走り出す。まあ当然向こうも使ってるわけだけど…こうなったら単純に体力勝負、まあ負けるつもりはないね。

「逃がさねえぞこの野郎！」

「逃げ切るよ！」

かなめは 車道に 飛び出した 横切る 成功

かなめは 反対側の 歩道に たどり着いた コマンド 逃げる

（時間操作で遅くしているので車も遅い遅い。）

「てめえ、車道に飛び出してんじゃねえ！危ねえだろ！」

かなたは まだおいかけてくる

「それじゃあその言葉そのまま返すよ！」

言い合いながらも走る。無駄に体力使っちゃったよ、もう怒鳴るのはやめよう、うん。そんなこんなで走っていたら寮が見えてきた。

「よし！逃げられる」

「うつつ…うええ…」

泣き声が聞こえた コマンド ふと後ろを振り向いた

（時間操作中に聞こえるなんて…）。

「な！なに泣いてるの！」

泣き声の主はかなただった コマンド 急いでそばに駆け寄った。

「かかったな！馬鹿野郎！」

デーン なんと かなたの 演技だった

「し、しまった！」

かなめは 捕まってしまった YOU LOSE

「かなた……そこ家なんだしもう帰ろう?」

「チツ仕方ねえな……」

何だか良くわからないが帰るらしい、疲れたのかな? 僕も疲れたしね。

「あれ? かなめが二人? なんや? 僕は夢でも見てるんか? ええ夢やもっとやるべきや……」

「おい、何だこの変態は」

「ダメだよ? 見ちゃ、ダメ」

かなたの言葉が辛辣だけど、まあ……いつか青ピだし。

「そんなこと言わんといてな、僕泣いてまっで?」

「…なあ、今日の晩飯はなんだ?」

話題転換、まあその話題は直ぐに終わる。残念だけど。

「さっき食べたでしょ?」

「話しくらい合わせろよ……」

いやまあ分かってたけど。

「ごめん…」

「もう帰って風呂入ろうぜ？」

「風呂…やと？」

青ピが何かブツブツ言ってるけど聞き取れない。…まあ聞き取れないほうが幸福かもしれないから気にならないけど。

（今の言葉から察するに風呂には二人で入ってるってことやんな？
ふたり…二人で（ズギューン）（ピー）（更に中略）やなあ…はあ
はあ…これが現代の桃源郷や！）

「おい、何かキモいから早く離れようぜ？」

「同感、幸い気づいて無いみたいだし早く行こう」

ちょうど降りて来ていたエレベーターに乗り込む、青ピはまだブツ言っていた。扉を閉め、上へ。何だか疲れた、病院での寝疲れだけじゃないねこの疲れかた。もう眠い、早く風呂入って寝よう。

「おお、涼しいな。」

部屋に先に入ったかなた、何故か涼しいと言っている。

「え？」

涼しい？今夏なんだけど、まさか冷房：いやいや、流石にそんな阿保な真似を：うん、涼しい。

「かなた、何時からつけてる？」

「あ？昼過ぎじゃねえか？」

「今月お小遣なしね」

当然の処置だと思うけど、どうだろうか？というかこんな奴がいるから地球温暖化が止まらないんだ！

「んだとお？てめえ喧嘩売ってんのか！？お！？」

なんでこんなにガラが悪いんだ、と言うよりどこで覚えて来るの？
こんなの。

……………一方通行かな？というより一方通行に突っ掛かって来るチンピラ共かな？何だか納得。

「喧嘩はしないけどお小遣は無し。決定」

「よし、腹を割って話そうか。」

「だから決まったんだって」

その後取っ組み合いの喧嘩になってお小遣が復活したのは秘密。

9月2日前編

「あたた、いろいろ痛い…」

昨日、痛めた場所をさすりながら窓の外を眺める。外は薄暗くどんよりとした雲に覆われていて今にも雨が降りそうだ。はあ、ため息つき部屋の時計に目を向けた、朝6時前学校があるとは言えずいぶん早起きだ。

「さて、お弁当つくろ」

のらりくらりとキッチンに向かう、炊飯器を見るともう炊けるみたいだ、炊飯器の予約ができているのを確認し冷蔵庫を開けた。

「ん〜どうしよっかな、面倒くさいし炒飯でいいかな？」

適当に材料を選ぶ、賞味期限を見てはあれもこれもと引つ張り出し具材が決まっていく。

ネギ、かまぼこ、豚肉、卵、ニラ、鮭フレーク、キムチ。もう炒飯じゃなくて漢炒めな気がしないでもない。いや真の漢としては仕方なく行き着いてしまう料理だね、仕方ない、行き着くんじゃなくて行き着いてしまうのが真の漢。

フンフンと鼻歌を歌いながら材料を切り刻む、キムチの匂いが朝からそそる。

豚肉を炒め…等考えて順番を決めて炒めようとしたけど却下、一度に炒める。

ジュージューといい音と匂いをもし出し豚肉が焼けたら、卵、続いてご飯投入、ぱらぱらにはならないなぜなら漢の料理だから。

「朝からこんな重いの食べねえよ…頭おかしいんじゃないの？」

後ろからフライパンの中を覗き込んできたかなたがごみを見る目で言ってきた。

「いいんだよ僕のお弁当なんだから、かなたの朝ごはんは別にあるから」

「そうか、まあ当然だよな」

こいつは何を言っているのか？まだ自分の立場がわかってないのかな？嫌、ごめんやめてさわやかな朝ごはんありますから、やめてやめてフライパン触れたら熱いから。

…ふうかなため僕に恐れをなしてリビングに逃げたな？ちよい奴。とりあえず漢炒めは皿に盛って冷めるのを待つ、あつたかいまま入れたら食べるころには痛んじゃないかな。冷めるのを待つ間に僕と仕方なくかなたの朝ご飯をつくる。目玉焼きにベーコン、ウィンナー、トースト二枚の洋風ブレックファスト。

「朝は米だろ、お前日本人じゃねえな？」

「日本人だよ、というより僕が日本人じゃなかったらかなたも日本人ではないでしょ…」

まったく、朝から疲れるよ…

そんなこんなで、朝食を食べて片付けてお弁当を包み着替えて（女子制服）7時半過ぎ、今出れば遅刻は無い、まあ早すぎるんだけど。

というわけでいやに静かなお隣さん宅へ侵入。鍵？ノブ回したらあいてたから閉め忘れだと思う、無用心。

部屋を見渡すとどう見てもインデックス（爆睡）しかない。確か風呂場で寝てるんだっけ？そーっと風呂の扉を開けるとまだ寝ていた、中はごちゃごちゃしている。携帯のアラームは機能してないらしく完全に遅刻コースだねこれは。

仕方ない、学校でぐちぐち言われるよりはいいでしょう起こそう。

そして風呂場に踏み入ろうとした瞬間、足元から何かが飛びだした。

「うわっ！」

猫だ、たしかスフィンクスって名前だったかな？風呂場からインデックスの方に走り寄りこつちを見ていた。
ふう、びっくりさせないで欲しい。

いざ、起こそうと思い風呂場に踏み入る。そのごちゃごちゃした足元に石鹸があつたらしく滑った。

「うあー！」

「ごはっ！？ななななんですか！インデックスさ…ん？」

風呂桶に向かって転ぶとか…コントじゃないんだから、何やってるんだ僕は。取りあえず顔を起こし当麻の様子を伺う、あれ？顔が無い？そう思い下を見るとスカートの中に当麻の顔が収納されていた。

「お、おはようございますかなめさん」

スカートがモゴモゴと動く。

「うわああああー！」

ぱつと飛びのく、まあ狭いから足の方に行っただけなんだけど。

「お、おはよう当麻」

やばい、やばい、なんで朝から濃厚なホモスレが立ちそうなことをしなきゃいけないんだ。

【濃厚な】朝からお盛んですね【ホモスレ】

…うわああああああ。こんなスレがたったら間違いなく発狂する、それに巻き込まれた当麻もついでに発狂する。そしてインデックスが怒り狂…あれ？いやな予感とともに当麻と風呂の入り口を見る。

「イ、インデックスさん？」

引きつった当麻の顔、笑顔のインデックス

「朝から騒がしいんだよ？それに朝ごはんは？」

「い、今作らせていただきます」

そそくさと僕を置いて風呂場から退出して行く、当麻がインデックスの横を通ろうとした瞬間、インデックスは当麻に噛み付いていた。なんという早業、当麻の叫びとインデックスのわめきが朝の寮内に響き渡った。

なんだか申し訳なくなつたのと遅刻したくないのとインデックスのご機嫌取りのために当麻が犠牲になっている中、朝ごはんを作る。そのおかげか機嫌も戻り遅刻前に学校に向かうことが出来た。よかった。

「僕は当麻を絶対に許さない」

「なぜ！？上条さんがいきなり許されない理由がわからないっ！」

理由なんて簡単だ、当麻のアンラッキーが発動したおかげで遅刻間違ひなしになった。

「電車が遅れたのは当麻のせいじゃないの！」

「そんな！知らない能力者が勝手に止めたのは上条さんのせいじゃないと思うんですがねえ！」

街角で当麻とキーキー言い合う、正直歩いてる人のこの一言が無ければもっとヒートアップしていたと思う『なんだ痴話喧嘩か？リア充は死ね』と吐き捨てたメガネの顔は忘れない、というより僕は男だ、そこを間違えないでもらいたい。

「はあ…もう、不幸だー…」

「それに巻き込まれる身にもなってもらいたいよ。そうだね、今日はこのままどっか遊びに行こっか？」

もはや学校に行く気をなくした、いいよね今日くらいは、夏休み延長
することです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1460n/>

とある学生の時間操作

2012年1月12日20時53分発行